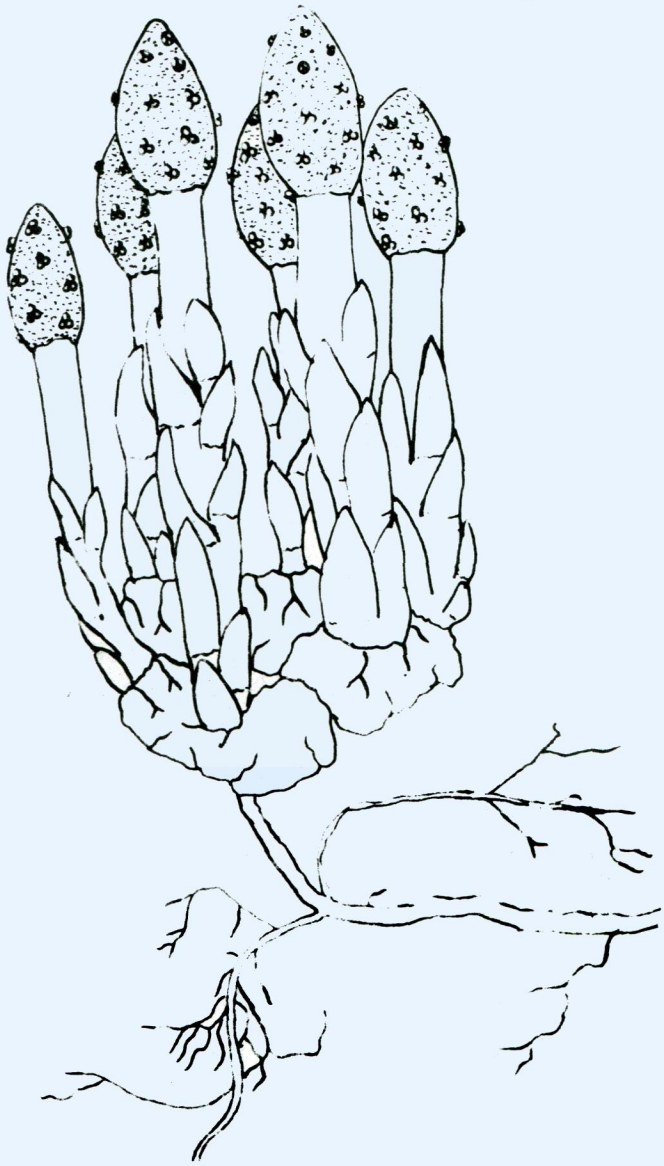
まのせ

第7号



1970

鹿児島県立加世田高等学校
生　物　部

クロアゲハの異常型

2年　田中洋海

１９６９年８月２０日，鹿児島県加世田市武田の竹田神社の裏林中で，ジャコウアゲハ，モンキアゲハ，ナガサキアゲハといったアゲハ類にまざって飛んでいたクロアゲハ（Papilio protenor demetrius）の異常型１♂を採集した。翅表は正常であるが，後翅裏面の赤紋がいちじるしく発達している。遺伝的なものかどうかの調査を依頼するために，生きたまま南山大学の阿江茂博士に送ったが，教授よりの通信によれば，到着時すでに弱っていたため交配することはできなかった。採集時片方の後翅の大部分が破損したが，左右相称であるので遺伝的なものである可能性も考えられる。

〔参考〕

保育社の「原色日本蝶類図鑑」によると，「クロアゲハは後翅の斑紋の変化が著しく『ベニモンクロアゲハ』と命名される異常型は，美しい代表的なものである。」とある。

（最後に，いろいろ御指導下さった阿江茂博士ならびにその連絡を世話して下さった出来和法さんに深く感謝いたします。）

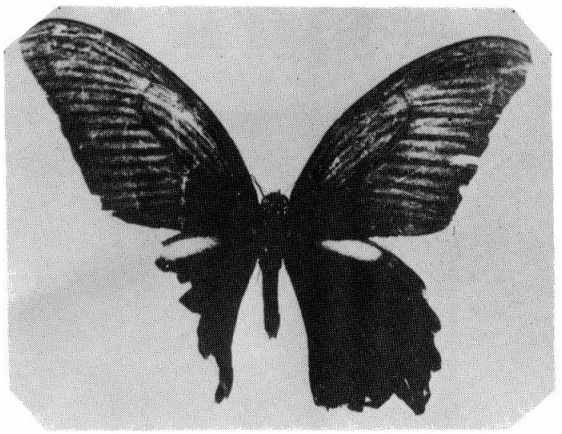
＜表紙説明＞

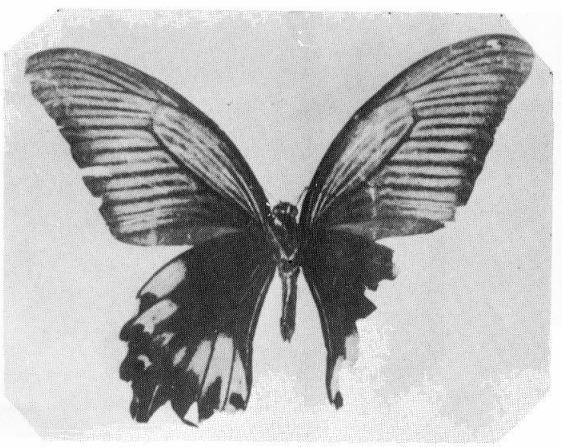
キイレツチトリモチ（Balanophora tobiracola MAKINO）

これは，さる１０月２８日（１９６９年）に徳永真氏（市内の旧朝日旅館経営）が，金峰山頂付近で，採集してこられたものである。

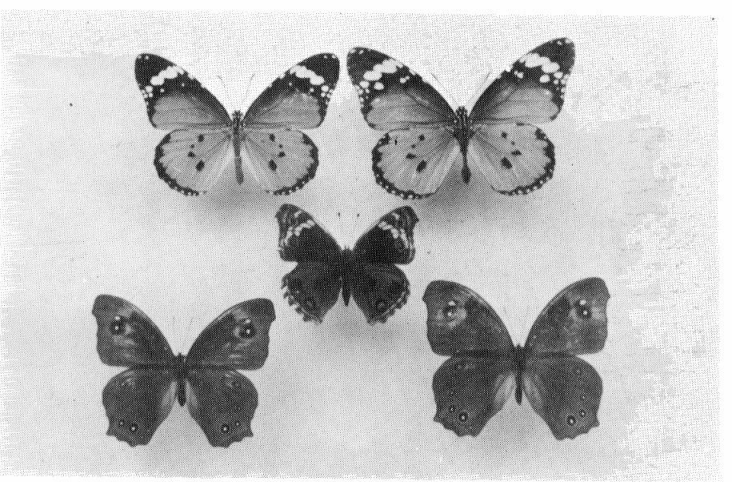
本種は，ツチトリモチに似ていて高さ５～１０cmの大きさで，トベラ，シャリンバイ，ネズミモチといった植物によく寄生している。ツチトリモチとの違いは，ツチトリモチの方は，茎が赤色で，雌雄異株であるのに対し，本種は，茎の色は淡黄色でどこかツクシに似たところもある。また，雌雄同株で，頭に雌花を密生し，所々に稍大形の雄花を散生する。和名のキイレは喜入（指宿郡）で最初に発見されたためであり，ツチトリモチは根の部分を鳥もちにするからである。分布は，亜熱帯〔九州（南部），琉球，台湾〕に産する。加世田市近辺では，佐方先生の話によると，金峰山長屋山，磯間山などにみられるそうである。

（表紙の図は，徳永氏からいただいたものをそのまま，部員の阿久根君が書いたものである。また，寄生していた根はシャリンバイで下方にのびているのがそれである。）



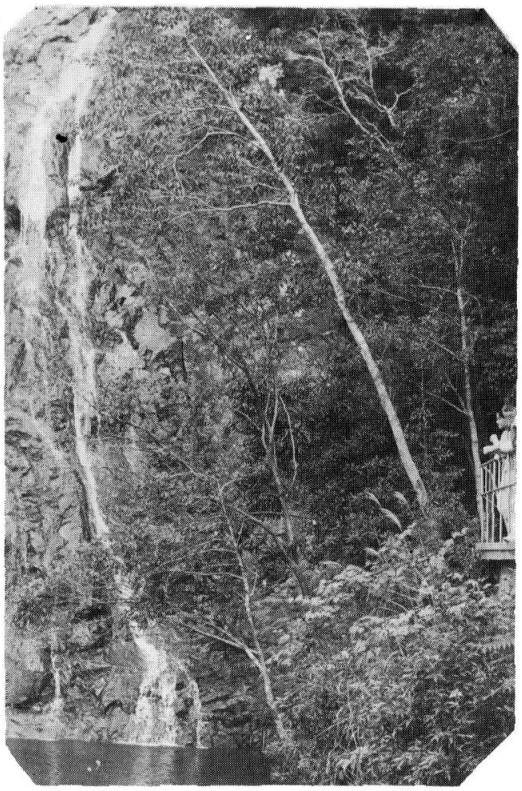


クロアゲハの異常型
右；異常型表
右下；異常型裏
下；正常型裏



１９６９年度に採集した迷蝶
（上；カバマダラ　中；アオタテハモドキ　下；ウスイロコノマ）

八瀬尾滝採集会スナップ



八瀬尾滝

ヒノキシダ

目　　次

ネムの木に来るアゲハチョウ類 ……（2年）田中洋海　浜川知博　本坊敏保 …… 3

ネムの木の花と果実 ……（2年）小野田章子　田実初子 …… 8

発光バクテリアの研究 ……（2年）大迫祥三 …… 10

あふちの木に着生する植物 ……（2年）大迫祥三 …… 11

ミヤマカラスアゲハの飼育 ……（2年）田中洋海 …… 12

わがはいは“もぐら”である ……（顧問）新山茂久 …… 13

酵素に関する諸研究

(1) 酵素の働きに影響する要因 (I) ……（2年）大迫祥三 …… 15

(2) 酵素の働きに影響する要因 (II) ……（2年）崎山順子　阪本京子 …… 16

(3) トウモロコシの種子の中の酵素 ……（2年）樋渡祥子　前田久美子 …… 18

カエルの脊髄反射の実験 ……（1年）山口秋生　山下志郎 …… 20

光合成に及ぼす波長の実験 ……（1年）本田ゆみ子　前田栄子　古市ヨリ子 …… 22

イネ科植物はどこからぬけるか ……（1年）西川路孝子　森永香代子 …… 24

ゴキブリのお話 ……（2年）春成正和 …… 26

採集会　上津貫～大浦 ……（2年）大迫祥三 …… 27

採集会　八頭尾滝 ……（2年）阪本京子 …… 31

早春の蝶“ツマキチョウ”を求めて ……（2年）田中洋海 …… 35

秋目採集記 ……（2年）浜川和博 …… 37

大隅を行く ……（2年）本坊敏保　田中洋海 …… 39

笠沙路採集記 ……（2年）春成正和 …… 42

1969年の南薩の蝶類記録 ……（2年）田中洋海　浜川知博　本坊敏保

（1年）阿久根雄二　山口秋生 …… 44

1969年部員活動記録 ……（2年）田中洋海 …… 53

俗説薩隅植物誌（2）津貫の巻（中篇）……（顧問）佐方敏男 …… 54

園芸メモ ……（2年）金竹修一 …… 77

１９６９年度文化祭反省 ……（２年） 田中洋海 …… ７９
特別寄稿 …… 山本英司先生 …… ８０
“思い出” ……（３年） 平川忠久　福島文徳 …… ８３
部員名簿 …… ８５

短報

No.１. ツマベニチョウを求めて （Ⅰ）（２年） 田中洋海 …… １４
ツマベニチョウを求めて （Ⅱ）（２年） 田中洋海 …… １４
No.２. ツマベニチョウを求めて （Ⅲ）（２年） 春成正和 …… ２１
No.３. ツマベニチョウを求めて （Ⅳ）（２年） 浜川知博 …… ３０
No.４. 八幡尾の滝採集記 （２年） 浜川知博 …… ３４
No.５. 「秋目～大浦～仁王崎～大当」採集記
（２年） 田中洋海 …… ３６
No.６. 「大浦～野間池採集記」 （２年） 田中洋海 …… ３８
No.７. ツマベニチョウを求めて （Ⅴ）（２年） 田中洋海 …… ４１

採集記に用いてある記号は次の通りである。

Coll	採　集
wit	目　撃
##	多数見られる
#	普通に見られる
+	少数見られる

Coll, wit の前の数字は頭数を示す

ネムの木に来るアゲハチョウ類（第３報）

２年　田中洋海・浜川知博・本坊敏保

今年も図書館前のネムノキが，薄桃色の花をほころばしはじめた６月７日，我々３人でネムの木に飛来するアゲハチョウ類について，今年もひきつづいて行なって，更に詳しい結果を追求しようと観察をはじめた。

しかし，実際観察を開始してみるとなかなかたいへんで，我々では精一杯やったつもりでも，その結果を見るとあちこち記録もれがあったりして，非常に残念です。

まず，目的は前回とほとんど同じく，次のようである。

① 本年度の各アゲハチョウ類の発生個体数の概要を知り，さらに前回のものと比較してみる。

② 各年度の各アゲハチョウ類の発生個体数割合より，どのアゲハチョウ類が，最も加世田市近郊に多いか調べる。

③ 各アゲハチョウ類の飛来数より，発生時期を調べる。

④ 朝，昼，夕方の時間の違い，天候の変化，などの違いやその他のことから，飛来個体数が変化するか。また，変化するとすれば，その直接的原因は何かを調べる。また，これよりさらにその習性を検討してみる。

また方法は，できるだけ１９６７年度のものに合わせて，比較しやすくしてみたが，その結果にだいぶ変動がみられることは非常に興味深く，さらにこれからの継続的観察を希望したい。

＜観察方法＞

- 期間；　１９６９年，６月７日～７月５日
- 時間；　〔A〕　８：３０～　８：３５
  〔B〕　１３：００～１３：０５
  〔C〕　１６：５０～１６：５５
- 手段：　ネムノキ（8～9 ページ参照）の花に飛来したアゲハチョウ類を，肉眼または双眼鏡で観察する。

＜観察対象アゲハチョウ＞

ナミアゲハ　（Papilio xuthus）
ジャコウアゲハ　（Byasa alcinous）
クロアゲハ　（Papilio protenor demetrius）
ナガサキアゲハ　（Papilio memnon thunbergii）
モンキアゲハ　（Papilio helenus nicconicolens）

（なおその他のアゲハチョウは，ネムの木に飛来することがきわめてまれなため除外した。）

(1) 本年度の，各アゲハチョウ類の６～７月にかけての発生個体数の概要と，前回との比較であるが，飛来したものは下記の通りである。

	＜１９６９年度＞	＜１９６７年度＞	＜１９６６年度＞
ナミアゲハ	１０２頭	１２４頭	５９頭
ジャコウアゲハ	１０４頭	４３頭	１９頭
クロアゲハ	１４頭	４８頭	３頭
ナガサキアゲハ	２８頭	１５頭	２頭
モンキアゲハ	５頭	１０頭	３頭

＜考察＞

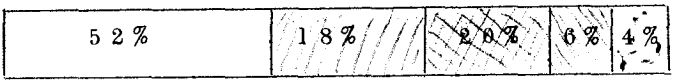
三回の記録の比較であるが，１９６６年度は１２日間しか記録していないため，比較の対象としては不適当であるが，１９６７年度と今度の記録は２６日間と２３日間で，ほとんど同じであるため比較してもかまわないと思う。まず，気づくことは，ジャコウアゲハが非常に多いことである。それに，クロアゲハの減少である。

月　日		10/VI	11	12	13	14	16	17	18	19	20	21	23	24	25	26	27
天　気	A	○	◎	●		○	◎	◔	◎	●	①	◎	①	◎	●	◎	①
	B	○	◎	◎	○	○	①	◔	◎	●	○	●	①	◎	●	◎	◎
	C	◎	◎	◎	○	○	①	●	◎	◔	◎	◎	○	◎	●	◎	◎
気　温(℃)	A		21	22		22	24	22	22	22	20	23	23	23	24	24	24
	B		25	24	25		28	23	24	22	26	24	26	28	27	25	26
	C		23	24	26	27	26	23	25	22	26	24	27	22	27	27	27
ナミアゲハ	A								4	1	6	1	8	4			8
	B			2			1		2		7		7	4		2	4
	C									1	1	3	2	1		2	5
ジャコウアゲハ	A						1		1	1	2	4	6	7		4	4
	B								1		5		4				2
	C					1			4	2	6	4	9	5		5	4
クロアゲハ	A											1	1				3
	B								1							1	
	C															1	1
ナガサキアゲハ	A															2	3
	B								1		1					4	2
	C																3
モンキアゲハ	A									1						1	
	B																
	C															1	

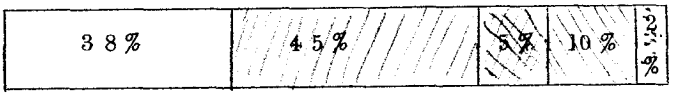
(2) 各年度の各アゲハチョウ類の発生個体の割合は，下記に示す通りである。

１９６６年　(総飛来個体数　８９頭)

１９６７年　(総飛来個体数２４０頭)



１９６９年　(総飛来個体数２７３頭)



28	30	6/VII	2	3	4	5
◎	◎	◎	◉	◎	●	○
◎	◉	◎	◎	①		◎
	◎	●	◎		●	
24	26	27	24	23	25	
26	27	28	24	25		28
	27	27	21		25	
4	1	3		2		
	2	2	5	1		
	1		2		3	
3	4	2		3	3	
5		1	7	6		
	1		4		3	
		1		1		
2			1			
		4		4	1	
			1			
					2	
			1	1		

ナミアゲハ
ジャコウアゲハ
クロアゲハ
ナガサキアゲハ
モンキアゲハ

<考察>

ナミアゲハの割合が年々減少しているが，個体数はだいたい，毎年同じぐらいであるから少なくなるのではなく，一定の割合で発生していて，最も安定したチョウらしい。

ジャコウアゲハは，年による差が非常に大きい最も不安定な発生をするらしく，なぜかその原因はよくわからない。それに今年の割合がナミアゲハをしのいで，一番なのは非常におもしろいことである。

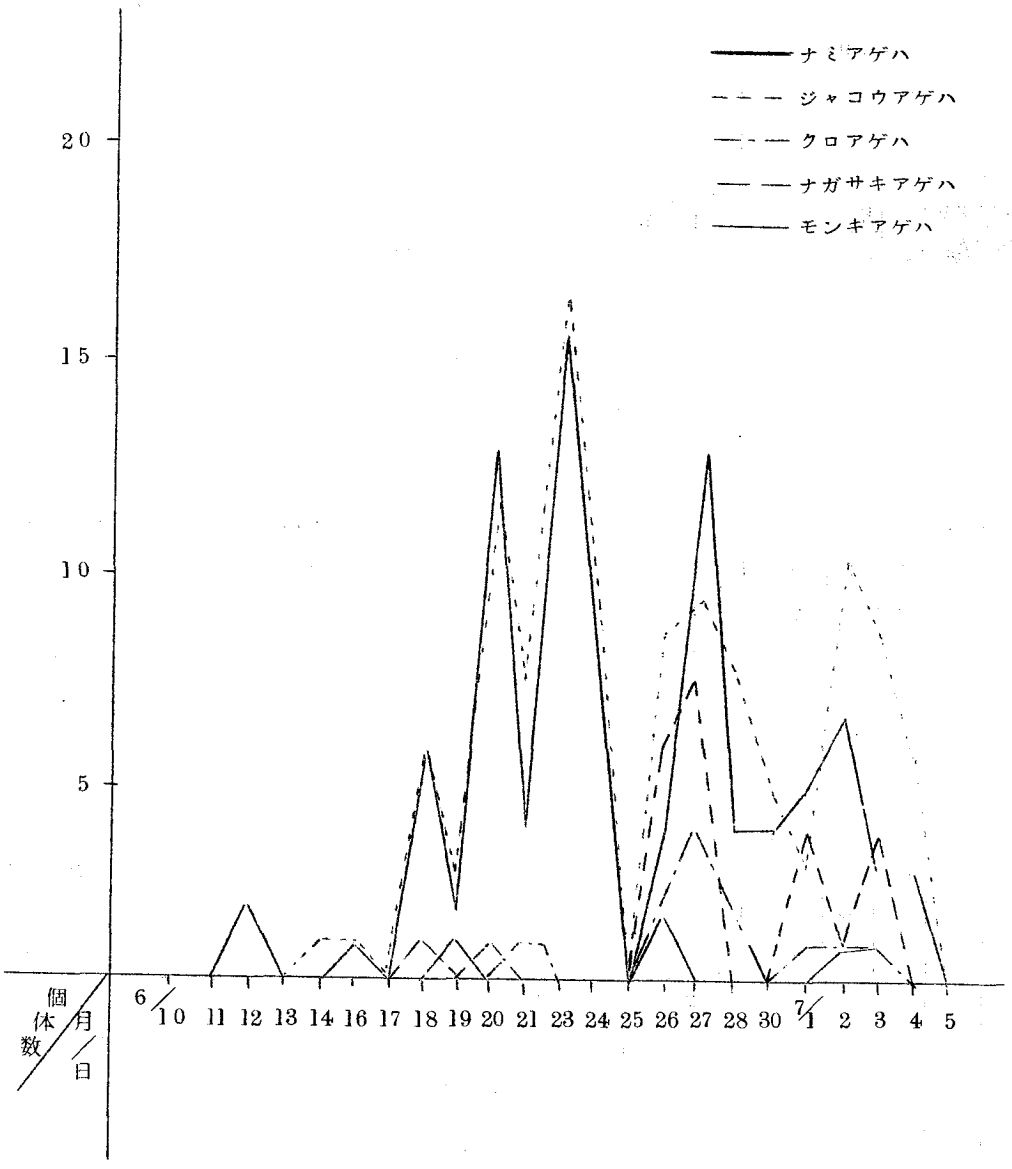
クロアゲハは，１９６７年度異常に多く発生したらしいが，１９６６年に３％，そして今年が５％と，やはりこのあたりに割合はおちつくのではないかと思う。

ナガサキアゲハは，そんなに大きな変化は見られないが年々記録が少しずつふえている。

モンキアゲハは，ナガサキ同様そんなに大きな変化は見せないで，また個体数も少ない。

以上のことより，加世田近郊に最も普通に分布するアゲハチョウは，ナミアゲハであるらしいが，今年ジャコウアゲハが多かったことからさらに詳しいデータがないと，そう一概に言えないかもしれない。また，クロアゲハ，ナガサキアゲハ，モンキアゲハはまれではないが，ナミアゲハ，ジャコウアゲハよりは少ない。（その他に加世田市近郊には，キアゲハ，アオスジアゲハ，ミカドアゲハ，カラスアゲハが分布しているが，今回の観察ではキアゲハ3頭，カラスアゲハ2頭が記録されている。）

(3) 各アゲハチョウの飛来数を日別にグラフで表わすと次のようになる。



グラフより発生時期を推量してみると，

ナミアゲハ　6月２０日～7月　2日ごろ，ジャコウアゲハ　6月２０日～7月2日ごろ

クロアゲハ　6月２６日～6月２８日ごろ　ナガサキアゲハ　6月２６日～7月3日ごろ

に，各アゲハチョウの個体数が最高に達しているが，天候やネムの木の花の量によってもだいぶ影響されているようである。

(4) 飛来個体数の変動について，さらに調べてみることにする。

○時間（A，B，C）による違い

種類 / 年 時間	ナミ			ジャコウ			クロ			ナガサキ			モンキ		
	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C	A	B	C
１９６６年	42	39	21	45	31	48	7	5	2	14	9	5	2	2	1
１９６７年	32	58	39	5	14	23	3	16	29	4	4	5	3	3	4

○天候による違い

左図より天候により，ものすごく影響されることが，どのアゲハにも共通するようである。

○その他の影響

(3)でもふれたが，花の咲きぐあいによっても大きく影響がある。また風なども影響するようである。

以上のことなどから，各アゲハチョウについて気づいた習性をのべると，アゲハチョウは時間によっては，さほど変化は少ないが，やはり夕方は多少減少する。また雨が多少降っても，たまに飛来するのに気付いた。ジャコウアゲハは特に驚いたことは，雨がどしゃぶりでないかぎり，飛来していたことである。またこのことと関連してか，日中の記録よりも朝夕の方が多いことなどから，陰性がかったチョウである。その他については飛来数が少ないため，はっきりしたことはいえない。

＜感想および問題点＞

簡単に考えてとりかかったが，予想以上に根気が必要で，１９６７年度よりやや雑なものになってしまって残念である。また経験不足のため，アゲハとキアゲハをたまにはまちがえたかもしれない。しかし前回と違った結果も少なくなく，今後の観察に大いに期待したい。もっと工夫してやったら，もっとおもしろい結果がえられると思うし，また今後これらのアゲハチョウ類が，どのように変貌していくか，まったく興味あることである。

ネムノキの花と果実

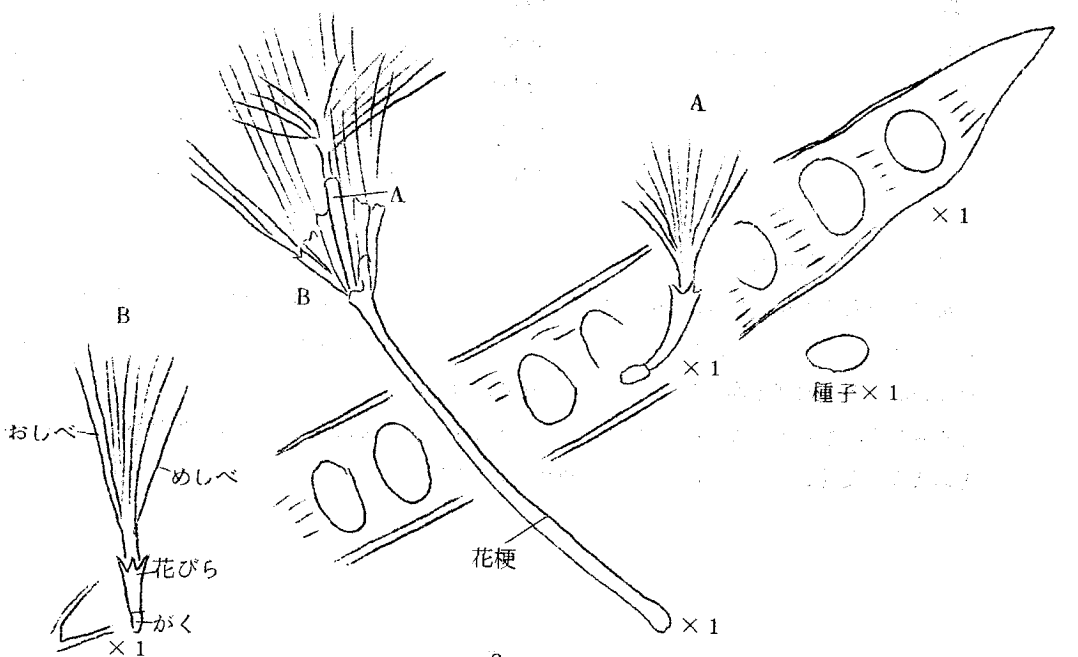
2年　小野田章子　田実初子

生物部屋から見えるネムノキが，6月上旬から桃色の美しい花をほころばせ始め，6月中旬になるとその花が，毎日雨のように落ち始めた。私達はその現象を見て，今のような状態で花が散っていったら，はたしていくらの果実ができるものかと疑問に思い，先生方や，他の多くの部員の協力をもらって，毎日落花数を調べてみることにしました。

○ネムノキについて

マメ科植物で落葉高木で本州以南の山野に自生する。高さは約9mになり，葉は2回羽状複葉で互生し，裏面は灰色を帯びる。“ネムノキ”という名は夜間には小葉が閉じて，眠るようだとしてこの名がついたそうであるが，初夏には，枝先に美しい淡紅色の花をつける。花は夕方開きふつう1つの花と思われるものは，約4センチ15～18個の小さな花からなりたっている。その花は約29本のおしべ，1本のめしべ，約7ミリの花びら，2ミリのがくからできている。そしてその29本のおしべは下部で筒状にくっついている。また15～18個からなるその小さな花の中に1個だけ他とちがって長いのがあるが，それがどう関係しているのかわからない。でも想像したところによると，それが果実になるのではないかと思う。また果実は長いもので15センチ，短いもので7センチぐらいである。そしてその中には約1センチの10数個の種子からできている。

なお，私達の調べた花と果実は下に示してあります。



〔経過〕

5月　上旬にネムノキの細い枝に黄緑色の新芽が一斉にふきはじめた。

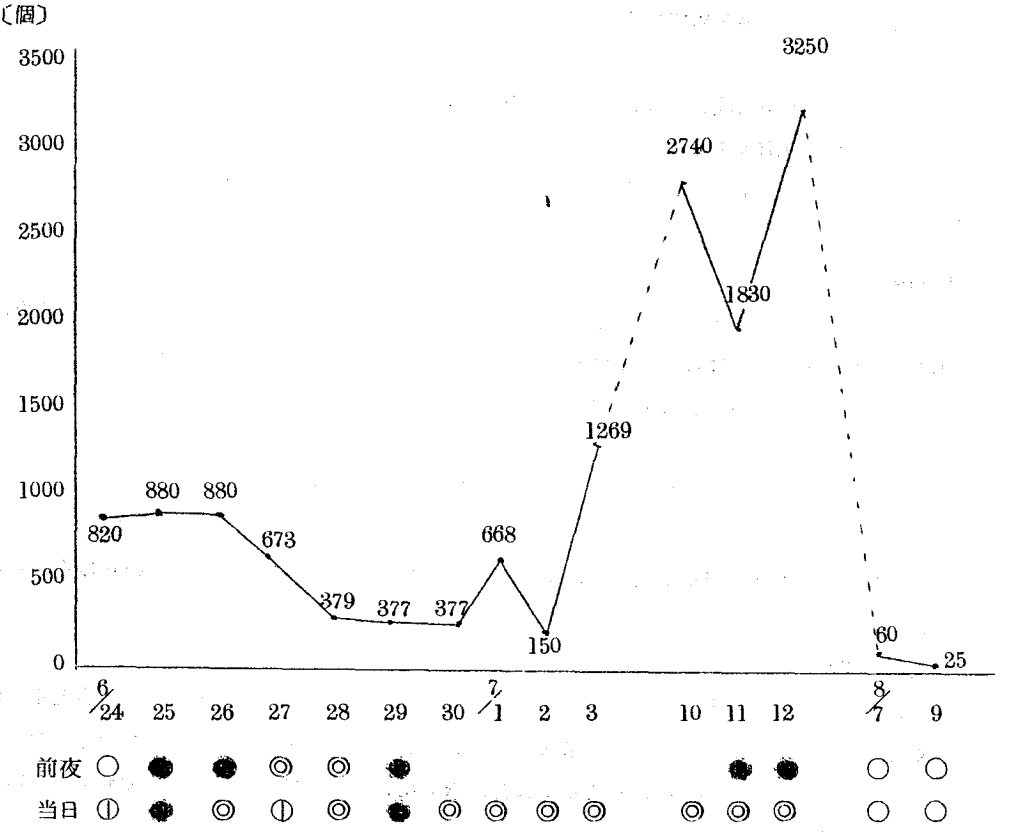
6月　4日，始めて淡紅色の花が開いた（花弁は筒状で小さく，花糸は約5センチである。）
下旬になると毎日500～800も落花しはじめた。刀形で長さ1センチの小葉を7～12対もった葉（2回羽状複葉）も青々と茂ってきた。

7月　1日につき，1000～2000も落花し，日によっては3000以上も落花した。
（ただし，4～9日，13日以降は正しく調べなかったのではっきりしない。）
また，ジャコウアゲハ，クロアゲハなどのアゲハチョウ類や，アブラムシなどが飛び交っていた。

8月　今まで非常にたくさん落花したため，花も少なくなり落花数も100にも満たなくなった。

9月　少ししかない残花にまじって，結実した約7センチのサヤがまばらに目立ってきた。完全な果実数191，不完全な果実数139，合計330であった。

〔ネムノキの落花数調べ



〔結果と反省〕

拾って数えたネムノキの数は合計１４４８５であり，結実したサヤの数が３３０であるから，結実歩合を計算すると，わずか２２％だった。でも，その果実がすべて完全なものとは限らないので，私達はこれに驚いてしまった。また，果実を見て，ネムノキが確かにマメ科植物であることがわかったことがうれしかった。そして，その果実の大きいことにはびっくりした。

毎日，落下数を調べてゆくのはきつかったが，佐方先生をはじめ，その他の部員に協力してもらったのでありがたかった。雨の日や，休みやその他のために正確な観察ができなかったことが残念である。今後も，機会があったら，続けてゆこうと思います。

発光バクテリアの研究

２年　大迫祥三

バクテリアのうちで，発光性をもつバクテリアがいることを知ったので，食塩水と水イカを使用して，その存在を確かめてみることにした。

〔実験方法〕

- まず，水イカを水洗いしないままで準備しておく。
- 次に，３％食塩水を作る。
- 食塩水に水イカをつけて，食塩水にちょうどひたるくらいにしておく。

〔実験結果〕

１日後

食塩水は水イカの体液のために赤く濁っていて，吐気をもよおすような悪臭がする。イカの表面に白い不透明な膜がはって，イカの体表全体が白っぽくなっている。これを暗室に持って行って調べると，この白い膜がちょうどリンみたいな青白い光を放っている。

２日後

昨日よりだいぶ光らなくなった。そして悪臭が一段とひどい。

３日後

食塩水中のイカは，白く変色して，腐っていた。もう発光バクテリアはいないらしく，光らない。

〔反　省〕

この実験は，ひどい悪臭が伴なうために実験しにくかった。それに，イカ全体を食塩水に浸さなくても，イカの体表に食塩水を少量滴下して，その部分を観察してもよかったのではないかと思う。だが，やさしい実験のためよくできた。さらに，この発光バクテリアを顕微鏡で観察したいものである。

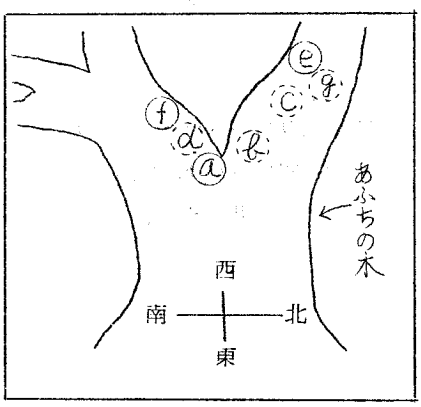
あふちの木に着生する植物

2年　大　迫　祥　三

我が加世田高校の中庭に大きくそびえる“おうち”の木には，どんな種類の植物が着生するものだろうか。調べてみることにした。

種子植物名称	方向	地表からの高さ	本体の長さ	そ　の　他
サルトリイバラ	a　南東	2.5m	50cm	
ツメクサ	南東	2.5m	不明	
ネズミモチ	b　北	2.5m	50cm	
ノキシノブ	c　北	3.0m	15cm	
	d　北西	2.5m	10cm	
コメヒシバ	e　南西	9.0m	不明	穂有り
	北	2.5m	不明	穂なし
クロガネモチ	f　北東	3.0m	50cm	
ヒメムカシヨモギ	北東	3.0m	30cm	
ムラサキシキブ	g　北	6.0m	1m	
トコロ	h　北西	4.0cm	10cm	
イノコズチ	南東	不明	不明	

注：アルファベットは，下図での所在位置を表わす。なお，コケ類も数種あった。
(種名未詳)



注；破線の記号は木の裏側を表わす。

(反省)　これらの種物は鳥類その他によって種子を運ばれたものらしい。今後も続けて調べたい。

昭和44年8月現在

ミヤマカラスアゲハの飼育
(Papilio maackii tutanus)

2年　田　中　洋　海

岐阜県本巣郡根尾村水島谷で，阿江茂氏が採られたミヤマカラスアゲハによる卵を，出来和法さんより半分（16個）を分けていただいて，飼育する機会を得たので，その飼育を試みた。

〔飼育方法〕

9月7日から9月28日の間は，主にカラスザンショウを与えてみたが，死亡するものが多かったため，9月29日から10月14日までは，ハマセンダンにした。

○ 1令から4令まではシャーレの中で飼って，終令ごろになった所で，小さな水そうにガラスのふたをして飼って，蛹化前に飼育箱に移した。

○ 3匹を選んで，それぞれA，B，Cとしてその記録をとった。

〔飼育記録〕

	Ⅸ．7	Ⅸ11	Ⅸ17	Ⅸ18	Ⅸ22	Ⅸ27	Ⅸ28	Ⅸ29	X13	X14
A	孵化	2令化	3令化	3令	4令化	終令化	終令	終令	蛹化	蛹
B	〃	2令化	2令	3令化	4令化	4令	終令化	終令化	終令	蛹化
C	〃	2令化	2令	3令化	4令化	4令	死亡	死亡		

〔結果と問題点〕

○ 大体の各令期は，次のようであった。

1令期　4 ～ 6日　　2令期　5 ～ 7日　　3令期　5 ～ 6日

4令期　5 ～ 8日　　終令期　15～17日

以上のことより，1～4令までは大体数日であるが，終令期が非常に長いのは，アゲハ類に共通しているようである。

○ 食草については，カラスザンショウとハマセンダンの2つで行なってみたが，ハマセンダンの方を，より好むようである。またカラスザンショウが，すぐに枯れてしまうことも大いに関係しそうである。

上記のようなことがわかったが，文化祭と重なったせいでハマセンダンの方が，よく食べるとわかっていても近くにないため，カラスザンショウで間にあわせ，しかも少々枯れたままにしておいたことで，やや栄養不足だったかもしれないから，結果に多少くるいがあるかもしれない。なお蛹は，現在もなお羽化せず越冬するものと見られているが，出来さんが飼育したものは3頭羽化したそうである。

わがはいは“もぐら”である

顧問　新山茂久

わしの仲間はヨーロッパとアジアと北アフリカに住んでいるらしいが，本家がどこで分家がどこなのかについては人間のようにもったいぶって家系図など書き残してないためさだかではない。

わがはいのスタイルのスマートさは，人間共のあこがれの的らしい。その証拠にかねてすましこんで乗りまわしている車の型は，わしのスタイルをまねたものだ。（いわゆる流線型き）人間共めスタイルの良さは知っているが，土の中のわしの体を非常にきたないと思っているやつが，多いらしいのでことわっておくが，ビロードにも似たそのつやつやした毛並は，人間の女共が，有難がって首にまいたり，コートにしてはおっているキツネやミンクのそれなどとても足下におよばぬほど豪華なものさ。えへん！　眼は永い地中生活のため退化してしまったが，鼻は人間共がたよりにしている警察犬のそれよりよっぽど敏感で，土の中のずっと先の仲間や好物のミミズをみつけることなどたやすいことなんだ。それにわしのたくましい足を見たことがあるかな？

人間の間では手が長いというとドロボーの代名詞になっているようだがその点わしらは正直者の代表みたいなものさ。短いが手も足も指は5本ずつちゃんと揃っている。スコップ型の手足の甲はいづれも外向きで，人間が歩くより速く土の中を進むことができる位土掘りに適している。その勇姿は平泳きの選手の力泳ぶりを想像してもらえばよいだろう。水泳といえばわがはいも本当に上手に泳ぐこともできるんだよ。

カッコイイことばかり並べたが，わしは実に大食漢なんだ。「ヤセタイ，ヤセタイ。」と思っている人間の女性が聞けばたぶん「まあそんなに食べるの！」とあきれかえるだろうが1日に自分の体重と同じぐらいミミズや虫の肉を食べるんだよ。それもこれも食べるものをさがすために土の中を掘ってまわる重労働にたえるためには，やむをえないことなんだ。えものを求めて掘りまわり捕えて食べたあとはぐったりとなって掘ってまわった時間の二倍位の時間はぐっすりねむるんだ。わし自身時には，「食うために生きているのか，生きるために食うのか。」と1人前に悩むこともあるんだ。そこで一句浮んだので紹介しよう。「はたらけど，はたらけど，わがくらし楽にならず，じっとスコップ型の手を見る。」だいぶ字あまりだがゆるしたまえ。

さてわしの家はね，もちまえの技術を生かして作ったそれは，それは，ふくざつな家なんだ。ちょうど炭鉱の坑道を思わせるように廊下をあちこちに通して敵のしゅうげきから避難するのに適した型にしたためなんだ。複雑な中にもちゃんと飲料水にする雨水をためるたて穴を掘ったり池や沼などにぬける道も作ってあるんだよ。まあ1度あそびに来たまえ。「百聞一見にしかず」と言うからね。最後に仲間の名前を紹介しよう。

モグラ科	ヒメミミズ属	ヒメミミズ	日本産中最も小さく尾長し灰色
	ヒミズ属	キュウシュウヒミズ	尾比較的長くチョコレート色
	ミズラモグラ属	ミズラモグラ	日本のモグラの中で最も少い灰色
		フジミズラモグラ	やや大形吻の幅が広い尾の毛灰白色
		シナノミズラモグラ	吻の幅狭い小形黒色
		ヒワミズラモグラ	吻の幅狭い小形薄い灰色
	モグラ属	モグラ	中形ないし小形吻長く太い，茶色
		アズマモグラ	中形吻やや幅広，茶色
		ヤクシマモグラ	アズマモグラの南方亜種小，尾長い
		コモグラ	小形吻の幅狭く　茶色

参考資料　　石川千代松著　動物園　　保育社　日本哺乳類図鑑

短報No. 1

ツマベニチョウを求めて　(I)

二年　　田　中　洋　海

ツマベニの発生時期にいよいよはいったので，三年生の平川さんにいままでの調査された場所を教えてもらうことをかねて，本坊，ぼくの３人で，坊～久志～秋目というコースで出かけてみた。しかし，残念ながら坊，久志では何の収獲もなかった。ただ秋目で新鮮なツマベニチョウ１♂を採集できたのがせめてもの慰めであった。

＜採集および目撃蝶＞

ツマベニチョウ	1♂coll	ジャコウアゲハ	卄	ルリシジミ	卄
アサギマダラ	1　coll	アオスジアゲハ	十	アオバセセリ	卄
クロコノマチョウ	数頭coll	モンキアゲハ	卄	ウラギンシジミ	十

ツマベニチョウを求めて　(II)

二年　　田　中　洋　海

6月15日　晴れ

枕崎から坊，久志と行って上津貫へ出るコースをバイクで回ってみた。4月に出かけたとき，全然発見できなかったツマベニチョウがやはり目的であった。しかし，今日も１匹も発見することができず帰らなければならず残念でもあり，今年はツマベニの発生が少ないことが心配でもある。

＜採集蝶＞

モンキアゲハ　1♀coll　　ルリタテハ　1coll

〔文化祭研究〕

酵素に関する諸研究

〔Ⅰ〕 酵素のはたらきに影響する要因（その１）

2年　大迫　祥三

＜準備＞

◦器具　試験管　アルコールランプ　ビーカー　三脚　石綿金網　シャーレ　温度計　かきまぜ棒　ろ紙　ロート

◦材料　脱脂綿　ベネディクト液　デンプン溶液　ヨウ素溶液　氷

〔実験Ａ〕　いろいろな温度での酵素アミラーゼのはたらき

実験１；室温における酵素アミラーゼを調べる。

＜方法＞

a）　デンプンを水とまぜる。

b）　この液について，デンプンとブドウ糖の有無を調べる。なお，デンプン検出にはヨウ素溶液を加えて加熱する。ブドウ糖検出には，ベネデクト液を加えて加熱する。

c）　aの液にだ液（アミラーゼ）を加えてロ過する。それに，少量の温水を加えてブドウ糖とデンプンの有無を調べる。

＜結果＞

◦b）　デンプンはあるが，ブドウ糖はない。

◦c）　ブドウ糖はあるが，デンプンはない。

実験２；酵素アミラーゼは，何度で最もよくはたらくか。また，何度で破壊されるかを調べる。

＜方法＞

a）　だ液（アミラーゼ）をそれぞれに分け，あるものは煮沸し，あるものは冷却する。

b）　それぞれにデンプンを加える。

c）　各温度で約１０分間たってからブドウ糖，並びに，デンプンの有無について調べる。

＜結果＞

温　度	0℃	10℃	37℃	50℃	70℃
糖	全くない	全くない	だいぶある	少々ある	少々ある
デンプン	だいぶある	だいぶある	全くない	だいぶある	少々ある

〔実験B〕　酵素アミラーゼのはたらきと速さ

目的；酵素アミラーゼのはたらきは人間の体温（約３６～３７℃）に保ったとき，時間が経過するにしたがってどのように変化するかを調べる。

＜方法＞

a)　３７℃に保ってある温水中に，デンプンを入れた試験管を立てる。

b)　この中にだ液（アミラーゼ）を加えて，２分間おきに糖ならびにデンプンの有無を調べる。

＜結果＞

時　間	２分後	４分後	６分後	８分後	１０分後
糖	ある	ある	ある	ある	ある
デンプン	ある	少々なくなった	なし	なし	全然なし

〔Ⅱ〕　酵素のはたらきに影響する要因（その２）

２年　崎山順子　阪本京子

酵素のはたらきと濃度の実験

＜準備＞

○器具　　試験管　メスシリンダー　アルコールランプ　ピペット　三脚　石綿金網
ビーカー　温度計　スライドガラス　かきまぜ棒

○材料　　脱脂綿　ベネディクト液　デンプン液　ヨウ素溶液

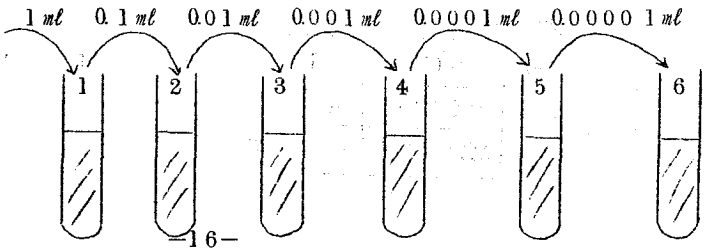
＜実験方法＞

(1)　５００mlのビーカーに１／６ほど水を入れて，体温（約３７℃）ぐらいにおだやかに熱する。

(2)　だ液を約１mlを試験管にとる。

(3)　６本の試験管に１～６まで番号をつける。各試験管に水約９mlずつを入れる。試験管１にだ液１mlを入れる。それをよく振って混ぜる。

(4)　試験管１から液を１mlピペットで取り，試験管２に移してよく混ぜる。洗ったピペットで１mlを試験管２から試験管３へ移す。よく混ぜピペットも洗う。この方法を続けて試験管６まで１mlずつ移していく。



(5) 各試験管にデンプン液1mlずつ加えてよく混ぜてから（1）で用意した湯せんに入れる。

(6) 10分後，各試験管から試料を少量取り出し，ヨウ素溶液でデンプンの存在を検出する。

（デンプンの検査には，1滴をスライドガラスに取り，ヨウ素溶液を1滴加える。その結果生じた色とその特徴を記録する。2分間隔で検査していき，デンプン反応を示さなくなる時間を調べる。）

(7) 各試験管から試料を1mlずつ取り，糖を検査する。（ブドウ糖検査には，小試験管にデンプンとだ液との混合液を1mlと，ベネディクト液数滴を取る。試験管をよくふって混和し加熱する。）

(8) デンプンと糖の検査を実験開始から20分後に，もう一度行なう。

＜結果＞

デンプン検査

時間／番号	2	4	6	…	20	22	24
1	うすい紫	×					
2	だんだん濃くなる↓	うすい赤紫	×				
3		○	○		うす紫	→	→
4		○	○		○	○	○
5		○	○		○	○	○
6	濃い紫	○	○		○	○	○

時間／番号	2分後	20分後
1	濃い黄色	うすい黄色
2	黄　緑	うすい緑
3	うすい黄緑	〃
4	〃	〃
5	〃	〃
6	うすい緑	〃

（　○……反応あり　　×……反応を示さない

＜反省＞

私たちにはあまりむずかしすぎて，よくわかりませんでした。また，準備に時間を要して器具などもそろわず，スムーズにいきませんでした。結果は上の表のようになりましたが，参考にする本などもなくて，正しい結果なのかわかりません。これからは，私たちに理解できる範囲内の実験や観察をしたいと思います。

他校交換生物機関誌紹介

「生物の世界」	Vol 26	福岡県立修猷館高校生物研究部
「藻藻」	No. 26	静岡県立掛川西高等学校生物部
「しぴっちょ」	No. 2	鹿児島県立出水高等学校生物部
「わかあゆ」	No. 10	千葉県立銚子高等学校生物クラブ
「城東生物」	第8号	徳島県立城東高等学校生物部
「甲南生物」	第4号	鹿児島県立甲南高等学校生物研究部

〔Ⅲ〕　トウモロコシの種子中の酵素

2年　　樋渡祥子　前田久美子

＜実験の目的＞

トウモロコシの種子の中にデンプン分解酵素があることを明らかにする。

＜器具と材料＞

- デンプン寒天を流し込んだシャレー3個
- 寒天を流し込んだシャーレ1個
- 水につけておいた（3日間）トウモロコシ種子
- ホルマリン，アルコール，酢酸などで殺し，水につけておいたトウモロコシ種子
- ヨウ素溶液
- カミソリの刃

＜実験順序＞

1. 水に浸して発芽させたトウモロコシの種子をとり，カミソリの刃で，縦断し，切断面をヨウ素溶液で調べる。

   結果；　この場合青く変わったので多量のデンプンが存在することがわかる。

2. デンプン寒天のシャーレと寒天のシャーレを1つずつ取り，ヨウ素溶液を表面に流す。

   結果；　デンプン寒天は青く変わる。寒天だけの方は色の変化はないからデンプンは存在しない。

3. 発芽したトウモロコシが　おいてあった寒天面にどのような違いが見られるか。

   結果；　発芽したトウモロコシの組織に，形成された酵素は，種子の切断面から寒天の中に拡散していき，デンプンを分解するらしく，寒天のこの部分には，デンプンがなくデンプン検出用のヨウ素テストを試みても変化はなかった。

4. 発芽種子を，ホルマリン，酢酸，アルコールに24時間位つけて殺し，さらに縦断面をデンプン寒天面にふせておく。デンプン寒天にふせてあった種子をとり，その上にヨウ素溶液を流してみる。

   結果；　ホルマリン，酢酸，アルコールで殺した種子も，やはり青変した。このことより薬品で殺した種子にもやはり，多量のデンプンが存在することが示された。また寒天面も青変したので，デンプンは分解しない。

5. 乾いた種子も，湿らせて発芽させた種子と同じような働きをするだろうか。（ヨウ素溶液を流してみる。）

   結果；　青変するがうすい。

◎酵素について……（この実験を機会に酵素について勉強して次のことを知りました。）

体内の触媒はタンパク質でできている酵素で，その表面に反応をおこさせる物質（これを基質という）を吸着させることができる。基質は酵素という金属でできているわけではなく，やわらかいタンパク質でできているので，適当な温度や，適当な酸性度がなければうまく基質の形をつくらない。

食物を酢につけておくとあまりくさらないのは，腐敗菌の酵素のはたらきが酸のためにはたらかないからである。

◦酵素の種類

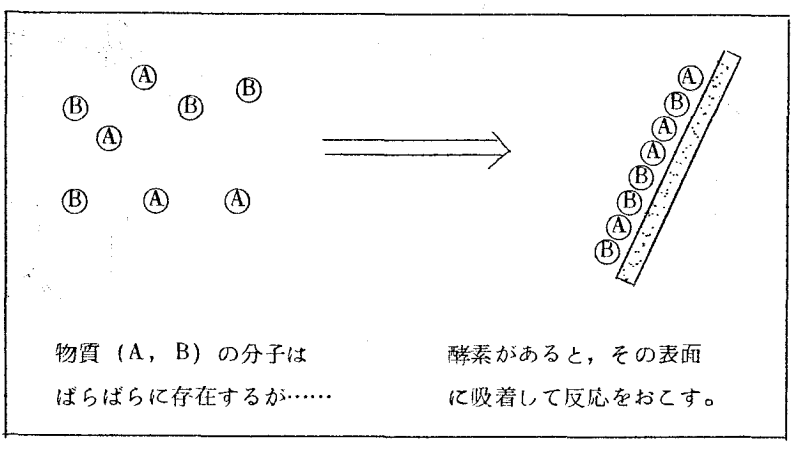
酵素にはいろいろの種類のものがある。大きく分類すると六種類にわけられる。

1) 酸化還元酵素（我々の体にエネルギーを与える）
2) 運搬酵素
3) 加水分解酵素（アミラーゼやトリプシンのような消化酵素の類で，食物のデンプンやタンパク質に水を加えて分解し，もっと小さな化合物にするはたらきがある。）
4) 分解酵素（加水分解でなく，ある化合物から炭酸などをとりさるはたらきがある。）
5) 異性体酵素（構造の異なる化合物をつくる。）
6) 合成酵素（多分子を結合して大きな化合物をつくる。）

◦薬としての酵素

※ 胃腸薬として市販されているものの中には，デンプンやタンパク質を加水分解する酵素がふくまれていることが多い。また傷口をきれいにしたり，膿をとかしたりするためにも酵素は薬として用いられる。

※ 料理用の酵素として，硬い肉を柔かくするためにタンパク質分解酵素が用いられる。熱帯の果実のパパイヤからとった酵素で，比較的熱に強いので，かなり熱い湯の中でもきくのが特徴である。



〔文化祭研究〕

カエルの脊髄反射の実験

1年　山口秋生　山下志郎

〔実験目的〕

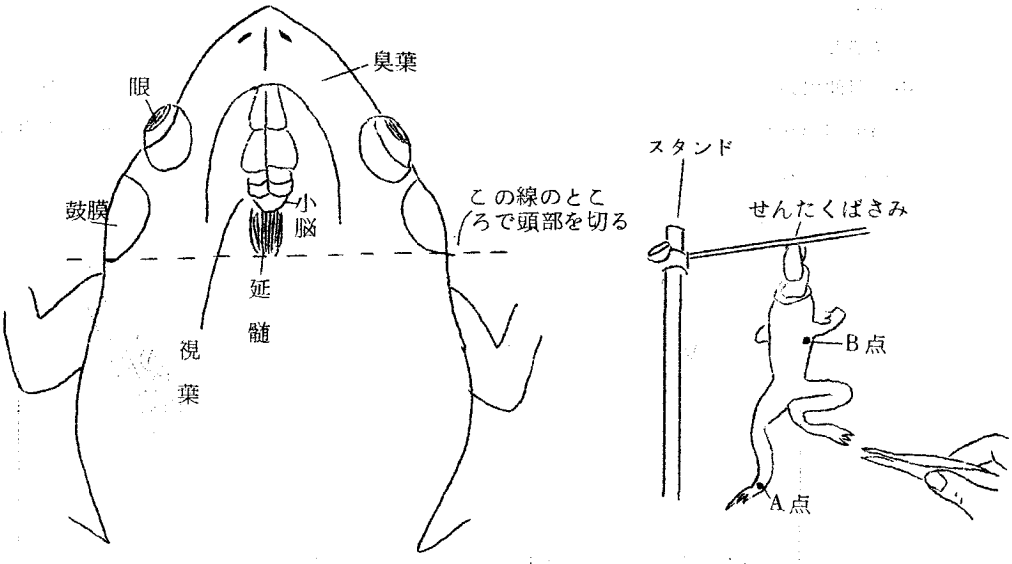
脊髄反射の実験は，脊椎動物の脳を取り除いても，カエル自体の意に関係なく反射のおこることを調べる。

〔使用器具〕

○せんたくバサミ　○ピンセット　○スポイト　○解剖ばさみ　○脱脂綿
○スタンド　○解剖ざら　○ビーカー　○酢酸（5％，30％）　○リンガー液

実験の方法

1. ウシガエル（麻酔をしていない）の頭部を延髄と脊髄の間で切り取る。
2. そして，ショックからさめたころ（5分位後），下がくをせんたくバサミでつるす。
3. それをスタンドにつるす。



実験の結果

1. ピンセットでB点を刺激した。
   ○反応なし。
2. A点をピンセットで押えた。
   ○かすかな反応を示す。
3. 5％の酢酸をビーカーに入れて足をその中に入れた。
   ○勢いよく足を上げた。
4. 30分後，30％の酢酸で反応を調べた。
   ○勢いよく足を上げた。
5. それ以後は反応なし。

注；　酢酸に入れた足は，蒸溜水でよく洗う。

〔反省〕

この実験では，リンガー液を作るのに時間がだいぶかかり，脊髄ガエルを作る時注意深く実験しなければならなかったので苦心した。また，ウシガエルを見つけてくるのにだいぶ苦労した。

そして，もっと詳しくやってみるべきところがあるようである。たとえば

イ　酢酸の濃度と，反応の時間との関係。

ロ　酢酸のほかのいろいろな薬品に対する反応。

といったようなものである。今後，機会があったら行なってみたいと思う。

短報No.2

ツマベニチョウを求めて(Ⅲ)　〔秋目編Ⅰ〕

二年　春成正和

8月4日　晴れ

休み中に一度は秋目へと思い足を運んだ。自転車で急ぐこと一時間あまり大浦に着いた。ここでは以前調査したツマベニチョウの食樹ギョボクの所に行った。盛夏で木々は茂り，くもの巣はいっぱいだった。ちょっと背たけより高い所で4個の卵を見つけた。それからさらに一時間あまり坂道を急ぎ狭い秋目の砂浜に無事に出た。ガードレール側のギョボク群生地から2個の卵を見つけただけで秋目での収穫はあとツマベニ♀同一と思われるのを数回目撃しただけだった。東シナ海の澄んだあくまでも青い海づたいに久志，坊と行ってみたが他に何も収穫はなかった。大浦での卵を1個だけ持ち帰り飼育し　9　月　2　日♂羽化♀した。

〔文化祭研究〕

光合成に及ぼす波長の影響（その２）

１年　本田ゆみ子　前田栄子　古市ヨリ子

〔目的〕

「まのせ６号」にひき続き，光合成に及ぼす波長の関係を調べるのに，種々の色溶液の温度を一定した中で，光の距離のちがいよって水草の光合成速度を比較することから，気ほう発生数による間接的方法をとった。

＜材料と実験方法＞

○材料

水草（クロモ）　牛乳ビン（５本）　着色液（５色）　電球（暗室のもの）

※着色液 ――― 赤色（赤インク）　青色（硫酸銅）黄色（ピクリン酸）
緑色（ライトグリーン）　無色（水道の水）

○方法

水草を非着色，赤色，青色，黄色，緑色（温度を一定にしたもの２９℃）の中に入れ電燈の光をあてて，距離のちがいから生ずる気ほう発生数を調べる。（距離，４５cm，６０cm）

表Ⅰ　４５cm（温度２９℃）

色＼回	1	2	3	平均
無色	4	3	5	4
赤色	2	5	3	3
青色	3	4	4	3
黄色	5	3	3	3
緑色	3	2	2	2

表Ⅱ　６０cm（温度２９℃）

色＼回	1	2	3	平均
無色	2	4	3	3
赤色	2	3	2	2
青色	2	3	2	2
黄色	2	1	2	1
緑色	2	2	1	1

（注）表Ⅰ，表Ⅱとも時間は２分間ずつである。

＜結果＞

発生した気ほう数

上図の表から，無色の水がもっとも光合成速度が速く，次に赤色や青色が続いていることも

わかりました。そして，着色液の温度が下がると気ほう発生をしなくなりました。（これは表に示していない。）これらのことにより，光合成に必要な条件として光の波長や温度が，関係することが，わかりました。

〔反省〕

先輩の後をついて行なったのですが，残っていた実験を全部やることができませんでした。また残された問題の中に“種々の水草による個体差”というのがありますが，これは周辺の川や池の水が汚れて，水草がなくなってしまったので行なうことができませんでした。私たちがこれからやりたいと希望するものは次のようなものです。

〔1〕 非着色である水を，他の水，川の水，井戸の水と変えたことに，結果がどう変ってくるかどうか。

〔2〕 日光による種々の着色液の光合成速度のちがいはどうか。

〔3〕 なかに気ほう発生がないのがあるが，水草の部分によってちがうかどうか。

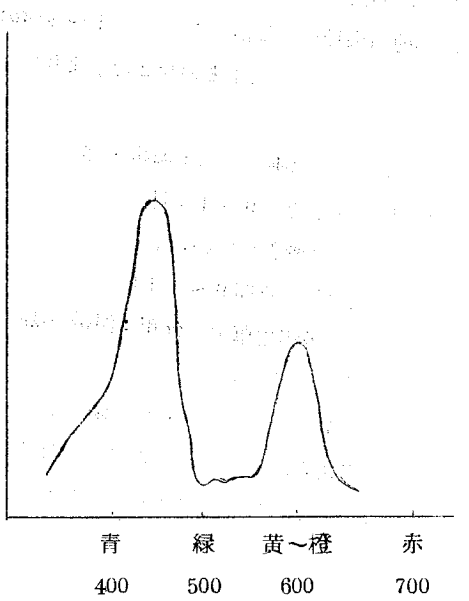
〔4〕 温度によって，どれくらいまで気ほう発生数が変ってくるかどうか。

＜参考資料＞

表Ⅲ

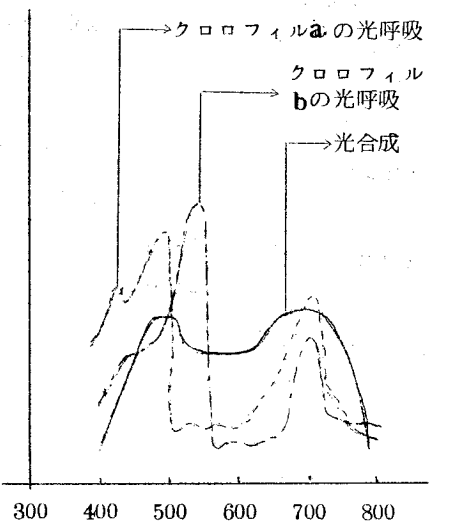
クロロフィルの呼吸スペクトル

“緑色植物の生理”より



表Ⅵ

光の波長と光合成の関係



〔文化祭研究〕

イネ科植物の花穂はどこからぬけるか

1年　西川路孝子　森永香代子

〔目的〕

「まのせ2号」にひきつづいて，稲科植物の穂を引っぱればぬける。これはどこから，どういう仕組で離れるのだろうかというのを，さらに考察したものです。種類ごとの穂茎の長さや，時には穂の幼老別に静かに引っぱってぬいてみる。ぬけたらどこからぬけたかを調べて，葉しょうに包まれた節の上方何㎜のところで切れるかをはかってみた。その結果をグラフに示すと別表のようになる。

〔備考〕

この種の調査に用いた材料はすべて本校附近の野生種で昭和44年の9月中旬（コツブキンエノコロ，トダシバ，メヒシバ）に調査実験したものである。

〔分離点の仕組について〕

引っぱれば抜けるというのは，その部分の細胞組織は永久組織に比べて結合力が弱いはずであって考えてみると，この科の植物の茎の節直上部に伸長する生長帯があり，これが老熟するにしたがい，活動は漸次おとろえて，細胞分裂しなくなれば，伸長はとまる。ノビエの1例でみると出穂中の各時期は分離点が1～10㎜の間にあるが，小穂（果粒）の脱落したもので1～4㎜の間にちらばっている。これは，分裂が節に近づいて来た為であろう。（「まのせ2号」より）

〔イネ科でぬけにくいもの〕

アキメヒシバ　野外の路傍，丘陵の山地等に多く生じる一年生草本　分布；温帯～熱帯
高さ30～90cm　長さ8～20cm　花の咲く時期9～11月

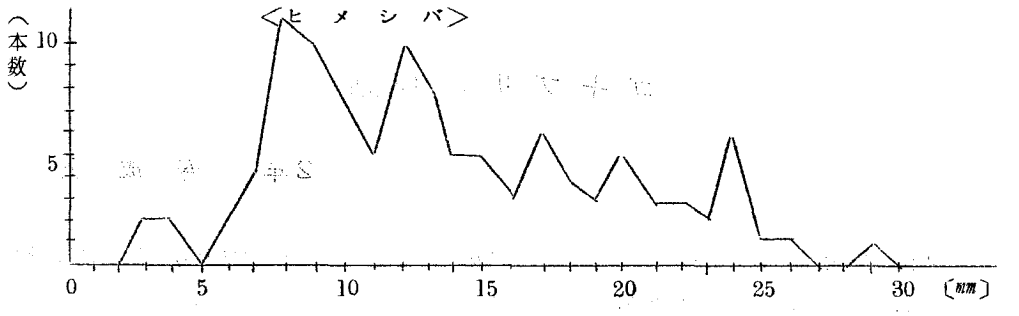
ネズミノオ　向陽の原野・路傍に生じる多年生草木　小穂は密着している。
高さ40～80cm　長さ20～30cm　花の咲く時期9～11月

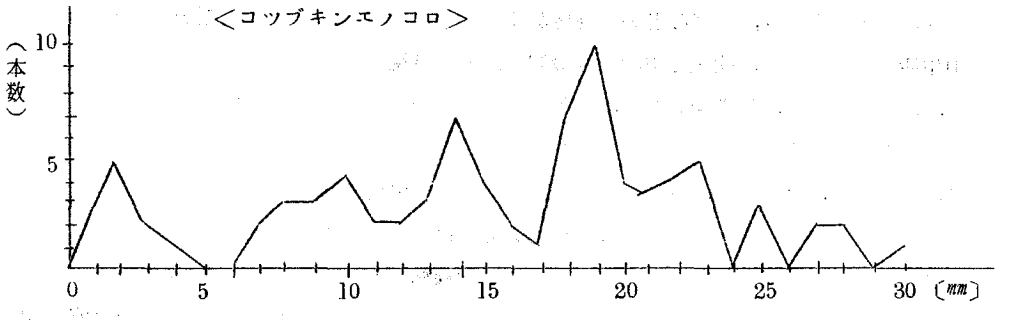
ギョウギシバ　日当りのよい路ばたや堤・海辺などに生える多年生草本　分布：温帯～熱帯
高さ15～30cm　長さ5～8cm　草の咲く時期6～8月

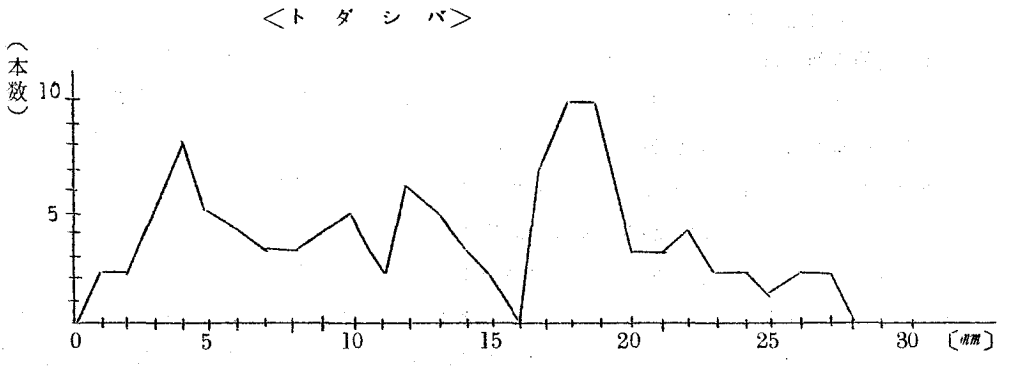
※「まのせ2号」では，アキメヒシバはぬけているが，これをとったのが10月下中旬である。したがって，時期によって，ぬけたり，ぬけにくくなると考えられる。これから考えられることは，幼年のほうがぬけやすく，老年になるとぬけにくくなる。これは，なにか組織の変化からではないかと考えられる。

〔イネ科でぬけやすいもの〕……実験以外のもの

キンエノコロ，ノビエ，ニワホコリなどである。（「まのせ2号」より）







◦上のグラフのような結果になったので，分離点は下表のようになると思われる。

	ヒ メ シ バ	コツブキンエノコロ	ト ダ シ バ
調 査 本 数 (本)	102	92	102
分離点の分布幅 (mm)	2 ～ 29	1 ～ 32	1 ～ 27
分 離 点 (mm)	8 ～ 13	18 ～ 19	17 ～ 19

ゴキブリのお話し

2年　春成正和

昆虫の出現は今から4億4000万年以上昔のことで地球は今とはたいへん異なっていました。大陸は，ローレンシア，アンガラ，ゴンドワナの3つだけでした。ローレンシアは今のカナダ，ヨーロッパにまたがるあたりであって，そのころは熱帯のような暑い気候でしたから，大きなトクサ，ヒゲノカズラ，シダなどの大森林が茂っていました。このような熱帯の海岸のどこかで海中生活する祖先から，陸上で生活する最初の昆虫が出現したのです。シルリア期とよばれる時代で，は虫類の2倍，哺乳類の3倍，人間の1000倍以上もの歴史をもっているといえます。ゴキブリはこれより進化して後8000万年たって，石炭期とよぶころになって羽のはえたトンボ，カゲロウ，ゴキブリ，バッタの祖先とに分かれて出現してきました。

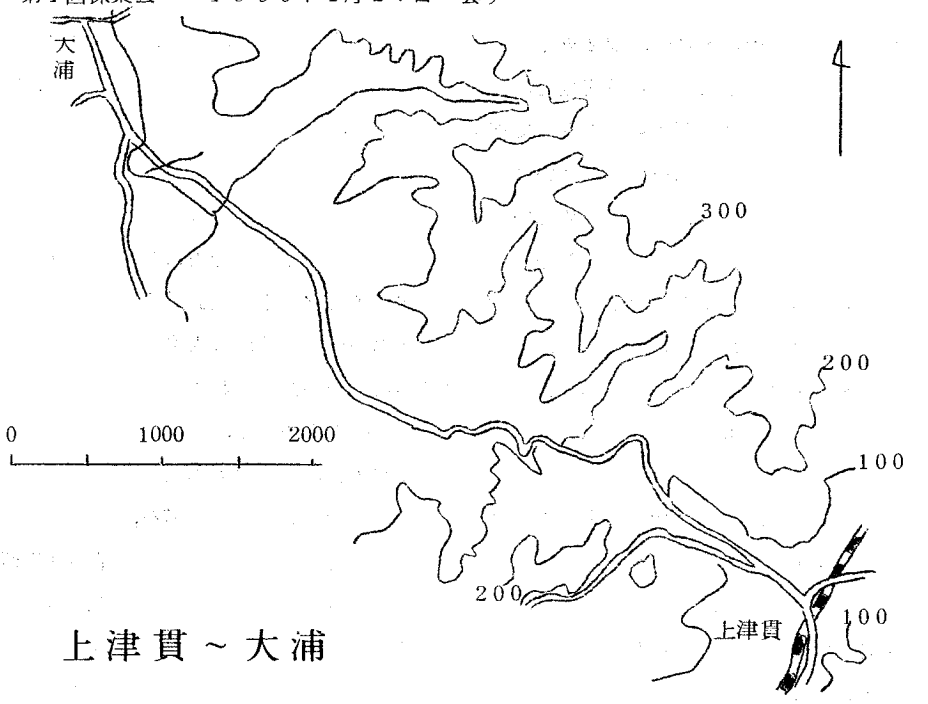
ゴキブリは羽をたたむことができましたので，狭い所での生活もできました。この時代は昆虫を獲って食べる鳥や獣もいませんでしたので，大森林をわがもの顔に飛んだり走ったりしていたにちがいありません。日本のゴキブリ，その他の昆虫はアンガラ大陸とゴンドワナ大陸の東部で発達したものだと言われています。

さて数億年前とほぼ同じような形をしたこのゴキブリは家の中に住む代表的昆虫として知られています。ネズミなどと同じように私たちから嫌われ，姿を見るとすぐに殺虫剤でもかけたくなるくらいの嫌われ者です。しかし腐った木や，石の下，木の上などに住む種類が多く南に行くほど種類がたくさんいます。ところでこの『ゴキブリ』という名前ですが『御器かぶり』からだと言われます。『かぶり』は『かみつく』の意です。

私は採集会のたびにきまってゴキブリに会いました。ゴキブリはじっと止って長い2本のアンテナをきかんに動かして，少しでもこちらが動きようものなら，パッ！と消えてしまうようなものもいます。私は集めているうちにこのゴキブリに愛着が持てるようになりました。自分からそうありたいと思ったわけではないのに自然にゴキブリの姿，動きが，すごくかわいくなりました。。次に新しい種類ののを見つけてゆくとますますそんな気がしました。

大きさは体長3～4ミリぐらいから3～4センチぐらいまできまざまで，雌雄によっても大変ちがっています。まず家の中にいるクロゴキブリ，チャバネゴキブリ，屋外にいるキスジゴキブリ，サツマゴキブリ，オガサワラゴキブリ，オオゴキブリなどです。このオオゴキブリは去年（1969年）の夏に2頭採集しました。1頭は何も食べさせないで2週間も生きました。これは人間とくらべてみても大変なことです。私は改めて生命力の力強さを感じさせられました。

第1回採集会　　1969年4月27日　曇り



上津貫～大浦

2年　大迫祥三

○コース　加世田発（8：25）－(汽車) －上津貫（8：50）～（9：50）－
(徒歩) －大浦（3：10）～（4：10）－(バス) －加世田（5：00）

○参加者　佐方先生　新山先生
3年　西村和之　福島文徳
2年　大迫祥三　田中洋海　浜川知博　春成正和　本坊敏保
1年　阿久根雄二　山口秋生　西川路孝子　本田ゆみ子　前田栄子　森永香代子

1969年　4月27日，あいにくの曇り空だったが，新入部員歓迎の意味で本年度最初の採集会を行なう。2年の女子が全然参加しなかったのは大変残念だったが，参加者16人と，まずまずの人数で，大浦の蝶を全部採ってやらんぞとばかりはりきって出かけた。1年生は，はじめての採集会であるためか，はじめのうちはおとなしくしていた。

大部分が加世田発8時25分発の枕崎行きの汽車に乗り込んだ。まるで小学生のようにはしゃいで，つつじなどの春の花を横にしながら，約20分間汽車にゆられ（これは，レールがひん曲っているため）ようやく上津貫駅に到着した。上津貫駅で採集器具などの点検，並びに大切な弁当の整理，コースの再点検などを行ない，さあ，いよいよ出発だ。

植物班はまず，レール沿いの植物から採集し始めた。今まで見たこともない，珍しい植物が多い。それらをつぎつぎとドウランの中へつめこんで行くと，このぶんでは午前中にいっぱいになりそうだ。一方，昆虫班は，珍しい蝶が出てきたら，今にもつかまえようとばかり張りきって駆

けだした。

人家がぽつんぽつんと立つ，幅2mぐらいのじゃり道を歩きながら，何か珍しい植物はないか捜した。そしてかたっぱしから名前覚えのために採集していった。かねてよく目にしていても見のがしがちである小さな草花も，こうして採集していくと，大変おもしろいものである。春のすばらしい日和のためか，草花もいっぱい咲きほこっている。（きんぽうげ）（げんのしょうこ）（たつなみそう）などといろいろ集めていくうちに，しだいに人家もまばらになってきた。途中で赤紫色のたけの高いしっとりとした花が目についた。さっそく佐方先生にたずねてみた。「先生！あらあ何んちゅう花な？」「あんたあゼニアオイよ！」と一発。「そうかあ，あれがゼニアオイか。たしかおれんちにもあったよなあ。」と思いつつ（それは人家のものだったが）ちょっと失敬。またしばらくゆくと美しいカノコユリが目についた。これまた同じく失敬。こういうふうに道ばたの草木をおもに，また，たまには，「失敬」もやって，いつの間にか山道にはいっていた。山道へはいると，コケ類，シダ類，木本類が多い。採ったものは一つ一つ佐方先生や新山先生にたずね，その植物の特徴などをメモにとった。杉の立ち並ぶ山道を，ミズスギやゼンマイなどを採集しながら行くと，スイカズラを見つけた。これはかねてからよく見かける植物だが，スイカズラの花は，はじめ白であるが，やがて桃色に変色してゆくそうである。おもしろいので採集しておいた。ところが同じ場所で，サルトリイバラを採ろうとして手を出したとたん，僕のモミジのようなかわいいこの手を竹の切りかぶでブスリ。ああイテェ！。そこにやさしくおとずれたのが愛の女神ならぬ本坊君。さっきまで自分の体よりも大きいリュックを背負って一生懸命蝶を追っかけていた彼が，ちょうどよいところに，薬とテープを持ってきていた。おかげで僕のかわいいこの手も助かった。

出発してから2時間余りたった。ここはちょうど津貫～大浦の中間で峠の頂上である。さすがに風は強かったが，汗をかいた膚にはここちよい。ところがしばらくすると，蝶班の浜川君が短い足を巧みに交互に動かしながらものすごいスピードで突進してきた。その方向を見るとアオスジアゲハを見つけたらしい。高さ2～3mの土手の上のシャリンバイの花にとまっている。しかし浜川君の健闘もそこまで。そこからは一年生の阿久根君にバトンタッチ。阿久根君は，我こそは山猿なるぞとばかりすばやくその土手に登り，10分位の苦心のすえ，ようやくつかまえた。ある人たちはそこで用を足し，またテクテクと“てふてふ”を追いかけながらゆるやかにつづくくだり坂をおりていった。

またしばらくゆくと，杉の密林の中の腐葉土に，かって見たこともないあざやかな黄色のランに似た花を見つけた。ちょっぴり誇らしげにして，ていねいにほり起こし，土をつけたまま先生のところに持っていった。先生や福島先輩の話によると，キエビネ，というものだそうだ。これぱかりは丁寧にドウランの中に入れ，歩き出すと突然「発破やっどおー。はよ走らんか。まだまだずっと向こうぜい走らんか。こら！さっさとせんか！」と声がした。採石場の岩山をくずすためのダイナマイトであった。その声があんまり大きく，さらにまた，1万サイクルにも近いような声だったので，後を追いかけられているニワトリのように駆け出した。そして，ほっとため息

をついたところで，ドカーン。危機一髪だった。

さっきから腹がグウグウうなっている。何かを求めているらしい。時計を見ると腹時計とぴったり１２時。岩山をくずしたあとのようなすずしいところで弁当を開いた。あちこち走り回った後の弁当は，さすがにうまかった。人の分までたいらげてしまったほどである。その場所で採集品のおおまかな整理をして，さらにそこでガンゼキランなども見つけた。春成君はそこで珍しいゴキブリを見つけて採集したようだ。４０分程休んでから，再び大浦へと下っていった。このあとはあまり採集品はなかった。

昼食後出発してから，約１時間半歩くと，そこは大浦であった。このときはもう足は棒のようになっていた。バスの時刻がはっきりとわからないため，大浦の公園へ行き，そこで休息しながら採集品を分担した。その公園には美しいフジが咲きほこっており，そのあざやかな紫色がその公園をいっそう明るくしているようだった。また珍しいサクラツツジもあった。そこで１時間余り休息すると，バスの時刻がやってきた。大浦の停留所からバスに乗り，加世田へと向かった。みんな帰りのバスの中では，一日の疲れのためかぐったりとしていた。このクラシックバスに揺られて約４０分，ようやく加世田に帰り着いたのである。

この日は採集に適した日和ではなかったため，蝶の採集が少なかったことが，少々残念であった。この日は主に次のような植物並びに昆虫を採集した。植物は約１１０種もあった。

〔双子葉〕

＜合弁花＞ **きく科** ノアザミ・ジシバリ・ヤクシソウ・イズハハコ・キツネノアザミ・ノゲシニガナ **ねみなえし科** オミナエシ **すいかずら科** ハクサンボク・ガマズミスイカズラ **あかね科** ヤエムグラ・ヨツバムグラ・**ごまのはぐさ科** オオイヌフグリ **しそ科** タツナミソウ **つまつづら科** オオムラサキシキブ・ハマクサギ **えこのぎ科** エゴノキ **やぶこうじ科** イズセンリョウ・タイミンタチバナ **つつじ科** サクラツツジ・シャシャンボ

＜離弁花＞ **せり科** ミツバ **うこぎ科** タラノキ **ぐみ科** ナワシログミ **きぶし科** キブシ **つばき科** ヒサカキ **ぶどう科** ビンボウカズラ・エビヅル **みつばうつぎ科** ゴンズイ **うるし科** ヌルデ **とうだいぐさ科** アカメガシワ **ひめはぎ科** ヒメハギ **みかん科** ハマセンダン・カラスサンショウ **にがき科** ニガキ **ふうろそう科** ゲンノショウコ **まめ科** カスマグサ・クズ **ばら科** ヤマブキ（栽培）・ナワシロイチゴ・クマイチゴ・シャリンバイ・ヤエ・ヤマブキ・コデマリ・ホウロクイチゴ・ナガバモミジイチゴ・キンミズヒキ **とべら科** トベラ **まんさく科** イスノキ **ゆきのした科** マルバウツギ・コンテリギ **くすのき科** タブ・シロダモ **つづらふじ科** ハスノハカズラ **あけび科** ムベ **きつねのぼたん科** ヒメウズ・キツネノボタン **すべりひゆ科** ノミノツヅリ **たで科** ツルソバ・イヌタデ・ミゾソバ・ニワヤナギ **うまのすずくさ科** ウマノスズクサ **いらくさ科** ヤブマ

オ・ヤナギイチゴ　**くわ科**　イヌビワ

〔単子葉〕　**らん科**　キエビネ・エビネ・ガンゼキラン　**ゆり（ほととぎす）科**　ヤブラン・ノビル・ツルボ・ソクシンラン・サルトリイバラ・ホトトギス　**さといも科**　ムサシアブミ　**いね科**　シマヨシ（栽培）・カモジグサ・イチゴツナギ・カズノコグサ

〔シダ類〕　**うらぼし科**　ノキシノブ・アマクサシダ・コモチシダ・クリハラン・ヒトツバ・マメツタ・オニシダ・ホラシノブ　**うらじろ科**　コシダ・ウラジロ　**ぜんまい科**　ゼンマイ　**いわひば科**　タチクラマゴケ　**ひかげのかずら科**　ミズスギ

〔地衣類〕　ヤグラゴケ

＜採集及び目撃蝶＞

ジャコウアゲハ　卄
アオスジアゲハ　卄
モンキアゲハ
ヒメウラナミジャノメ
クロヒカゲ
クロコノマチョウ
ルリタテハ　卵，1令幼虫数匹採集
キマダラヒカゲ　1♀ coll
クロセセリ　卄
キチョウ　卄
モンシロチョウ　卄
コミスジ　卄
アオバセセリ

短報No.3

ツマベニチョウを求めて（Ⅳ）〔秋目編2〕

2年　浜川知博

8月9日　快晴

自転車で秋目まで出かけた。

まず防波堤側にある人家の上にあるギョボクの群生地を調べたが何も発見出来なかった。そこでガードレール沿いの所から上る谷川のギョボクの群生地に行った。まずツマベニ1♀（大破）を採集した。それから附近のギョボクで，終令1，三令1を採集した。さらにその上流の方で卵を十数個見つけたが，そのままにしておいた。

＜採集蝶＞

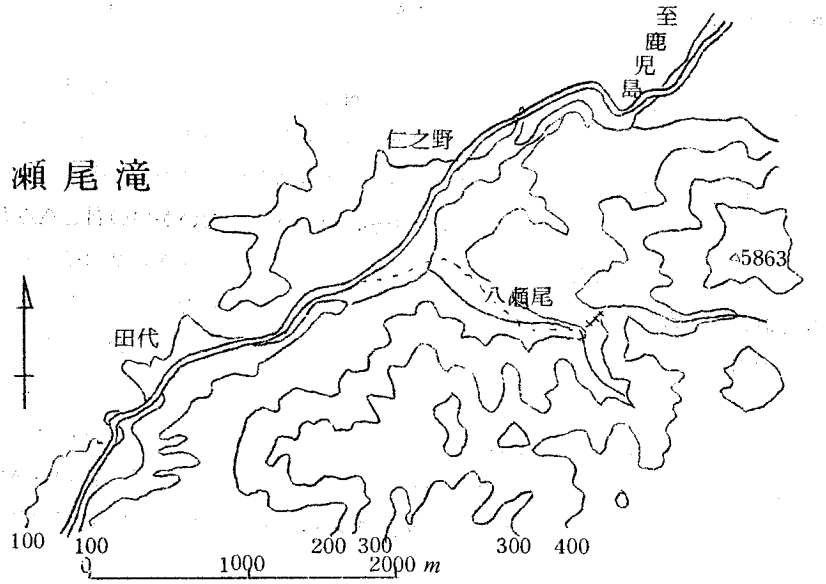
ツマベニチョウ　1♀ coll　卵十数個

終令幼虫1匹 ——→8月4日（?）　蛹化——→8月24日　♀　羽化

3令幼虫1匹 ——→8月23日　蛹化 ——→9月3日　♂　羽化

１９６９年１０月１９日（Sun）曇り　第２回採集会

２年　阪本京子



◦コース　加世田駅発（９：１０）－（バス）－田代（９：４５）－（徒歩）－八瀬尾の滝（１１：３０）～（徒歩）－田代（４：０５）－加世田（４：５０）

◦参加者　佐方先生　山本先生

２　年　大迫祥三　田中洋海　浜川知博　本坊敏保　春成正和　坂本京子　崎山順子　樋渡祥子　前田久美子

１　年　阿久根雄二　山口秋生　下園弘子　中間睦子　本田ゆみ子　前田栄子　園田栄子

１９６９年１０月１９日，採集会に適したよい天気であった。

９時１０分加世田駅を出発。バスは満員で，大きな荷物を持った男子は，大変だったようだ。約３０分後，田代駅で下車。そこで採集器具の点検。それから，歩いて八瀬尾滝に向かった。

さっそく男子は，蝶の追いかけあいである。女子は植物の採集を行なった。道路わきの岩かげにうすい赤紫色のハギの花が美しい。そこで，全員で写真撮影をした。佐方先生の撮影は，ずいぶん時間を要した。ススキの葉かげで，モウセンゴケとヒメノボタンを採集した。

歩きやすい舗装道路を折れて，まわりを山と田畑にかこまれた細い静かな道へはいった。そこは，さすがに珍しい植物が多かった。田んぼの土手に，小さな赤い花をつけたゲンノショウコが美しい。枯れ草の下は，コオロギなどの虫の世界のようである。夜は，鳴き声でにぎやかなことだろう。だんだん時間がたつにつれて，みんな散り散りに歩いている。

しだいに，ゆるい登り坂。その曲がり角で，コケ類の採集をして，ビニール袋に入れた。右側の山と，左側の田畑の間の石ころの多い道である。左側の岩の上で，ナンバンギセルとホトトギスを，右側の土手で，ミズスギ，ヤマジソ，キツネノマゴ，ヒメムカシヨモギ，ガンクビソウなどの採集をした。

ずいぶん歩いて，まわりを山でかこまれた雄大な八瀬尾滝に到着。滝の下流に鯉が数匹泳いでいた。みんなの到着を待って，記念碑の下で昼食をとった。なんだか静かな昼食だった。昼食が終わると再び採集に取りかかった。男子諸君は，あまり張りきりすぎたのか，それとも食べすぎたのか，それとも，もともとズボンがボロだったのか，はっきりしないが○○君と△△君のズボンが破れてしまい困っていた二人だったが，かねてから準備のいい××さん？の糸と針のおかげで，再び蝶を追いかけ始めた。一方，女子は主に，シダ類の採集を行なうことになり，この1日だけ勇ましく前田さん，崎山さん，樋渡さんの4人で，滝の横のがけを登りはじめた。登り始めたところで，ふと横を見ると珍らしくシダが岩にべったりはえていた。もうこれ以上，登れないというところまできたけど，山本先生は，どんどん登ってゆかれた。降りる時も，先にころがるようにして降りていく山本先生の，「ヘビがいるぞ！」というその声に4人も，いささか驚いて足も先へ進めることができなかった。ヒノキシダ，コシダ，シロヤマゼンマイ，ワラビなどを採集した。

一方，一年生は，山本先生と地学の勉強をしていた。岩石の名前や断層の説明など，とてもむずかしい話のようだった。

さて私たちは，シダ類の採集が，ほとんど終わると滝のもっと向こうまで歩いてみた。大きな丸太を並べて作った橋があった。その下に降りてみた。かたい丸い石がいっぱいあって，その石の上に，上流から流れて来たらしい枝が，たくさん積み重なっていた。その下のすき間から，つめたく清い水が流れ出てくる。そのちょっと先まで行くと，台風の時にでも荒らされたのか，大木が根こそぎにされて横たわっていた。大自然を思わせるようである。その下に，足元の石をとって投げてみると，石が落ちていく音が小さくなっていった。

こうして，3時頃まで八瀬尾滝付近ですごし，どのドウランもいっぱいになったし，男子も珍しい蝶を採集して，八瀬尾を後にした。

帰り道では，おしゃべりがはずんだり，変なおじさんに会い大笑いしたり，田舎道の入口のところで，往来の車の台数を数えたりして，楽しかった。植物の名前も少しずつ覚えて歩き，田舎道から，舗装道路に出ると，急に歩調も速度を増していった。足も疲れて，早くどこかに腰をおろしたい気もした。停留所が見えて来ると，増々歩調の速度も増していき，帰りには，あまり採集物はなかった。

停留所に着いて，近くで水を飲み，石段に腰をおろすとため息が出た。バスの時間を見ると，まだ30分も時間があるので，みんなのドウランも，あけてみた。その中に，だれが取ったのだろうか，短く折った枝に1個，くりがついていた。まだ青く鋭いとげをもったそのくりを，みんなが取り合ったので，落ちてしまった。またそこでは，バクチノキという，珍しい名前の植物も

覚えた。

男子が到着して間もなくすると，バスが来て川辺まで乗車した。帰りのバスは行きとちがってゆっくりしていた。秋風がバスの窓を経て中にはいりこみ，バスの中は，にぎやかだった。隣りのお客さんに「どこの生徒か？」とたずねられた。堂々と「加世田高校生物部員です。」と答えると，「それじゃこの名前知っているか。」とひと包みの新聞紙を出された。「知りません。」では部員に面目がないと，一時ひやりとしたが，その悩みもすぐふっとんだ。「アスパラガス」だった。ところが，「聞けばどのくらい知っているか，ためしてみた。」と言うのだ。その後は話しかけられても，馬耳東風を実行した。

そして，川辺で数分待って，加世田へ向かった。

学校に5時ごろ着き，植物を水そうにつけると，急に空腹を感じたので下校した。

一日中，ずいぶん歩き回り，ちょっぴり疲れを感じたけれども，とても楽しい一日でした。最後に補習やかり入れの手伝いなどで，この採集会に全員が参加できなかったことを，残念に思いました。

採集した植物は，110種でした。（果）は果実，（花）は花，（胞）は胞子などです。

〔双子葉〕

＜合弁花＞ **きく科** センダングサ（果）・シラヤマギク（花）・オトコヨモギ（果）・アキノノゲシ（花）・ヤマジノギク（花）・アキノキリンソウ（花）・ヌマダイコン（花）・ヤクシソウ（花）・ダンドボロギク（花）・ガンクビソウ（花）・ヒメムカシヨモギ（花）・ベニバナボロギク（花）・メナモミ（花）・ヤマヒヨドリ他イナカギク（花）・ヤマジノギク（花） **ききょう科** ツリガネニンジン（花） **おみなえし科** オトコエシ（花） **すいかづら科** ハクサンボク（果）・ハマニンドウ（果） **あかね科** タニワタリノキ・アカネ（花）・アリドオシ **きつねのまご科** キツネノマゴ（果） **はまうつぼ科** ナンバンギセル（花） **ごまのはぐさ科** コシオガマ（花） **なす科** ヒヨドリジョウゴ **しそ科** クルマバナ（花）・ヤマジソ（果）・ヒキオコシ（花）・ミヤマトウバナ（花）・ヤマハッカ（花） **ががいも科** キジョラン（花） **ふじうつぎ科** コフジウツギ（花） **ややぶこうじ科** イズセンリョウ（果）・ツルコウジ（果） **つつじ科** ミツバツツジ

＜離弁花＞ **さるなし科** ナシカズラ **ぶどう科** エビヅル **ふうろそう科** ゲンノショウコ（果） **とうだいぐさ科** ヒトツバハギ・コミカンソウ（果）・アブラギリ・アカメガシワ **まめ科** ヌスビトハギ（果）・トキワヤブハギ（果）・クズ・カワラケツメイ（果）・マルバハギ（花） **いばら科** バクチノキ（花）・ワレモコウ（花） **けし科** タケニグサ（果） **くすのき科** アオモジ（蕾） **きつねのまご科** キツネノマゴ（果） **たで科** イタドリ・ミゾソバ（花）・ミズヒキ他イヌタデ（花）・キンミズヒキ（花） **いらくさ科** イワガネ・アカソ（果）

ぶな科 クリ (花)　やなぎ科 ヤマヤナギ　こしょう科 フウトウカズラ

＜単子葉＞ らん科 ガンゼキラン　ゆり科 ホトトギス (花)　さといも科 オオハンゲ　かやつり草科 ナキリスゲ (花)　イネ科 チヂミザサ (花)・オガルカヤ・アシボソ (花)・イタチガヤ (花)　アキカサスゲ (花)・チカラシバ (花)・イヌアワ (果)・トダシバ (果)・ヒメアブラススキ (果)・ヌカキビ (花)・コブナグサ (花)・カゼグサ (果)

＜シ　ダ＞ うらぼし科 ヌカボシクリハラン (胞)・セリノホクリハラン (胞)・ホシダ胞ハマホラシノブ (胞)・オオバノイノモトソウ (胞)・コクモウクジャク (胞)チャセンシダ (胞)　イタチシダ (胞)　ワラビ・オニヤブソテツ・タチジノブナチシダ うらじろ科 コシダ ひかげのかずら科 ミズスギ かにくさ科 ツルシノブ

＜採集及び目撃蝶＞

アオタテハモドキ	1♂ coll	モンシロチョウ	＃
イシガケチョウ	6 coll 6 wit	キタテハ	
アサギマダラ	1♂ 3♀ coll	アオスジアゲハ	
ルリタテハ	1 coll ＃	サツマシジミ	1 coll
ツマグロヒョウモン	＃	アゲハ	
イチモンジチョウ	13 coll ＃	ツバメシジミ	1 coll
スジグロシロチョウ	9 coll ＃	ルリシジミ	＃
クロコノマチョウ	1 coll ＃	ウラギンシジミ	＃

短報No. 4

八瀬尾の滝採集記

二年　浜川知博

10月26日　曇り

先週（10月19日）の採集会でたくさんの収獲があったので，きょうも風が少しあったが，張り切って出かけた。

＜採集，目撃蝶＞

(シジミチョウ科) ムラサキツバメ＃3 coll　ベニシジミ2目撃

(シロチョウ科)　モンシロチョウ＃スジグロシロチョウ＃1 coll

(タテハチョウ科) イシガケチョウ1♂coll イチモンジチョウ＃5 coll コミスジ＋アカタテハ＋ルリタテハ＋ツマグロヒョウモン＃1♂coll

(アゲハチョウ科) アゲハチョウ ＃

１９６９年３月２６日　曇りのち　晴れ

早春の蝶ツマキチョウを求めて

２年　田中洋海

◦コース　加世田発（８：２５）－〔バス〕－大浦（９：２０）－〔徒歩〕－秋目（１１：００～１３：００）－〔徒歩〕－大浦（１５：１０）－〔バス〕－加世田着

◦参加者　３年　福島丈徳　西村和之

２年　田中洋海　本坊敏保　浜川知博

我々，蝶屋にとって待ちに待った春がやってきた。その一番手ともいうべきやつがツマキチョウである。３月下旬～４月にかけて年１回しか発生しないためこの機を逸してしまわないようにここ数日特に気をつけていた。３月２４日，第１号（♂）が加世田市益山で採集された。先輩の話しから昨年も同じ日にはじめて採集され，秋目方面に特に多いと知った。そこでさっそく春休みの第１日目のきょう我々５人で行ってみることにした。

朝からすっきりしない天気でどうしょうかと心配であったが，なんとか雨は降らない。加世田発８時２５分のバスに全員乗り込んで出発していった。大浦でバスを降りて用具の点検をしてみてびっくり。なんという準備の悪さよ。三角紙が一枚もない。しかたなく近くの店で間に合わせにトレッシングペーパーを買い込んで三角紙にした。そしてなんとか秋目へ向かうことができるようになって大浦の町をはなれて畑の中を歩いて行くとモンシロチョウがあっちこっち飛び回っていた。すこしそのまま行くと，自分の目にモンシロチョウの小型らしいやつがうつった。もっと近くなると「おっ，ツマキやらい。」という声とともに一勢に採りにかかる。僕もしゃにむにネットを振った。運よく自分のネットの中へ消えた。やはりツマキチョウ（♂）だった。それからずっと峠を越えて秋目へとおりていった。途中，段々畑の所で飛んでいたやつ（ツマキチョウ♂）を本坊がジャンプキャッチ。「くそう，うまくやりやがったな。」と歯ぎしりしたが早いか，本坊はすってんころりとしりもちのおまけをもらって大笑い。

秋目の部落に着くとしばらく堤防の所で休んで海岸の方へゆっくり下りて行ってみることにした。そこではウラギンシジミが１頭目撃されただけだったので，そろそろ上へ行ってみようとした時，浜川が岩から足をふみはずして水の中へドボン。ひざまでびっしょりぬれて，おまけに弁当を入れたナップサックも水に浸してしまって見る目もいたましく，本人も黙っていて気の毒でしかたがなかった。ともあれみんな上の墓地の道へ上っていった。一番後ろのほうからのこのこ上っていったぼくは，ふと下を見ると，モンシロチョウかな？と思って採ってみたらこれもまたツマキチョウ（♂）だった。この時ごろからモンシロチョウとツマキチョウの飛びかたの違いに気づきだした。上への道路へ出ると，バタバタバタという感じでフラフラ一直線に飛ぶツマキチョウが次から次へと飛んできた。それをおそらく十数頭採ったと思う。そのうちに昼めし時にな

ったので，腹がへってはいくさができぬということでめしにすることにした。

結局，我々の収穫は２０数頭になり，どういうわけか，僕が非常についていて半分ぐらいを採ってすこぶる気分がよかった。またツマベニチョウはまだ見られなくて，ギョボクの芽もそんなにのびていなかった。

このようにして目的を十分に果たして我々は3時１０分大浦発のバスに乗り込んで帰った。

＜採集および目撃蝶＞

(シロチョウ科)

モンシロチョウ　卄

キチョウ　十

ツマキチョウ　２０数頭採集　うち4♀

(タテハチョウ科)

ルリタテハ　１♀採集（大浦にて）

キタテハ　卄

(シジミチョウ科)

ベニシジミ

(ウラギンシジミ科)

ウラギンシジミ　♀卄目撃

(ジャノメチョウ科)

クロコノマチョウ　１目撃

短報No. 5

〔秋目～大浦～仁王崎～大当〕採集記

二年　田中洋海

8月２４日　晴れ

台風後の迷蝶をねらって先輩の大原さん，出来さん，染川さんと西村，本坊それに私の６人で採集に出かけた。まず秋目に行った。小学校で「リュウキュウだ！」という出来さんの声にみんなびっくり。さらに「取った！」と続いた。そこまでは申し分はなかった。しかし，よく見るとそれは，ナガサキアゲハの大破したやつで全員がっくり。秋目はあきらめて大当に行くことにした。途中大浦で大原さんがギンモンウスキチョウを発見したが，すぐに飛び去ってしまった。そして仁王崎，大当と行ったがたいした収穫もなかった。

また，この日もツマベニチョウは１頭も発見出来ず，先輩達も少ないなあと心配していた。

＜採集，目撃蝶＞

ナガサキアゲハ　１coll　モンキチョウ　卄　スミナガシ　１目撃

モンキカゲハ　１coll　ウラギンシジミ１♀coll

ギンモンウスキチョウ　１目撃　クロアゲハ　卄　ツマグロヒョウモン　♂♀卄

秋　目　採　集　記

2年　浜　川　知　博

◦7月13日（日）晴れ

◦参加者　田中洋海　本坊敏保　浜川知博

◦コース　万世　－　大浦　－　秋目　－　加世田

我々3人は例によって秋目に出かけた。秋目へ行く途中2，3回，本坊の単車のチェーンがはずれた。しかし我々は，10時には秋目に着くことができた。

秋目に着くと我々は，少し休んでから，さっそくツマベニチョウを捜しはじめた。まず，最初に防波堤のある方へ向かって，山の方へ進んで行くと，10分もしないうちに，すぐにギョボクの木を見つけた。3人はそれぞれ我こそ一番さきに，ツマベニチョウの卵を見つけようとしてギョボクの木を一枚一枚ていねいに見つけ始めた。20分ぐらいたっただろうか，田中が一番はじめに卵を見つけた。残念しまった！その木は高さ1mぐらいの木で，あまり高くはなかったが数個も見つかった。卵を見つけてきょうは最初から調子がよいと思いながら，今度は，海岸に沿ってガードレールのある上の方の山に行くことにした。

そこにさしかかろうとして階段を登るやいなや，ギンモンウスキチョウらしい真黄色の蝶が，我々3人の目に飛びこんだ。一瞬みんながびっくりしたと同時にスーと飛び出した。先頭を歩いていた本坊がすばやくネットを振る。残念ながら空を切る。みんな後を追いかけたが，どこへ行ったのか影も形もない。これが我々が秋目で見た今日の最初の迷蝶である。みんな，まだあきらめきれずに，その辺をあっちこっち捜し回っていると，こんどは美しい白い蝶がスーと横切ったのを田中が見つけた。それゆけと僕と田中は，先を争って走った。しかし僕は近道をして，田中が見つけたものを，ものの3秒もたたぬうちに，ツマベニが無心に吸密しているユリの花もろともネットの中へたたきこんだ。それ以来僕は他の人たちから僕のそばにいると，蝶を横取りされるとおそれられている……。

12時が鳴った。腹の虫も鳴った。我々は昼めしを食べるために，海岸のそばの鑑真の記念碑が立っているところでひと休みした。みんな弁当を広げようとしたとき，一ぴきツマグロヒョウモンにそっくりなやつが，ヒラヒラと風にのって来た。田中が「メスアカガそら！」と言うと，我々はうそだろうと思ってなんとなく見ると，どこかツマグロヒョウモンと違っているのに気がついた。すると本坊がネットを持って追いかける。後に僕が続く，田中は一番最後，あと1mぐらいのところに本坊が追いつめた時，本坊は勢いあまって，側溝の中へ消えた。僕はチャンスとばかり先頭になってネットをランダムに振るとスッとネットの中へ入った。さっそく調べて見ると案の定「カバマダラ」だった。他の2人はとてもくやしがった。僕はここでも失敗をやってい

た。それは僕が持っていたのは田中のネットだったのだ。そのために田中は，みすみすカバマダラを取りそこなったわけだ。

昼めしはとてもうまかった。他の２人は僕の被害者だから，おもしろいはずがない。昼めしもまずそうだ。昼めしを食べたのちも，我々はガードレールの上の方を採集することに決めた。一本の大きな「エノキ」のそばでゴマダラが大きく輪を描いて飛んでいた。ネットを振るとネットのスプリングのところに当たってまっさかさまに落ちてきた。

それから２時ごろであっただろうか，３人はそれぞれツマベニか迷蝶を見つけようと必死で動き回っていた。すると今度は人家付近のところの草がたくさんはえているところより，クロコノマらしきものが飛び出した。採集してみると~~ウ~~ウスイロコノマチョウであった。これで今日は迷蝶を２匹つかまえた。

今日は，ちょうど１１日，１２日と雨が降ったあとで天気がよかったので大収穫であった。我々は，まだ採集したかったが，３時が鳴ったので帰ることにした。学校に着いたのは４時であった。

＜主な目撃および採集蝶＞

○ツマベニチョウ	1♂coll	○クロコノマチョウ	＋
○ギンモンウスキチョウ	1♀wit	○キチョウ	＃
○カバマダラ	1♂coll	○ジャコウアゲハ	＋
○ウスイロコノマチョウ	1 coll	○モンキアゲハ	1coll
○ゴマダラ	1 coll	○ナガサキアゲハ	＋
○スジグロシロチョウ	1 coll	○クロアゲハ	＋

○ツマベニチョウの卵６個と１令幼虫を６匹coll

短報No.6

〔大浦～野間池〕採集記

２年　田中洋海

１１月２日　晴れ

晩秋の一日，タテハモドキがひょっとして取れないだろうかというかすかな希望を胸に出かけてみた。でもやはりタテハモドキはいなかった。しかし思いがけなくメスアカムラサキ１♀を採集した。またこの一年少ない少ないと思っていたツマベニを２頭目撃した。

＜採集，目撃蝶＞

モンシロチョウ	＃	メスアカムラサキ	1♀coll	クロコノマ	＋
ツマベニチョウ	２目撃	ツマグロヒョウモン	＃		
アゲハチョウ	＋	アカタテハ	＃		

大　隅　を　行　く

2年　本　坊　敏　保

夏休みぐらいもっとちがった所に蝶採集に行きたいと思っていた我々３人は，大隅半島へ行ってツマベニやタテハモドキを採ってこようと出かけた。これは，その時のもようである。

◦コース〔3日〕加世田（６：５０）→千貫平（８：２０～５０）→山川（１０：００～４０）→根占（１１：３０）→佐多（１２：００～１：００）→大泊（２：３０）～大泊（３：００～４：００）→大根占（６：３０）

〔4日〕大根占（８：４０）→神ノ川（９：００～１１：００）→桜島（３：２０～３０）→鹿児島（３：４０～５：３０）→加世田（７：００）

◦参加者　　田中洋海　浜川知博　本坊敏保

8月3日（Sun）晴れ

今日は，いよいよ出発の日である。リックにネットや三角紙を入れ，根掘りなどを確めて田中の車にリックを積んで，ぼくたち３人は春成君の見送りをうけて出発した。朝のつめたい空気が実に気持ちよかった。

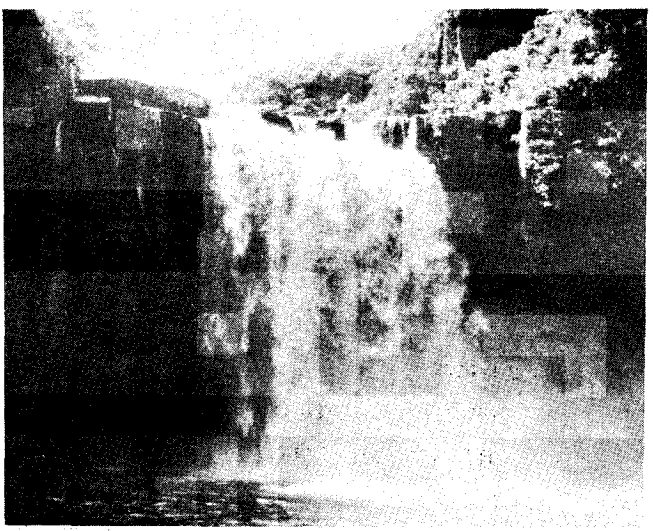
川辺街道をそれて知覧の町を通り過ぐして先をいそいだ。だいぶガタガタ道を走った。それからようやく指宿スカイラインへと出た。Toll-gate　で料金を払って快適に走った。加世田を出発して１時間半で千貫平の展望台に着いた。ここで少し休むため駐車することにした。草原は露のためだいぶぬれており冷たい感触がとても気持ちよかった。あたりにはたくさんのジャノメチョウが飛びかっていたので，加世田では見ないこの蝶を一斉に採集し始めた。蝶は，羽が少しまだぬれているのか，あまり活発に動けず容易に採集することが出来た。しばらくすると，美しくアサギマダラが飛び出して来たのでこれも採集した。思わぬ収獲であった。そしてまた走り始めた。朝が早いためか他の車はなかったのでスカイラインの変化する景色を十分に観賞しながら走っていった。山川に着いたのは１０時であった。ここからフェリーボートに乗る予定であるが時刻が悪く，佐多へ行く船には，待ち時間が３時間もあった。しかたなく根占行きのフェリーに乗船することにした。フェリーでは甲板の上から海をずっとながめた。フェリーと並んでモーターボートが競争していた。ボートの人が手を振ったけれどもぼくは，てれくさかったので振らなかった。

さていよいよ大隅半島である。根占から佐多までは２０㎞であるが３０分で佐多町へ着いた。丁度１２時になったので近くの学校で昼食することにした。そこには真赤なハイビスカスの花がきれいに咲いていた。昼食が終わってしばらくしていよいよ佐多岬へと向かった。それからはものすごい道だった。山道で登ったり下ったりしていて，車が後から後からほこりを飛ばしてひっきりなしにとおっていた。こんな道だったので転倒しやしないかと心配であった。ついに田中がひっくり返ってしまった。その時，ぼくと浜川は先を走っていたが，すぐ浜川が気がついてひき返した。幸い，ひじを傷りむいた程度であったのでほっとしたが，すこし行くと下の方に村落が

あったのでそこで赤チンキを借りてつけておいた。それからまた元の道へ登りきった所で，ぼくの目にツマベニチョウが見えた。「ツマベニがおっど！」と言うぼくの声に田中と浜川も大いそぎで登って来た。ぼくは見失なわないようにずっとツマベニの飛ぶのを見守っていると，浜川と田中は，すぐにネットを持ってぼくの所へかけつけてきた。我々の回りを飛び回ったあげく花にとまったやつを田中がネットにたたき込んだ。ツマベニを採ったので元気をとりもどしてふたたび出発した。しばらく行くとやっとガタゴト道から解放された。舗装道路になったからである。そこからちょっと走って行くと後ろの田中が何か言ったらしく浜川が止まれと言った。ツマベニがいるということであった。初め1頭しかいなかったが後からもう1頭飛んで来た。浜川と田中はもう下の方から採ろうと降りていってしまった。しかしぼくは，一人ぐらい上の方で見はりがいるだろうと思ってそのまま道の所に立っていると，浜川が振りそこなったやつが2頭でランデブー飛行をしながらやって来た。ぼくは，ぞくぞくしながら少しやぶの方へ寄り十分引きよせてすばやくネットですくい上げた。すぐに浜川と田中に「とった！とった！2匹とも採った！」と呼んだ。ぼくは初めてツマベニを採った。しかも一度に2頭も採ったのでとてもうれしかった。田中と浜川は少しくやしそうであったが，すぐによく採ったとほめてくれた。2頭は♂♀だった。予定の時間をだいぶ遅くなったので，先を急ぐことにした。大泊からは有料道路であった。そこをしばらく行くと，おっ今度は上り坂だ，それーっとアクセルをふかしたとたん．ブルブルグラグラ車体がモンキーダンスを踊りだしてしまった。パンクであった。佐多岬を目前にしながらあえなく断念しなければならなかった。大泊へ引き返しても自転車屋なんてなかった。しかたなく大根占のおじさんにトラックで迎えに来てもらってその日中になんとか大根占へと着いた。

8月4日（Mon）晴れ

大根占を8時40分に出発して神ノ川に行くことになった。途中ツマベニチョウを目撃したがすぐに飛び去ってしまったがさすがに大隅半島のツマベニ分布は広いと強く感じた。20分ぐらいで神ノ川に着いた。上流へ行くときれいな滝があった。その先にもまだ2つの滝があり一番上流のやつは，幅が20～30mはあろうと思われるようなやつで3人ともびっくりしてしまった。なにしろ傘をささないとしぶきが飛んできて近寄れないのであるというのはちょっとオーバー。ここでは蝶を採集し



ながら歩いて行ったが，コヤマダラチョウやウラギンシジミなどを採っただけであった。いい所だなあと思いながらいよいよ神ノ川を去ろうと，ネットや三角ケースをリックにしまったとたん，どこからともなくギンモンウスキチョウらしい大きめの黄色の蝶が頭上を飛び去った。アッという間に高く岩山の方へ消えてしまった。「チクショウ！チクショウ！。」残念で仕方がなかった。

神ノ川を出るともうただ加世田へと急いだ。（田中）

〔主な採集及び目撃蝶〕

○ツマベニチョウ	3日	島泊（佐多町）1♂coll　島泊～大泊2♂♀coll
	4日	鳥浜（大根占町）1♂wit
○キチョウ	4日	神ノ川（大根占町）艹
○ギンモンウスキチョウ	4日	神ノ川1（♂♀不明）wit
○アオスジアゲハ	4日	神ノ川1wit
○クロアゲハ	3日	千貫平十wit　島泊十wit　4日　神ノ川十wit
○アサギマダラ	3日	千貫平2coll
○ツマグロヒョウモン	3日	千貫平艹coll　大泊艹wit
○コマダラチョウ	4日	神ノ川1coll
○スミナガシ	4日	神ノ川1wit
○ウラギンシジミ	4日	神ノ川1♀coll
○ジャノメチョウ	4日	千貫平艹coll

短報No.7

ツマベニチョウを求めて（Ⅴ）

二年　田中洋海

10月5日　曇り

8月24日に一匹も秋目，大当方面でツマベニチョウを発見出来なかったため，ふたたび確認するために出かけた。しかし，天候もそんなによくなく1匹も発見出来なかった。それから，そろそろタテハモドキがいないかと特に大浦で探したが見当たらなかった。

＜採集　目撃蝶＞

(シジミチョウ科)　ルリシジミ艹　ムラサキシジミ艹　ヤマトシジミ艹

(シロチョウ科)　モンシロチョウ艹　キチョウ艹

(タテハチョウ科)　ルリタテハ1目撃　アカタテハ1目撃　ツマグロヒョウモン2♂♀coll　コシマジ艹

(アゲハチョウ科)　モンキアゲハ1coll　アゲハ艹　キアゲハ艹　アオスジアゲハ1目撃　ナガサキアゲハ1目撃

(ジャノメチョウ科)　ヒメウラナミジャノメ艹　クロコノマ2目撃

(ウラギンシジミ科)　ウラギンシジミ2♂目撃

１９６９年８月１２日　快晴

笠沙路採集記

２年　春成正和

○コース　加世田（８：２５）－バス－大浦（９：２０）－調査－（１０：３５）－徒歩
－赤生木（１２：００）－徒歩－（１２：２０）昼食（１２：５０）発
徒歩－小浦－調査－（３：１０）徒歩－（４：５７）発－バス－加世田

○参加者　田中洋海　浜川知博　春成正和　阿久根雄二　山口秋生

１年生をまじえて男子蝶屋だけの採集会を催した。１年間のスケジュールの中で最も楽しいものの１つである。８：２５発のバスに乗り大浦へ向う。加世田駅で２人，次のバス停で１人，また１人と序々に集まった。集まるとすぐに蝶の話，みんな胸はワクワク，話しがはずんだ。１時間ほどで大浦に着いた。すぐに大浦小学校へ行き水筒に水を入れたり，リュックの荷物をつめなおしたり，採集の準備を急いだ。１つの大きなリュックにまとめたので，少食の男子の弁当でもかなりの重さになった。まして女子がこれに加わると……。　準備完了すぐに小学校裏手の田んぼに出かけた。先輩に習って土手のビーティングから始めた。偶産蝶であるタテハモドキが大発生とまではゆかなくともここで昨年発生し，先輩たちは盛んに採集，調査に訪れたのだそうだが私たちは１頭もその姿を見ることはできなかった。そこで谷川へのコースを選んだ。

さすが８月ともなると草木は荒れ放題でまったく困る。そのうえ蜘蛛は黄い網を一面にひろげている。先導は１歩１歩踏みしめて進む。先導とリュックを背負っているものが１番活動しにくい。この谷川の方に来てからまず最初に緑や青に輝くカラスアゲハに出あった，そのときは今居る所より２メートルぐらい１段高くなった土手の上にあるクサギの花で吸密している彼女を見つけたのだった。するとスタートの良い浜川君は前の方から草をかき分け必死に土手を登ろうとしている。また阿久根君も，これは自分のものにしようと，これまた必死である。私と山口君は途中まで進み，浜川，阿久根両氏はもう土手に登りついて蝶にせまっていた。部長の田中君は重いリュックのためにどうにも動きがとれなかった。その時彼女は自分の身に危険を感じ大きく飛び出した。今日はついているのか田中君，さっとあざやかに　coll，それに対し残念なのか浜川阿久根両氏せっかく登ってきたのに！！！すべては部長のネットの中へと消えた。

やっとうっとうしい谷川をぬけ出た。そこにはみかんの青々とした葉を透して，すがすがしい風が吹いていた。今まで通ってきた所がまるでゲリラ兵の姿でもあてはまるような場所だっただけに新鮮な風だった。農道を通って笠沙高校の上を通り県道へ出た。俗にいう笠沙路である。潮風を胸いっぱいにうけながら野間半島を岬に向って進んだ。

リュックの番も変わり，秋目キャンプの話をしたり，部員の話をしたり，後がよくつきないもの

である。４４年度執行部のメンバーと同じくあまり足の長さにおいては自信のない我が生物部ではあるが，その中において浜川君はとびぬけて歩くのが速い。コンパスはあまり変わりないはずであると思われるからピッチでも速いのであろう／常に先頭を進んでいる。赤生木のあたりではほんとうにひどいもので先頭と最後との間は１００メートルにもおよんだであろうか。
歩いているだけでは収獲はないし．のどは乾くし，疲れもでてきた。秋目キャンプの時には通りがかりの車が乗せてくれたそうであるが，時々通る自動車にはそんな気配はなかった。私たちは車が通るたびに乗せてくれないかなと願いながらふり向くのであるが，いっこうにだめであった。道もこのあたりに来るとひどく石はごろごろしていて砂煙は車の通るたびにあがった。
小浦の少し手前に石碑があって，そこは眺めがよかった。時もちょうどよく昼食をとることにした。眼下に見える小島では多ぜいの人が海水浴をしていた。ちょっと双眼鏡でのぞいてみた浅く下が見え涼しそうな海である。みんな楽しそうだ。その時１台の大型トラックが僕たちの横に止った。そして白いつばの付いたボーシをちょっと横にかぶった運ちゃんという感じのおじさんがこちらに歩いてきた。内心乗せてくれるのかなと思った。それもつかの間石碑の影で昼寝を始めた。

昼食もすみまた出発である。ほこりをかぶったススキが日の光でいっそう白く，青色と対応していた。すこし行くと小浦に着いた。後からバスが来たので，歩くのをやめバスに乗った。乗ったのはよかったが，私たちは大当（おおと）に行きたいのに黒瀬行きのバスですぐに降りざるを得なかった，バスガイドさんは１人１０円ずつでよいと言うのです。結局バスに乗ったのは事実ですので，しかたなく１０円ずつ渡しました。ふたたび歩き始めた５人は玉林中学校の横に小さな川を見つけた。２年生の田中君，浜川君，それに私の３人はフアィトが出てきてすぐに登り始めたのですが１年生の２人はもうくたばって下で待つことにしたのか，いっこうに登ってきません。それにしても２年生の勢いはすごいものです。コンクリートの坂をかけ登って我先にとじゃんじゃん登ります。しだいに川は細くなって山へ谷川へと続きます。つるつるすべる岩をよじ登り，つるを伝わって木に登り，ベトコンさながらです。ここの谷川ではツマベニチョウの食樹であるギョボクを数本見つけました大した収獲ではありませんが今からの参考となるでしょう。それにサツマゴキブリがたくさんいました。そしてヤマトゴキブリにも御目にかかれました。

○おもな収獲

ウラギンシジミ	夏型２♂coll
カラスアゲハ	１♀coll
サツマゴキブリ	数頭coll
ヤマトゴキブリ	１　目撃
ギョボク	数本見つける

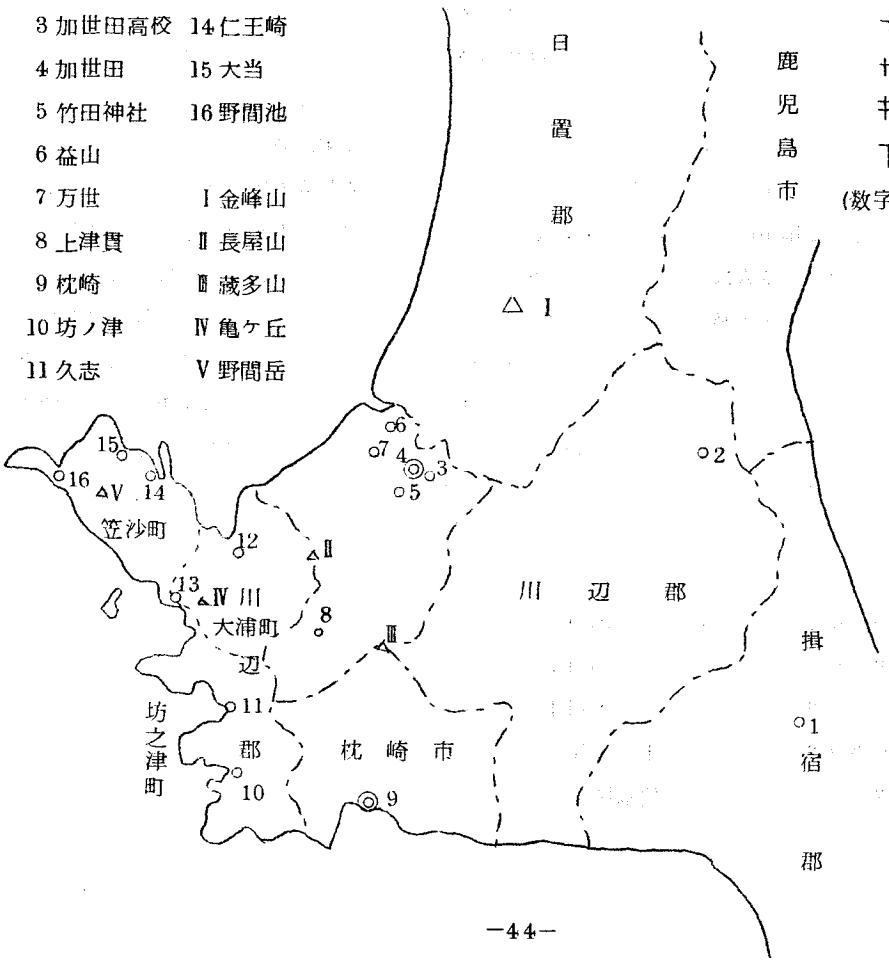
1969年の南薩の蝶類記録

2年　浜川知博　本坊敏保　春成正和　田中洋海
1年　山口秋生　阿久根雄二

この記録は，我々加高生物部員がこの一年間に記録したものである。すべて一年間書きなぐられた部日誌をそのままうつし取っただけであるために不備な点もたくさんあると思いますし，この記録だけではっきりしない点もあるかと思うため，その状況を各科ごとに補足してみました。おもな採集地は，竹田神社であるためこの場合区別しやすくするために「T」という記号を使ってあります。なお，これらの記録に用いられている記号は鹿児島昆虫同好会で使用しているものによった。

1 千貫平　12 大浦
2 八幡尾　13 秋目
3 加世田高校　14 仁王崎
4 加世田　15 大当
5 竹田神社　16 野間池
6 益山
7 万世　Ⅰ 金峰山
8 上津貫　Ⅱ 長屋山
9 枕崎　Ⅲ 滝多山
10 坊ノ津　Ⅳ 亀ケ丘
11 久志　Ⅴ 野間岳

〔記号説明〕
coll……採集
wit……目撃
十……少数
卄……普通
丼……多数
丁……竹田神社
(数字は頭数を示す)



＜セセリチョウ科 (Hesperiidae) ＞

〔1〕 コダイミョウセセリ

7月9日① T ♯

〔2〕 アオバセリ

4月20日① 久志 ♯ 4月27日◎ 上津貫～大浦 ♯ 5月3日○ T 幼虫数匹採集 6月3日◎ T coll 7月15日① T ♯ coll

〔3〕 キマダラセセリ

10月19日◎ 八幡尾滝 1 coll

〔4〕 クロセセリ

4月27日◎ 上津貫～大浦 ♯ 6月26日◎ T ＋

7月8日● T ＋

※セセリチョウ科の蝶はこの他にもまだ，たくさん採集または目撃しているが，我々部員の勉強不足で一般に整理されてなかった。コチャバネセセリなどは全然記録してなかった。

＜アゲハチョウ科 (Papilionidae) ＞

〔1〕 ジャコウアゲハ

4月 1日① T 3 coll 4月 2日○ 益山 ♯ 4月 7日 T ＋

4月17日○ T ♯ 4月19日○ T ♯ 4月20日 久志 ♯

4月22日◎ T ♯ 4月27日◎ 上津貫～大浦 ♯ 5月 8日 ① T ♯

5月11日◎ T ♯ 5月17日◎ T 終令1匹 6月13日 T ♯

6月26日◎ T ♯ 6月27日① 校内 1 wit 7月 9日 T ♯

7月17日① T ♯ 8月12日○ 大浦 ♯ 9月 6日 T ♯

〔2〕 アオスジアゲハ

4月20日① 久志 ＋ 4月22日◎ T ＋ 4月27日◎ 上津貫～大浦 ♯

6月27日① 校内 1 wit 7月 9日① T ♯ 7月12日① T ♯

7月25日○ T ♯ 7月29日○ T ♯ 8月 7日○ T ♯

8月12日○ 大浦 1 coll 8月17日① 亀ケ丘 ♯

10月19日◎ 八幡尾滝 ＋

〔3〕 ミカドアゲハ

5月 4日○ T ♯ 5月 5日○ T 1 coll 5月 9日○ T ♯

5月11日◎ T ♯ 7月25日○ T ♯ 7月29日○ T ♯

8月 7日○ T ♯

〔4〕 キアゲハ

6月 7日① T ♯ 7月 1日◎ 校内 幼虫3匹 7月 8日● T 1♀ coll

7月12日① T ♯ 7月25日○ T ♯ 7月29日 T ♯

〔5〕 アゲハチョウ

3月23日① 小浦 1coll 3月24日① 益山 十 4月 2日○ 益山 卄
4月 3日◎ 益山 十 4月19日○ T 卄 4月22日◎ T 卄
5月28日 千貫平 1coll 6月 7日① T 卄 6月26日◎ T 卄
7月 9日① T 卄 7月25日○ T 卄 7月29日 T 卄
9月 6日① T 十 10月12日○ T 卄 10月19日◎ 八頼尾 卄

〔6〕 クロアゲハ

4月 3日◎ 益山 1wit 4月19日○ T 十 4月22日◎ T 卄
7月 8日● T 3♂♂coll 卄 7月25日○ T 十 8月12日 大浦 卄
8月20日① T 1♂coll (異常型) 8月24日① 大浦 卄

〔7〕 ナガサキアゲハ

4月 2日○ 益山卄 4月 8日◎ 益山 1♂coll 4月19日○ T 十
4月22日◎ T 卄 4月22日◎ 益山 1wit 5月11日◎ T 卄
6月26日◎ T 卄 7月 8日● T 2♂♀coll 7月 9日① T 卄
7月12日① T 卄 7月15日 T 卄 7月17日① T 卄
7月25日○ T 卄 7月29日 T 卄 8月 7日○ T 1♂coll
8月12日 大浦 卄 8月20日① T 卄 8月24日① 大浦 卄
9月 6日① T1♂wit 9月14日① 校内 1♀wit
9月21日○ 万世～加世田 4♂♂wit 10月17日◎ T 1♂coll

〔8〕 モンキアゲハ

4月19日○ T 十 4月20日① 久志 卄 4月22日◎ T 卄
4月22日◎ 校内 1wit 4月27日◎ 上津貫～大浦 卄 5月 8日① T 卄
5月 9日○ T 卄 5月11日◎ T 卄 6月 3日◎ T 2♂♀coll
6月 7日① T 十 6月15日 久志 1♀coll 6月26日◎ T 卄
7月 1日◎ 校内 十 7月 8日● T 3♂♂♀coll 7月15日 T 卄
7月17日① T 卄 7月25日○ T 卄 7月29日 T 卄
8月12日 大浦 卄 8月17日① 亀ケ丘 1♀coll 8月20日① T 卄
8月24日① 大浦 卄 9月 4日◎ 校内 1♂coll

〔9〕 カラスアゲハ

5月 9日○ T 1♂coll 6月23日① 校内 1coll
7月 8日● T 1♀coll 7月29日 校内 1coll
8月12日 大浦 1♂coll 2wit

※今年は加世田市内では比較的まれな方であるカラスアゲハが多数発生したらしかった。またクロアゲハの異常型も採集された。(なお，ネムの木に飛来したアゲハチョウ類〔6月～7月〕の記録は，別記したためここでは省いてある。)

＜シロチョウ科 (Pieridae) ＞

〔1〕 キチョウ

3月15日○ T ＋　3月23日① 小浦 ＋　3月24日① 益山 ＋
3月26日◎ 秋目 ＋　4月 2日○ 益山 ＋　4月19日○ T ＋
4月22日◎ T ＋　4月27日◎ 上津貫～大浦 ＋　5月 9日○ T ＋
5月24日● T ＋　6月 1日○ 大浦 ＋　7月17日① T ＋
7月25日○ T ＋　8月12日 大浦 ＋

〔2〕 ツマグロキチョウ

3月 2日① 益山 1coll　3月15日○ T ＋

〔3〕 モンキチョウ

3月 2日① 益山 ＋　3月26日◎ 秋目 ＋　4月19日○ T ＋
4月27日◎ 上津貫～大浦 ＋　5月19日 T ＋
5月31日○ 校内2♂♀coll　6月 1日○ 大浦 ＋　6月 7日① T ＋
7月 9日① T ＋　10月12日○ T ＋　10月12日① 大浦 ＋
10月17日◎ T ＋　10月19日◎ 八幡尾滝 ＋

〔4〕 ツマキチョウ

3月24日① 益山 1♂coll　3月26日◎ 大浦～秋目 4♀♀20♂♂coll

〔5〕 ツマベニチョウ

4月20日① 秋目 1♂coll　7月13日① 秋目 1♂coll 卵十数個 1令12
8月 9日① 秋目 1♀coll 終令1匹 3令1匹 卵十数個

〔6〕 モンシロチョウ

2月 9日① 益山 ＋　2月20日◎ 益山 ＋　3月10日◎ 益山 ＋

〔7〕 スジグロシロチョウ

3月30日① T 1coll　5月24日● T 1coll　5月30日① 3coll
6月 7日① T ＋　6月13日 T 1coll　7月13日① 秋目 1coll
7月17日① T 1coll　10月19日◎ 八幡尾滝 9coll

※今年は例年より久志～秋目～大当方面のツマベニチョウが大変少なかったような感じでちょっと気がかりである。また，夏休みに出かけた佐多岬方面ではバイクで走り過ぎただけだったが，3頭採集した。他のシロチョウ類は記録不足の感じがあるが，今年はスジグロシロチョウが多く目についたようである。（ギンモンウスキチョウの記録は，後で迷蝶としてまとめてあるが今年は非常に多かったが，採集出来なかったのが残念である。）

＜シジミチョウ科 (Lycaenidae) ＞

〔1〕 ルリシジミ

2月16日◎ 秋目 ＋　3月 2日① 益山 2coll　3月10日◎ 益山 ＋

3月15日○ T ♯　3月23日① 小浦 ♯　4月 2日○ 益山 ♯
4月20日① 久志 ♯　5月24日 T ♯　6月 1日○ 益山 ♯
6月 7日① T ♯　7月17日① T ♯　10月19日◎ 八幡尾 ♯

〔2〕 サツマシジミ

3月 2日① 益山 1♀coll　3月10日◎ 益山 1coll
3月15日○ T 2 coll　4月 1日○ T 3coll　4月 3日◎ 益山 1coll
4月 8日◎ T 2 coll　6月 8日 T 1coll　7月 9日① T 2coll
10月19日◎ 八幡尾滝 1coll

〔3〕 ベニシジミ

3月19日◎ 校内 1wit　3月26日◎ 秋目 2coll　4月 1日○ T 1coll
5月28日 池田湖 ♯

〔4〕 ムラサキシジミ

4月 1日○ T 2coll♯　6月 7日① T ♯　7月 9日① T ♯
7月17日① T ♯　7月25日○ T ♯　7月29日 T ♯
8月 7日○ T ♯　8月12日 大浦 ♯　10月12日○ T ♯
10月17日◎ T 1coll

〔5〕 ムラサキツバメ

3月15日○ T 1coll　6月 1日○ 益山 1coll
10月19日◎ 八幡尾滝 1coll ♯

〔6〕 ヤマトシジミ

3月26日◎ 秋目 ♯

〔7〕 ゴイシシジミ

10月12日○ T 1coll

※この科は，セセリチョウ科同様に部員の研究不足のためになかなか手がまわらなくて，これからもっと注意深く見ていきたい。類似種は，区別の不正確な点も多少あると思われる。シジミチョウ類で今年，特に目だっていたものは，サツマシジミが多かった点である。

＜ウラギンシジミ科 (Cvretidae)＞

〔1〕 ウラギンシジミ

3月24日① 益山 1♀coll　3月26日◎ 秋目 ♯　4月20日① 秋目 ♯
6月 1日○ 益山 1♂coll　8月12日 大浦 1♂coll
8月23日○ T 1wit　8月24日① 大当 1♀coll
10月12日○ T 2♂♀wit　10月19日◎ 八幡尾 ♯

＜マダラチョウ科 (Danaidae)＞

〔1〕アサギマダラ

4月19日○ T 1♀wit 4月20日① 秋目 1coll 5月 3日○ T 1♂coll

7月 8日● T 1wit 7月10日◎ 校内 1♂coll 7月13日① T 1wit

10月12日○ T 2♂♂coll 10月13日◎ 校内 1♂wit

10月19日◎ 八幡尾 1♂3♀♀coll ＋

10月26日◎ くらた山 ＋ 数頭 coll

※今年は，竹田神社や校内でも多数のアサギマダラを発見することができた。一般的に今年は，どこでも多かったような気がする。また，10月にとれたやつの♀で産卵を試みて，現在飼育中である。（カバマダラについては，迷蝶として後で記載してある。）

＜タテハチョウ科 (Nymphalidae) ＞

〔1〕 ツマグロヒョウモン

4月 1日○ T 2coll 4月 7日① T 1♂coll 4月19日○ T ＋

4月22日◎ T ＋ 4月24日◎ 万世 1♀wit 5月30日◎ T 1♀coll

5月31日○ 校内 2♂♀coll 6月 1日○ 大浦 ＋ 6月 7日① T ＋

7月 1日◎ 校内 ＋ 7月25日① T 1♀coll 8月12日 大浦1♂wjt

8月17日① 亀ケ丘 ＋ 8月24日① 仁王崎 ♂♀＋ 9月 4日◎ 校内 ＋

10月12日○ 大浦 2♂♂wit 10月19日◎ 八幡尾滝 ＋

〔2〕 イチモンジチョウ

10月19日◎ 八幡尾 13coll ＋ 10月26日◎ 八幡尾滝 5coll＋

〔3〕 コミスジ

4月 1日○ T 1coll 4月 7日① T 1coll 4月22日◎ T ＋

4月27日◎ 上津貫～大浦 6月 7日① T ＋ 7月 9日① T ＋

9月 6日① T 4coll 10月12日 T ＋

〔4〕 キタテハ

4月 1日○ T 1coll 4月27日◎ 上津貫～大浦 ＋ 5月 9日○ T ＋

5月28日 千貫平 1coll 6月 1日 校内 2♂♀coll

6月 7日① T 3coll 6月26日◎ T ＋ 10月19日◎ 八幡尾＋

〔5〕 ルリタテハ

3月26日◎ 大浦 1♀coll 4月27日◎ 上津貫～大浦 卵，1令数匹

6月19日 久志 1coll 8月 7日○ T 1coll (大型)

10月12日○ 大浦 1♀coll 10月19日◎ 八幡尾滝 1coll ＋

〔6〕 ヒメアカタテハ

3月23日① 小浦 1coll 5月28日 千貫平 ＋ 8月24日① 仁王崎 ＋

9月 6日① T 1coll 9月13日◎ 益山 ＋

〔7〕 アカタテハ

2月 9日① 益山 十　　2月12日① 益山 1♀coll　　3月24① 益山 1coll

4月 1日○ T 十　　4月22日◎ T 十　　5月17① 校内 終令1匹

5月24日● T 終令3匹　6月27日① T 十　　9月13◎ 益山 2coll

9月14日① 校内 十

〔8〕 イシガケチョウ

10月19日◎ 八瀬尾滝 6coll 艹 wit　10月26日◎ 八瀬尾滝1coll

〔9〕 スミナガシ

5月 4日○ T 十　　5月 5日○ T 艹　　5月 8日① T 1♂coll艹

5月 9日○ T 1♀coll　5月11日◎ T 艹　　5月17日① T 幼虫2令

6月24日● T 1令3匹　2令11匹　3令4匹　　6月 1日○ 益山 幼虫数匹

7月12日① T 十　　7月29日 T十　　8月24日① 仁王崎 1wit

〔10〕 コムラサキ

5月31日○ 校内 1♂coll　7月25日○ 校内 2♂♀coll

7月29日 校内 1coll　　8月30日① 益山 1coll (黒型)

〔11〕 コマダラ

5月 3日○ T 艹　　5月 4日○ T 艹　　5月 5日○ T 艹

5月 8日① T 艹　　5月 9日○ T 艹　　5月11日◎ T 艹

6月 7日○ T 十　　7月 9日① 校内 1wit　7月 9日① T 艹

7月15日 T 1coll　7月17日① T 艹　7月26日① 校内 1♀coll卵2

7月29日 T 艹　　8月 7日○ T 艹　　8月30日 益山 艹

9月13日◎ 益山 十

※今年こそは，イシガケチョウを手に入れようと思って4，5月ごろから竹田神社のイヌビワで幼虫を捜したりしてみたがとうとう竹田神社では今年は発見できなかった。しかし，10月に八瀬尾滝でソマ畑に飛んで来たやつを多数採集出来た。

また，竹田神社で8月7日大型のルリタテハを採集したが，夏型はあんなに大きいのだろうか？。（迷蝶のアオタテハモドキ，メスアカムラサキは後に載せてある。）

＜ジャノメチョウ科 (Satyridae)，＞

〔1〕 ヒメウラナミジャノメ

7月 9日① T 艹　　7月25日○ T 艹　　8月 7日 ○ T艹

〔2〕 クロヒカゲ

4月17日① T 艹　　4月19日○ T 艹　　4月22日◎ T 艹

4月27日◎ 上津賀～大浦 十　6月13日 T 艹　　7月29日 T 艹

〔3〕 キマダラヒカゲ

4月２７日◎　上津貫～大浦　１♀coll　　5月　5日◎　T　1coll

5月２８日　千貫平　１２coll ♯

〔4〕　ヒメジャノメ

4月　1日○　T　1coll　5月１１日◎　T ♯　　7月　8日●　T ♯

7月　9日①　T ♯　　7月１７日①　T ♯　　7月２９日　T ♯

〔5〕　ジャノメチョウ

8月　3日①　千貫平 ♯　数頭coll

〔6〕　クロコノマチョウ

3月２６日◎　秋目 十　　3月２８日●　T　1wit　4月　1日　1coll 1wit

4月　2日○　大浦 十　　4月２０日○　久志 ♯　　4月２７日◎　上津貫～大浦十

6月　3日◎　T　終令1匹　8月１２日　大浦 1coll 9月　6日①　T　1coll

１０月１２日○　大浦　３coll　１０月１９日◎　八瀬尾滝　1coll ♯

※クロコノマチョウの夏型の発生が昨年と比べてだいぶ少なかったのに気づいた。また，加世田市では見られないジャノメチョウが千貫平にはとても多い。（ウスイロコノマチョウは，迷蝶のところに載せてある。）

迷　蝶　記　録

△アオタテハモドキ（Precis orithya Linnaeus）

１０月１９日（①のち◎）

川辺郡川辺町八瀬尾滝への途中，路上で低くゆったりと飛んだのち止まった1♂（小破）を採集した。（本坊敏保）

１１月　6日（①）

加世田市竹田神社で１２時３０分ごろ路上をゆったりと飛んでいる1♂（新鮮）を目撃した。（本坊敏保）

１１月２３日（○）

加世田市万世で路上に止まった1♂（小破）を午前１１時ごろ採集した。（浜川睦文）

△メスアカムラサキ（Hypolimnas misippus Linnaeus）

１１月　2日（◎）

川辺郡大浦町のソマ畑の横をふらふらと飛び出して，田んぼの上に止まった1♀（小破）を採集した。（田中洋海）

△ギンモンウスキチョウ（Catpsilia pomona Fabriccias）

7月１３日（①のち◎）

川辺郡坊津町秋目で午前11時ごろ，人家付近で新鮮な1♀を目撃した。（田中洋海，本坊敏保，浜川知博）

7月21日（ ○ ）

加世田市益山で“ニガゴリ”の花に吸密中の新鮮な1♀を目撃した。（田中洋海）

△Catopsilia（ギンモンウスキチョウの可能性が大）

7月 9日（ ① ）

加世田高校内のネムノキに飛来していた1匹を目撃（田中洋海，本坊敏保，浜川知博）

7月15日

加世田高校内で1匹目撃（田中洋海）

7月22日（ ①| ）

加世田高校の運動場を飛んでいる1匹を目撃（本坊敏保）

7月25日（ ○ ）

加世田市竹田神社で1匹目撃（田中洋海，浜川知博）

7月26日（ ○ ）

加世田市竹田神社で1匹目撃（田中洋海，浜川知博）

8月24日（ ① ）

川辺郡大浦町で1匹目撃（田中洋海，本坊敏保）

加世田市万世で白い大きな1個体がゆっくり飛んでいるのを目撃。12時ごろ（浜川知博）

8月30日

加世田市益山で1匹目撃（田中洋海）

△ウスイロコノマチョウ（Melanitis leda Linne）

6月25日

加世田市万世で夏型1匹を採集（浜川睦文）

7月13日（ ①のち◎ ）

川辺郡坊津町秋目でススキの中より飛びだした夏型1匹を採集した。（浜川知博）

9月 2日

加世田市万世で秋型1匹を採集（浜川睦文）

注） この他にあと5頭ほど採集（加世田市万世でいずれも夏型）されている。

△カバマダラ（Limnas chrysippus Linne）

7月12日（ ●のち◎ ）

加世田市竹田神社の前を流れる加世田川で，ゆったりと飛んでいる1♂（新鮮）を採集した。

(浜川知博)

7月13日 (①のち◎)

川辺郡坊津町秋目で風に乗って流れるように飛んでいる1♂ (小破) を採集した。(浜川知博)

1969年度活動記録

4月

1年生へクラブ紹介

15 部会〔新入部員紹介〕

20 久志～秋目方面へ蝶採集に行く
(平川, 田中, 本坊)

27 第1回採集会
上津貫～大浦方面
竹田神社へ昆虫採集 (19日)

5月

25 鹿児島市城山で蝶採集を行なう
(平川, 田中, 本坊)

28 遠足で蝶採集を行なう
千貫平～池田湖～最崎鼻
竹田神社へ昆虫採集
(8, 9, 11, 17, 24, 30日)

6月

竹田神社へ昆虫採集
(7, 26日)

7月

13 秋目へ蝶採集へ行き迷蝶を採る
(田中, 本坊, 浜川)

18 益山の通称"丘ん山"へ蝶採集へ行く
(田中, 本坊, 浜川)
竹田神社へ昆虫採集
(9, 12, 15, 17, 25, 29, 31日)

8月

3 大隅へ出かける (田中, 浜川, 本坊)

4 秋目のツマベニチョウ調査 (春成)

9 秋目に蝶採集に行く (浜川)

12 大浦～仁王崎に昆虫採集に行く
(山口, 阿久根, 田中, 春成, 浜川)

17 亀ケ丘に蝶採集に行く (本坊)

24 先輩達と蝶採集を行なう〔笠沙方面〕
(大原, 出来, 染川, 田中, 本坊)
竹田神社へ昆虫採集
(20, 23日)

9月

13 益山の丘ん山へコウモリ採りに行く
(田中, 浜川)

25 文化祭
竹田神社へ昆虫採集 (6日)

10月

19 第2回採集会 (八瀬尾ノ滝)

26 八瀬尾滝, 蔵多山に昆虫採集へ行く
(浜川, 春成)
竹田神社へ昆虫採集 (17, 25日)

11月

2 大浦方面へ蝶採集へ行く (田中)

30 鹿児島県昆虫同好会の総会に出席
(田中, 山口, 浜川)
竹田神社へ昆虫採集 (6日)

俗説薩隅植物誌（２）

津貫の巻（中篇）

佐方敏男

（104）シソンハ（シソ）ー紫蘇の葉の意。訛ってチソという人もある。支那中南部原産であるが，我国への伝来は古い。エ（今名エゴマー上方にてえごまと云ふ也と農業全書にあり）に似て非なる故古名イヌエまたはノラエと称せられたが，単に衣（エ）ともいわれたらしい。今はシソが通名となっている。葉の表裏が紅紫色のアカジソや葉の縮んだチリメンジソが一般的で，梅干に香色を添える必需品である。戦前は，どこの農家でも自家用の梅干が多かったが，近年は市販され，田辺市（和歌山県）からのもの８個入の箱で２０円ほどであった（昭和４４年）。支那でも古来エゴマ（荏）とシソは一類別種とみており，肥地者面背皆紫瘠地者面青背紫其面背皆白者即白蘇也〔本草綱目〕と出ている。またチリメンジソを花紫蘇，回回蘇とも称すとも書いている。我国では，コノ種ハ味モ気モヨロシク常ノシソニマサレリ其子朝鮮ヨリ来ル故ニ朝鮮紫蘇トモ云食品ニモ薬ニモ可用之と激賞している〔大和附１の８～９〕。○四五月葉をつみて梅漬其外塩醤につけ羹，ひやしる種々料理多し。生魚に加ふれば魚毒をころす〔農全４〕。

（105）シッカズラ（ツルウメモドキ）ー山足向陽の所に生えるものはテリハツルウメモドキといい小形の葉は固く光沢があるが，山中に生ずる大形のものは葉も大形で別種の感がある。４月下旬開花をはじめ，冬月落葉後は黄色の果皮は三裂して中に朱紅色の仮種皮をもった種子が露出して見事なので生花用にして趣がある。山中では小鳥類の好餌となる。シッカズラは，渋皮の目立つカズラの意か。訛ってスッカズラ（吹上和田など）ともいう。後出（２０６）参照。

（106）シトトノッ（クロガネモチ）ー山中に生じ大木を見かけることがある。樹皮は白味を帯び雌木は冬月全株紅果を飾り見事で庭木として喜ばれる。シトト（鳥名）が果時この木によく集まるからこう呼ぶのだと上野部落の人にきいた。シトッノッ（大浦，堀切山）とも呼ばれ大浦ではこの木は灰を多く残すのでブケンシャ（分限者，金持の意に使う）になるといい，堀切山ではカネノキ，カネオキギなど呼んでいる。またミツンノッ（加世田，万世など）貢ぎの木ともいって縁起をかつぐ。本年１月，川内市の市木としてこの木が選ばれたと新聞は報じていた。新葉は紫色を帯びて１風変っている。種子はそのままでは発芽しにくい。小鳥類の消化管を通ったものは比較的発芽しやすいのかも知れない。播種には適当な予措が必要なようだ。樹皮にはトリモチを含み，コメヤンモチ（川辺町）の名もきかれる。同属の自生樹にナナメノキ（ナラミノキ，ミツンノキー何れも加世田など）があり，葉が長形で鋸歯縁，紫花であるので区別する。

（107）シノメダケ（ヤダケ）ー山中に稀に自生。またシノノメダケ（津貫）ともいう。節間は長く節は低く各節から１本宛の枝を出す。

（108）シバ（シバ，ヒサカキ）ーシバは陽地に地下茎を縦横に走らせ短葉は常緑で地を被う。芝生または土堤固定の芝付になくてはならぬもの。コウライシバは葉が繊細柔軟で美しく園地に

植えられ，ナガミオニシダは海辺砂地（新川，吹上など）に生え5月下旬よりシバより太い穂を出す。ギョウギシバは別属の美しい帰化種のシバで吹上町ではオニシバと呼ぶ。5月中旬頃より出る穂は基部から4本位に分れたものが多い。寒気に弱いのが欠点。ヒサカキは低山の低木。単にシバ時にはシバナ（吹上，金峰町）というのはシバハナの転じた名前であろう。

（109）シビンゾマイ（キツネアザミ）一レンゲ畑に生え数十センチ高に達し葉の裏は白い。牛がたべると尿が出にくくなるという。確認はしていないがキツネアザミらしい。

（110）シマクロ（ハマセンダン）一山地に見かける落葉高木で羽状複葉の裏面は蒼白色で9月初から単性花を別株に開く。数年前これがシマクロだと1m余の幼木を持って来てくれた生徒さんがあったが，ハゼだときいてびっくり投げ出してしまったことがある。昨夏は蝶（ミヤマカラスアゲハ）の食葉にカラスザンショウよりハマセンダンの方がよいと教えられ，この種とおぼしき2～3種の枝葉を探し出し確認のため持ってきた人があったがその中にまたハゼノキがあった。危いなと思った。今度は不幸にもたたられて，翌日顔のあたりがほてってブツブツが出はじめ終に医者通いにまでなった。よく注意して識別すべきである。羽状複葉は対生し（ハゼノキでは互生）葉の裏も白味がかり，樹皮はハゼノキの様な白さはないからすぐ区別できる。磯間山中にもあるがカラスザンショウほど多くはない。材は共に下駄用に使われた。

（111）シマダケ（　　）一昔ドズンノ山にあったというが種名がはっきりしない。上津貫付近の山中のタケでは，ホティチクが多い。

（112）シマデコン（サクラジマダイコン）一晩生種は極めて大形なので有名。1個千円位の高価のものもある。8月下旬他品種に先立って播種し正月以後煮付など大切りにして食べるとおいしい。葉は多数盛り上がるように着生し濃緑色で硬い。根は長円形から円球形に近く独得の形である。世界的にも注目され，既に明治9年，ソ連の求めに応じて，この種子を我国勧業寮から同国農業博物館へ送ったという。薩州加護島肥前竹尾之産などは長大也〔和漢三才〕とか薩摩大根常の大根ヨリ大也甚カラシ煮レバ味甘クヨシ〔大和附1〕などのあるのはこの大根かも知れない。サクラジマダイコンは，成形図説や有用植物図説などに図が見られる。宮重その他の大根では漬物のほか，輪切にして蒸し干してムシダイコン（モイデコン）としてその特殊な香味を好まれ，葉は付根の直下で一株毎切り取りふかした上吊し干しにしてから貯え（ヒバという）て後から使用した。昔はこうしたものは常時農家に見られたが今は，新鮮な各種西洋蔬菜が出廻り，このために非常に少なくなった。大根ではこのほか特に辛味の強いものは，ソバキリの汁に入れて賞味された〔食鑑3；農全3〕。一般に大根は効用甚だ広いものとしてその栽培にも細心の注意が払われた。虫を除くには，苦参（クララ）または西国にて，よしみ柴とも小林ともいい上方にてはあせぼの木を用いると記されている〔農全3〕。〔デコンなねー，ヨカモンでねー，ネも食えばねー，葉も食てねー，デコンなねー．……」という繰り言葉が，まだ年歯もいかない孫達の耳に聞かされたことを思い起す人も，また干からびた根葉を懐しむ人もいることであろう。成程昔はデコンは佳い物（ヨカモン）であったことに間違いはない。

(113) ジャガタ (バレイショ) ―普通に栽培されるがサツマイモに比べると老人には一般にあまり好まれなかった。我国へ伝来の古い割に普及はおくれ，本格的には明治以後になってからである。

(114) ジュゴヤバナ (オミナエシ) ―中秋の名月 (十五夜) に供えるからこの名がある。―(9) 参照。

(115) ショイノイゲ (クスドイゲ) ―浅山人里付近に往々見られる常緑低木で雌雄異株。幹や枝に長針が多い。このトゲに刺されると傷容易に癒えずとも言われる。材が硬いので根元の太い所を用いドンジ (木槌) を作るが加工は生のうちでないとむつかしい。またクシ (木釘) にも用いることがある。瀬海の里ではミナ類を食べる時このトゲを以て身をとり出すのにつかうと云う (赤生木など)。斑入葉品をヘキコウボクー名痛鈍花 (クスドンゲ) として錦葉集1に図がある。ソイノッジゲ (大浦など) とも云う。ソノイゲ，似木瓜有刺〔大和，附，1の14〕とありまたツンベルグ日本植物誌335にソンノイゲと記している。クスノキのイゲ即ちトゲの意と思われる。

(116) ショテッ (ソテツ) ―観葉庭樹として学校，病院官公署などの玄関前などに植えられるが民家にも子孫繁昌を表わす樹として屋敷内に植込むこともある。ショテッ (所帯) の木になぞらえた結果であるらしい。この反面この木は鉄を食って栄える故家はその為貧を招くとの俗信もあって却って植えるを忌むこともある。川辺郡坊津町秋目地方には自生するが揖宿郡山川町の竹山の岩壁に自生する状は壮観である。和漢三才図会88巻に蘇鉄は原琉球より出て薩州多くこれありと云い，花壇地錦抄に品種として，唐，琉球のはかさつまのくめ木という名が見えそれぞれ品定めしている。数年前，鹿児島で金葉ソテツが発見されている。南薩での大株は金峰町尾下や大野に知られる。蘇鉄の名は和名というけれども現今では中国でもこの名が用いられている。

(117) ショノノッ (クスノキ) ―陽地に自生が見られるが巨木としては，川辺町飯倉神社，加世田市竹田神社境内のが有名で吹上町宮内楠屋敷の千本楠はその親木の根幹は回り12尋 (ヒロ) あったという。樟脳製造は終戦後上加世田の国道沿いの場所で行われていたが今は見られない。薩藩ではじめて樟脳を製し国産としたのは正徳4年 (1714) のことだという〔日本物産年表77〕。台湾原産の芳樟 (クスノキの一品種) も時に防風垣用に栽培されているが新川耕揚のミカン園などはその1例である。吹上町伊作にはサンショウクスが自生すると云う。脳油量共に他品にまさるすぐれた品種であるが稀少なものである。伊作方面でクスノキをショノクシッと云っているのは樟ノウクスの意と思われる。

(118) シラユリ (テッポウユリ) ―切花用として栽培され5月下旬から6月上旬に花が多い。花筒部が長く白色花で斑点はない。ツンベルグ植物誌にはシロユリの和名で出ている。益軒の花譜 (1698) に薩摩ゆりの名があるのはこのユリかも知れない。同書にはまた「近年やうやく多し。ほとんど百種に及ぶ。」とユリの観賞品種の増加したことを記している。因みにこのユリは奄美大島では3月3日にその花を軒端にさす所があると20年程前に同地の人から聞いたことがある。

(119) シロノキ (シュロ) 一屋敷内や畑の片隅などに栽植せられていて5月上旬より黄色の粒状細花が魚卵状に集まった花序を開く。雌雄異株。大浦辺では，葉鞘の繊維を区別して毛即ち繊維の目が密なものをモッガワシロと称しカタシ油を搾るための袋や雨具としてミノを作る。目のあらいものはシャッガワシロとしてシュロ縄をつくる。シュロ箒は必需品。水田に雀おどし用にこの繊維を小束にして吊した風景も以前は見られた。縄の径3～4cm以上もあるシュロの緒の下駄をはき町中を闊歩した学生の姿が明治大正から昭和の初夏までは見られたものである。
大正後半の一頃ガラス製の蠅取り器が流行しシュロの葉の手製の蠅タタキが並行して用いられてきたが今はこれも人造品に代ってしまった。

(120) ジンタン (コミカンソウ) 一畑地などに多い雑草。果実の形色稍仁丹粒に似ているからこの名がついた。

(121) ジンチョノキ (ジンチョウゲ) 一鉢植などにして観賞される常緑低木。支那原産で漢名瑞香和名を沈丁花という。易林本節用集にもこの名が見える。早春帯紫紅花を開き芳香がある。白花品や斑入葉のものなども見られる。ツルベルグ日本植物誌には，リンチョウゲと和名が出ている。尚林道春が山城秦寺にあって胡椒のような実を結ぶという植物にリムチキウゲの名を当てているのは別の種類らしい。〔多識篇3の24〕。

(122) ズイジ (スイバ) 一路傍などの稍湿地に多い雌雄異株の多年草。4月下旬から5月上旬に亘り開花が盛である。塩をつけてもんで食べたりすることカタバミと同様である。加世田名勝志帳に，アカスイジ，シロスイジの名が見える。

(123) ズイダマ (ジュズダマ) 一山足稍湿地などに自生することがある。熟果は固く，数多つなぎ合わせて数珠を作ったりする。

(124) スイメノキ (シロダモ) 一人里の木立中や山林中によく見られ早春新葉は黄褐毛を密生し下垂していて一見この樹とわかる。菊野さんの話では，スイメノキの実にはアカとクロがある。アカの方は用材にはならぬ。立木にもシロアリがつきやすい。クロ実の方は葉が少ししっかりしているという。後者はホソバタブのことかも知れない。大浦大木場では，スズメノッというのはホソバタブである。黒繩でシロダモの枝葉を見て，エコッノッだと答え赤い実ができるとつけ加えてくれた人があったが，同地の或人は，スイマメノッだと言っていた。発芽し易し。

(125) スクロッ (チャンチン) 一人里に植えられる高木で生長が早い。日本へは元禄年中渡来〔地錦抄，附，3〕という。多分朝鮮を経てはいったものであろう。江戸時代は新葉は珍味とされたものかヒャンチンの名の下に将軍家の食膳にのぼったという記録もある。香 (ヒャン) は朝鮮の発音よりきたものと思われる。上津貫ではまた，バカスクラッ，バカギ，ゲタギなどとも呼ばれる。雨戸の敷居などに用いられ，四国辺ではイカの餌木に用いると云う。子供を叱る時，バカスクラッガノとどなるのは，(役に立たぬ) 間抜けめがノという程の意である。増地5に説有。

(126) スゲ (スゲ類) 一牛の飼料にする。アオスゲは随所に多い。マスクサも普通。磯間山頂にはコカンスゲを産する。9月出穂のナルコスゲも普通。アキカサスゲは万之瀬下流の産。

(127) スズメカズラ (スイカズラ) 一随所に多いつる草。(69) 参照。花蜜を吸う。馬の飼

料。堀切山でも同名方言で呼ぶ。

（128）スッポ（ポ）ン（ハクサンボク）一早春白色集団花を咲き5～6月緑果，秋月赤熟する。この木の髄を取り出して灯火のシン（ジン）にした。太平洋戦争中灯火管制の時など皿に種子油をいれこのジンに灯をともした。また突き出した髄をまるめて心にして糸を巻きつけ手毬を作って遊んだ。之をフケマイと呼んでいた。（13）参照。

（129）スンナ（ツルボ）一路傍原野に多い多年生雑草。「使途（ツケミチ）のナカものスンナとコボシ」と云われるが，饑饉の年には，背に腹は代えられず，止むなく食べたという。上津貫から枕崎へ下り別府原（ビュフガハル）までこの鱗茎を採りに行き土鍋で煮詰めて食べた（菊野氏）ときかされたといい，また黒瀬地方ではサル年（明治29年）の大風の時食に困り之をゆがいて食べた（黒瀬勇氏）ともいう。然し古老は，塩に漬けても煮ても食べられる代物ではなかったとそのまずさを物語っている。引抜いた多数の花茎を花序の直下で束ね，花軸をひろげて編んで帽子を作っては被って遊んだという童幼の姿はほほえましい（北薩阿久根地方，笹原節男氏）。シロスンナは一名ダッキュバナ即ちタマスダレ，アカスンナはサフランモドキのことのようであって，葉と鱗茎の形が似ているからつけた名前だろう。いずれも外来品で後者は時に逸出したものもある。久木野ではツルボをシュンナという。（180）参照。

（130）セイ（セリ）一水田湿地などに普通の多年草。5月白小花を傘形に開き7月に至る。春の七草の一。冬春白い地下茎を食用にしたのは一種の香気に目をつけた古代人の知慧であったかも知れない。夏秋の候には茎葉には毒があるとして警告している古書がある。またカモ，シギの肉とこの白根（地下茎）を連ねて醤油と醋で芹焼とすれば香味甚だ美なり普ねくこれを賞すと〔和漢三才〕いい，小鳥がこの草をよくついばむから養鳥の家では必ず之を植えることも記している。柳芹（ヤナギゼリ）あり尤よし其葉柳に似たり〔菜譜下〕というのはどんな種類だろうか。本朝食鑑3に，堇菜も亦芹の属とし，堇菜スミレ今の計牟花（ゲムゲ）なりとし，葉柳葉に似て三四月に紫花を開いて荷花（ハスの花）の如くして微小，莢を成し根は葵に似て滑かで古人は之を食うが近人はまだ食べない。ただ児女の摘花にして遊ぶだけであって近年江都の人は洛（京都）より移植えていると記している。スミレにレンゲを接いだような記事である。

（131）センダンノッ（センダン）一校庭などによく植えられて大木がある。初夏開葉と共に淡紫花を咲き緑球果は秋冬黄熟し，ヒヨドリの好餌となる。種子は発芽し易く生長速く家具材となる。苦楝（センダン）最易生村落間凡生女必争植之以為嫁時器物〔広東新語〕と見え，また中国では古くは屈原を祭る時チマキをこの葉で包み長江に投じたと歳時記に記し，近くは5月5日この葉を採って之を佩び悪を避くるというがこの葉は蛟竜が之を畏れるという俗信に由来した行事だという。墓地にこの大木の栽植されてあるのは魔除けの意味かとも推察される。

（132）センネンボトクイ（ツュクサ）一この方言は，内山田や鉄山ではツユクサのことであるが，吹上方面ではハマスゲに当てているようである。長屋ではチンチロボトクイというのがツユクサのことと思われる。ホトクイというのはメヒシバ類のことで下部の節毎に根を下し厄介な雑草であるが，ツユクサも性状が稍似ていて畑地に多い故，先取草（サットイグサ）（吹上町など）

という名もある。開聞岳麓の部落では，七日太郎（ナンカタロウ）という位なかなか枯れにくい草。

（133）センモト（ワケギ）ー普通に栽培せられる。小型の葉を多数叢生するので千本という。繁殖は，ラッキョウ状で黄褐色の鱗茎を用いる。○蕎麦切に入れて是にしく事なし〔農全4〕。

（134）ソマ（ソバ）ーソマはハグロ（白露，9月7日頃）のウシトマエ（前後）に植えよと云い，水湿を忌み，「埃ソマ」の語もある程である。そばをまく時略次にて水汲におひても其実のりよからずと野俗云ひならはせりことの外水湿を忌むとしるべし〔農業全書，2〕と云う。ソバキリの汁としては味噌汁，酒，乾鰹細片の煮汁を垂れ汁としたものを用いるが，別にダイコン汁花鰹，ワサビ，橘皮，トウガラシ，ノリ，焼味噌，ウメボシなどの物を混ぜあわせて食べると本朝食鑑1に見えている。またソバカキとしてソマンネッタボをつくり味をつけて食べたりする。ソマガラは枕の中味に用いることがある。ソバの名は三っ陵（カド）の意で葉子共に三角だからと云う。信州産を上と為し，遠州三州薩州上野下野之に亜ぐと和漢三才図会に出ている。薩摩が屈指のソバ産地であったことが肯かれる。

（135）タイカズラ（カニクサ）ー山野や人里の垣根などに普通に見られるつる性のシダ。上津貫でも黒焼にしてデキモノの治療に用いると云う。久志今岳方面でも同様利用されるときいた。○本来のタイカズラは，カニクサに非ずして，コバノボタンズルであるかも知れない。真疑を確めてみる必要がある。

（136）タイワタイ（オオタニワタリ）ー野生は野間半島の笠沙方面にある。観葉植物として栽培される。○谷渡（たにわたし）かぶはぜんまいかそてつのごとく段々のびて葉ははせうの色にてつよく段々出ル〔増地，6〕とある。堀切山では，この方言名の植物は，タニワタリノキで牛がよくたべると云う。内山田でもこの木のことらしいが，タイワタロと云う。因みに，タイワタイノイトコということで，ヤナギイチゴを区別して，これは牛はたべないし，黄果も食べないのだと教えてくれた人がいた（堀切山）。

（137）タカヘゴ（ウラジロ）ー山中樹下によく群生する。横走する地下茎より又状に2羽片を出し，その又上に年年新芽を伸長する。竹田神社裏の林内では年間30cm余の伸長を見，全長2米余（6～7年生）のものもあった。（昭和22年1月実測）頂葉の手頃なものを正月祝餅のかざりや注連かざりに用いる。箸にしたり，かごを作ったりすることもある。高倉（加世田市）では，煙草苗の日よけにするのが普通である。尚タイワンヘゴ（ヘゴ）は磯間山に稀産する。

（138）ダゴジロバナ（コデマリ？）ー枝幹は中空。別にヤマダゴジロバナがある。よくわからないが果してコデマリであれば，山地のものはコゴメシモツケであろう。磯間山産。

（139）タッノッ（タブノキ）ー山林中普通の高木で時には大木になり常緑で特徴ある樹冠をつくっている。昭和初頃まで根元の皮や枝葉を線香の原料として1貫いくらで売っていたと云う。ベンタッとシロタッとを区別する。後者は材としては，コナムシがつき易い欠点がある。臼や牛馬の飼料槽（フネ）を作るに用いられた。タンノッとも呼ばれる。

（140）タジ（タデの類）ー数種野生がある。柿のしぶ抜き（アオス）時全草を用いることは南

薩各地で行なわれているが種類は一定していないようで，川辺では，白花多年草のものを用いるため特に家の付近に栽培しているそうである（柞木孝雄氏）。シロバナサクラタデかヤナギタデの類と思われる。方言名ニガクサは加世田ではヤナギタデのことで，堀切山ではシロバナサクラタデのことであって，牛も食べぬ草で手できわると，手までにがくなると同地の九十翁山村さんはいっていた。北九州豊前英彦山ではヒコタデという食用種などあるが，こちらでは見ない。

（141）タッノッ（ニワトコ）一村里や山中に時折り見かける落葉樹。この名は，上津貫から久志への途中の山里上野部落に，地頭鶏（1寸法師）という短脚のニワトリを確めに赴いた時，同地の竹山さんに教わったもので，タブノキと同名だがその木のことではないと念を押して語ってくれたことを思い出す（昭和32年）。因みに，クサニワトコ即ちソクズのことは，クサタッ（吹上など），クサタブ（吹上，加世田など）または全草の悪臭により，クソタッノキ（吹上町永吉）と呼ばれるほか，堀切山では，水田の肥料にするためタッガシキ（刈敷）と云い，ニワトコもこの名に混同していたようであった。

（142）ダッキショ（ラッカショウ）一時に栽培せられる。和名ナンキンマメと通称しているがこの名は眉児豆につけられてフジマメの図が大和本草諸品図上に出ている。落花生の方がよい。県下では，大粒大殻の在来種が古くから作られ，殻付のまま煎ったものが売られていた。大正末期頃までは，1銭に7～8個の価で子供達が好んで買っていた。支那では，宋元の間，棉花番瓜紅薯之類と共に，広東商人が海上諸国よりその種子を得，帰って之を栽培したと云う。我国へは支那より渡ったのは元禄の末〔新撰日本物産年表〕といい，長崎に多く之を種う〔大和4の9〕と見えるが，各地に栽培される基になったのは，明治7年，内務省が米国加里福尼産の種を温暖地に頒ったのにはじまると云えよう。厚皮の莢を腹背より拇指と人さし指で押しつぶすと真二つに殻がわかれて種子が出る。帯紅紫色の種皮をツルッとむく。中の心をとって食べぬと頭痛がすると聞いて，子葉間の幼芽をわざわざ摘みとってから安心して食べた思い出が残る。

（143）ダッキュ（ラッキョウ）一普通に栽培せられ，多くは酢漬にして副食物とする。またよく農家では客人に茶をすすめる時之をそえる。日本への渡来は古く，オオニラ，サトニラ，ナメニラ等の名が用いられたが，本朝食鑑3には，ラッキョウはこれ等のものとは異なり臭味がなく別種であると断じ支那名水晶葱が之に当ると見える。鱗茎の性状より，光頭の教師に，ダッキュの方言名の仇名がついていたことがあったが，それほど庶民的なしかもおかしみを感ぜしむるダッキュである。また学問する人つねに是を食すれば，神に通じ魂魄を安ずる物〔農全4〕と云う。

（144）ダッキュバナ（クマスダレ）一軒の樋下などに沿うて植え込まれたりしてある外来の花卉。南薩沿線ではこの名が通名となっているが，別にアサネゴロの名もある。早朝低温の時には開花するに至らず，外温が高まってから開き始める故朝寝坊の名がついた。ダッキュまたはダッキョバナの名は勿論その球根（鱗茎）の形状に基づいたものである。

（145）タッバケ（ナタマメ）一普通に栽培される種である。莢は扁平で鉈ナタ状に変するのでこの名がある。約之の救荒本草紀聞12に，タチハキ西国方言タチハ刀ハキハ豆ノコト也とある。旅に出ている家族の安泰を祈り，毎食の卓上にこの莢のままを皿上に載せかげ膳として供えたり

(鹿児島市) したが，大隅では，旅に出る人，軍にゆく人などがこの豆を持参して行くことになっていると云う〔大隅肝属郡方言集〕。痩身の人をよく，タッバケのように痩せていると評することがあるのは丸味のない稜の筋ばったこの莢を連想してのことである。若いサヤは漬物にして食べる。福人漬にはよく用いられている。

(146) タップノキ (イヌビワ) 一随所に自生の多い落葉高木で枝葉は乳汁を含む。熟果は紫黒色を帯び子供達は生食する。葉は山羊，ウサギ，牛馬の好物である。細葉のホソバイヌビワも普通に見られる品種でこれの葉柄の帯紅色のアカジクホソバイヌビワもある。小枝は，しばしば氏神などへの供物の箸に用いられることがあり (吹上町田尻，戸越氏) また金峰町浦之名では，コウゾ (カンノキ) の剝皮した小枝で神へ供物用箸を作ったが今は，コタツの小枝を用いると云、(牟田神西氏) 。コタッというのは，南鉄沿線に広く用いられるイヌビワの方言名である。またタボ (上津貫) ともチチコッブ (津貫) とも云う。8月中旬夥しい熟果の落下をみた (万世) 。

(147) タテバナ (タチバナ) 一木はキンカン状で酸味強き小形の柑果を生ずる。新芽にトゲがある。ミカンの台木にすれば，虫がつかず寿命が長いと云う。野間神社 (笠沙町) 前に1株植えられている柑樹はこれか。文化歌草は田道間守の故事に因みタチバナの花を型どったものという。

(148) タマナ (カンラン) 一今は普通に栽植せられるが，大正末頃までは，栽培も多くなかった。暖地向きの品種改良により作り易くなった結果でもあろう。キャベツが通名となっている。○蛮種紅夷菘 葉大ニシテ無光白ケタリ花は淡黄色〔大和，5の37丁〕はキャベツの一品であろう。甘藍という支那名は，本草拾遺に始めて見えて，是西土藍，闊葉可食云々。また農政全書に，北人謂擘藍とあり，本草綱目には，其葉長大而厚，煮食甘味，終冬不死云々と記され，また群芳譜には葉可作羹，或作乾葉，又可作染皂云々とあり，甘藍がたしかに今のキャベツであるとは疑わしい。又植物名実図考 (重修，蔬類，4の41丁) の図は，抽苔開花中のもので，コールラビ即ちカブカンランの状であって説明に，根大有十数斤者，生食醤食，不宜烹飪也云々とある故今日の結球キャベツ即ちタマナではない。しかし現今では，支那の書では，キャベツを甘藍としてある。ハボタンは半結球のカンランで紫や白の品種は，冬月の生花など観賞用とされる。蔊菜 (キャベツ) 安政4 (1857) 海外より伝わると云。生物学語彙 (明治17) に洋種蕓薹

(149) タラ (タラノキ) 一またタレとも云う。直幹に大小のトゲを密布し，羽葉 (二回羽状複葉) は梢頭に集まって傘開する。。新芽を取りアッペ (熱灰) であぶり醤油をつけて食べると美味。酒肴によい。タラノキの幹を割ったものとモロムキ (イヌガヤ) の枝葉は共に正月行事に用いた (モロムキの項参照) 。

(150) タンポポ (シロバナタンポポ) 一タンポポの名は，加世田名勝志帳には見えないが今は通名となっている。この地方では時にシロバナタンポポを見かけることはあるが，黄花のタンポポの野生はない。あれば，セイヨウタンポポの逸出したものである。ノゲシやジンバリなどをタンポポと思い込んでいる子供は案外多い。○つづみ花，花黄色にてせんやう，野原にあり。白つづみ花，花白せんやう，たんぽぽ共云〔花壇地，4～5〕とあるのをみると，この名は元来白花種の名前だったようである。

（151）チカラグサ（オヒシバ）―畑や路傍の陽地に丈夫なヒゲ根を張り地を固めて生えるため容易に抜き去り難い。チカラボトクイ（吹上町，加世田市）ともいう。その他コジユコロシ（87参照），スモトイグサ（内山田），コマッナッ（金峰町白川，加世田地頭所ーネズミノオも同名で呼ばれるらしい）などの方言と共にカゼグサともいい穂の分枝の数だけ年内に台風があると伝えている地方（阿多白川）もある。○知風草チカラグサ，茎の節により大風を占ないとする〔大和9〕とか，相撲取草西土ノ方言也両穂相合相引而為勝負〔大和諸上31オ〕など記し穂や茎の図があるのを見れば，オヒシバである。

（152）チゴザクラ（ニワザクラ）―観賞用として庭先などによく植えられる低木で，淡紅または白の八重花を3月下旬に開く。シジミバナをチゴザクラということもある。類品に，ニワウメ（方言ヤウンメ吹上，金峰町など），ユスラウメ（ニガモモ吹上町野首など）がある。

（153）チョウセンギク（センジュギク）―観賞用1年草。黄花のものをこの名で呼んでいてツンベルグ植物誌320頁には，チョウセンソウの和名が綴られている。一名トイノクソバナという。花戸では，三葉丁字，花黄色なり〔花壇綱目中〕などサンパチョウジの名があって，この名は現在でもサンパッシ（吹上，金峰町など）やサンパツ（同上および大隅垂水市）として伝わっている。同属万寿菊（支那名）〔花鏡〕は紅黄草乎という〔光生物品目録2亦29丁ウ〕。

（154）チョウセンアサガオ（ルコウソウ）―可憐な紅色盆形の花を開く蔓草で観賞用に栽培され橢状の細裂葉も変っていて優美な感じである。和名は綷紅草。○いろいろの作り物してからましむるニ其ごとくニまとふ物なり〔花地6〕。また，るかうの名で図を載せ，仙人草と共に四っ目垣にからましているもの〔増地7〕もある。我国へは貞享の頃（1684～7）の渡来という〔地錦附〕が，ずっと遅れて丸葉ルコウソウ（嘉永年間1848～53），羽衣ルコウソウ（大正初年1912～ ）なども舶来しているが後二者は稀に見る程度である。最後の中間種は花が大きく美しい。チョウセンアサガオは南薩一帯の通名なので，有毒植物として有名な和名チョセンアサガオ（ナス科）一名キチガイナスビと混同されることがある。因みにルコウの綟は凡て繊細なるものを多く云うと辞源には出ている。

（155）チョウセンザクラ（テマリバナ）―観賞用に栽培されることがある落葉低木。アジサイに似た白花を球団状につける。然しアジサイ（ナガシバとかウノハナという）は離弁花でおしべは10本許，花冠に見えるのは萼である。テマリバナは合弁花5本のおしべのあるスイカズラ科植物である。両者共目立った中性花即ちガク花のあることまで共通しているとは，他人の空似にしては手が込んでいる。リンネはこの両属の区別を明快に記述しているに拘らず，ツンベルグがアジサイ属植物をテマリバナ属として新名をつけたりしたのもこの空似に見事だまされてしまったのである。

（156）チョウチンバナ（ヒガンバナ）―原野の陽地に群生し紅色美花を9月に開く。有毒植物であるが太平洋戦争中鱗茎を集めて供出したことがあったという。ムラサキホタルブクロが同方言で呼ばれたり（阿多，加世田など），チョウチンゲサ（津貫）といわれたりする。この花は普通紅紫色であるが白質花のものも稀に栽培され，5月下旬より斜下向の花が見られる。(180)参照。

（157）チョッバナ（ヒャクニチソウ）一供花として千日紅と共に最も一般的に家毎に作られてきた周辺舌状花が一重に並んだ古い型の百日草。サカヅキ（猪口）状の花形に基づいた方言名。また秋期花の咲くリンドウも同名で呼ぶ地方も多い（内山田，阿多白川，黒瀬など）。そして花中の実（メシベ）をとって子供達は食べたりした（白川，加世田など）。○りんどう　朝ニ咲たる花夕にねむりて又さかり久敷物〔花地，4～5〕など書かれている。百日草の渡来は，文久2年（1862）以前の事と云う。鹿児島への伝来は明治になってからであろう。日置郡で，サイゴドン（西郷殿）バナの名で知られているのは，伝来の頃を示唆しているようでもある。花の丈夫な割に花頸が脆大して折れ易い事は，チトニアに似ている。この草花は分岐多い低木様一年草で極稀に観賞栽培されることがあるが，チトニアの名に満足せず，チンドンヤとふざけた名に変りそうである。

（158）チクサ（キランソウ）一原野路傍などに多く茎は四方に拡がる。春月紫花を開くが稀に白質花のものもある。シロバナキランソウと云う。吸い出し薬に用いる。この全草，ドクダミ（全草）とセキショウの根茎をすりつぶしたものをソバ粉に混ぜてねりあわせ打撲症や腫物に用いた。チクサはチイクサ即ち散り草の意。台湾にて散血草と云う由。またこの草が糖尿病にも効ありときく（万世など）。

（159）チチクサ（ノゲシ，ヤクシソウ）一前者は路傍などに，後者は山野に見られる。キク科植物には白色乳液を出すものが数多あり，これらで特別な方言名のないものはすべてチチクサと呼ばれる。またシマニシキソウ，イリオモテニシキソウなども畑地の雑草でチチクサの一つである。チチコップ（津貫）はイヌビワのことである。

（160）ヂヤンモッ（ツチトリモチ）一クロキの根に寄生していた（菊野氏）と云う。11月頃出る花穂は帯赤色で雌花ばかりの集まりである。アカヤンモッ（南薩線一帯）とも呼ばれる。根茎をついてトリモチにする。○ツチヤマモチ……日向キリシマ山産，根ヲ水ニ浸搗ケバトリモチトナル〔物品識名拾遺，乾〕。また花穂帯黄色のキイレットリモチは雌雄同株である。磯間山上にもありトベラの根に寄出している。

（161）チンダイグサ（ヒメムカシヨモギ，オオアレチノギク）一原野路傍に多く荒れた畑地はこれらの帰化植物が一面に群生し易い。越年草であるが冠毛のある種子は風に従って飛散し発芽し易く繁殖力は極めて旺盛で驚くべきものがある。またサイゴグサ（吹上町や小湊など）とも呼ばれるのは西南の役の頃の伝来を意味するようで，チンダイグサも熊本鎮台が攻めて来た頃にふえた草の意味であろう。牛の飼料にはつかわない。同属の帰化種にアレチノギクがあるが全草丈低く，冠毛は帯紫褐色になるので区別できる。ヒメジョオンも同属帰化種で至る処に多く舌状花は帯淡紫色で長さ7～8㎜位あって他種に比べて見栄えがする。

（162）チンダイバナ（セイタカアワダチソウ）一アキノキリンソウ属の外来種で随所に群生するのを見たことがある。黄色小頭状花を大きな　状穂につける。アワバナ（吹上町，高倉など）といったり，茎の節部が目立っているので，スッポンポン（日吉，吹上町など）と呼んだりする。チンダイグサに草状が稍似ているが黄花が美しいのでチンダイバナというらしい。

（164）ツガ（トウガ）ートウガンとも云うがこれは，もと江戸方言の由。栽培は稀であるが古い蔬菜の一つである。農業全書巻3の図は，丸形のもので，冬瓜又一種ながきあり諸国に多し。京には長きはなしと付記し，また「塩味噌の類に漬。又ハ干熟のごとくしても夕がおにをとらず。殊に性のよき物なり」と云っている〔同書，３０～３１丁〕。本朝食鑑３には，近代霜後采之煮熟而殊然不為上餞云々と記されている如く，さほど味のよいものではないが，支那では古来その種子が薬用として用いられている。白冬瓜とも呼ばれているのは，霜後果皮に白粉を布くからである。方言ツガは冬瓜（ツグワ）で，人名東郷をツゴと呼ぶのと同類である。

（165）ツキデノッ（ハナイカダ）ー山地に自生する落葉低木で雌雄別株。葉上中脈の中程に小単性花を咲くから花筏の名がある。枝は緑色で髄が目立つ故，この方言がある。髄を突き出せるからである。新葉は摘んで食べられる。葉が一見よく似た木にキブシがある。これも山中に普通に見られるが，早春葉に先立って帯赤黄色（♂）や緑色（♀）の花房を下垂している様は注意を引かれる。ジンガラノッ（大木場など），ナベトイノッ（堀切山），フタタキ（鉄山）などの方言名があるが後二者の意味は未詳。ニシキ（二色）キブシは，磯間山で採られた褐紫色の花弁の先端にわずかに黄色を残している品種である。

（166）ツスロコ（カンコノキ）ー陽地に自生する落葉低木で細枝の先は刺状に尖る。樹皮のきれいなものは，床柱や床ぶちによい。堀切山では，フツロコノッときいた。カガイ（ワラ製小型の袋状モッコ）編みの時，縄を巻きつけるフツロコなどをつくるが，イブタ（ネズミモチ）など重い木で代用することもあるという。開聞町（揖宿郡）では，ツズロコという。ハナシトマイギ（黒檀）ともいい，この枝はあたたかいから小鳥のとまり木に用いられることがある。またスズメトマイギとも聞いた（黒檀）。

（163）チンチョロゲ（ツユクサ）ーチンチロリンが通名で各地でいろいろ変化している。随所に多い雑草で，チンチロリン（マツムシ）など昆虫によくたべられる。牛の飼料にしたり鶏の餌にしたりする。戦時中は，この乾草をつくり供出したが，雨天には，新葉が再び伸長して乾かすのに苦労したという（阿久根方面，笹原節男氏）。花の色に変化が多く，シロバナツユクサ，ウスイロツユクサ，フタイロツユクサなどはこの地域でも時折見かける。スジウスイロツユクサ（新称）はウスイロツユクサの葉に白条があって時には苞にも白斑があるものである。加世田市唐仁原の産で珍らしい。マルバツユクサはツユクサより小形の花を開き，葉は有毛，卵形波状縁地下各節毎に生じた閉花に結実する。畑地の雑草でツユクサより少ない。ツユクサの支那名は，鴨跖草が通名となっているのに対し，マルバツユクサは火炭頭〔種子植物名称〕，飯包草〔広州植物検索表〕，竹葉菜など統一されていないのは何故だろうか。湖北省では，ヨウサイ（蕹菜）がよく畑地に作られ，土人はツーエーツァイと呼んでいたが，同地の県志には，竹葉菜の名で載せられていた。この野菜が終戦後，加世田高校内の中庭（多分今の温室の附近に当る）に忽然その姿を現わして淡紫の花を開いているのを発見してびっくりしたことがある。台湾方面からの引揚者の将来した種子がもとであったかとも思われるが，省みれば意外なことであった。昭和２４年夏だった。

(167) ツヅラ (ツヅラフジ) ―山地にある落葉藤本でつるは長くて他物にまといつく。乾くと黒褐色で縦条多く平滑で極めて丈夫である。ツヅラフゴを編み，またバラ (大型の笊) や箕の縁を巻きゆわえる為よくつかわれる。同科のアオツヅラフジは，山野に普通で有毛，果実は球形黒熟表面蒼白粉色を帯びる。つるは弱い。ハスノハカヅラは常緑，葉柄は楯状に着くのですぐわかる。果実は赤熟する。前者はキッネンガラメ (北薩宮之城など)，ハトキビカズラ (同地) など呼ばれているが，日置郡ではノブドウのことをキッネンガラメ，キッネンカズラなどいう。

(168) ツズンボトクイ (コブナグサ) ―原野の稍湿地に多い1年小草。葉縁は波状になっていて，穂はメヒシバ様の出かたをしているからの方言名である。溝辺にあるチゴザサや林下のチジミザサなど何れも葉のへりに波状のしわがめだつ同科の小草だから同じ方言でよばれているかも知れない。

(169) ツワ (ツワブキ) ―山足斜面などに自生し晩秋黄花で山野を飾るが時期外ずれに開花したものを見ることもある。ツワは古い名である。都波 (出雲国風土記) つわ〔花壇上，花地4，5〕都和〔花譜下〕豆和〔和漢三才94之末〕などと記され，また，ツハ，一名山フキと云世俗庭中にうえて玩ぶ〔大和9〕と云い，一葉と花の図が書かれている〔同書諸品図上，2，ウ〕。良安は，蕗と比較して茎，葉，花の違いを最も明確に区別している。而して茎葉はゆでて苦汁を去り蔬となしその葉は魚毒を解す。河豚魚 (フグのことでこの名は南薩方言にあり) の毒にあたった者は生食すれば，しばしば効あり。また馬を飼うには，アザミやクズの葉に劣らず。九州の人は今も亦常に蔬菜として之を食うと述べているのは興味深い。事実今も春の山菜として煮しめなどにすれば一種の風味があり，薬用としては葉を広げたままあぶって腫物の吸出しにし (チャンバコウという)，ムカデにさされた時，葉の汁をつけると痛み止めになると云う (大浦など)。ゴッパンハの名は，田布施 (金峰町) などに限られた方言のようである。和名ツワブキのフキは後世ことさらに附加したもので蛇足であろう。ヤマブキとかイワブキならまだしも通名となっていたツワをツワブキとする必要はなかろう。しかし「葉形ふきニ似テ厚シ。因リテあつはぶきヲ略シテ此名アリ」〔救荒植物集説抄〕の通り，千年以上も前からあった都波 (ツハ) の以前にアツハブキの名が実在していたのなら，上の愚説こそ蛇足ということになろう。花の色変り品に，ウスジロツワブキ，カタメンウスジロツワブキ〔加世田近傍の植物方言〕などがある。

(170) ツンミノッ (ヤブニッケイ?) ―赤実と黒実のものがあると云う。ツンセンノッ (小湊堀切山など)，ツンノッ (吹上町和田など) はいずれもヤブニッケイのことである。東南方村郷土誌 (1909) には，ツンノキをイヌグスの方言名としてある。

(171) デシイモ (クワズイモ) ―時に観賞のため栽培されることがあるが，秋目方面には野生がある。大師芋の意で，成形図説に弘法大師にまつわるこの芋の伝説が書かれている。煮ても焼いても食べられぬものにデシをつけて，デシゴンニャクなどの名もある。大株には9月紅果を結ぶ。

(172) デッマメ (ダイズ) ―夏作物として植えられ，豆は用途が広い。藩政時代は，水田の緑肥としても作られ，雑葉大豆即ちゾハマメと呼ばれた。○大豆末米今久呂宋米〔多識篇3の2〕

黄大豆今穿末米〔同上3の3才〕。古来重要な作物でこの地域では，「マメは八十八夜に植えよ」と云われる通り夏大豆が作られる。和漢三才図会には，立夏センダンの芽の出る頃播き，立秋に収めるのを夏大豆と云い，「夏至の烏脚」と云う諺の通り，大抵は夏至の十日以前に下種するのを秋大豆と云うと出ている。豆の色に黒，黄白，緑その他斑のあるものなどは古くから区別されているが，花の色については，小白花を開く〔本草綱目　　〕とあるからこれは白花大豆である。事実筆者も白花を湖北省で観察して珍らしく思ったが，最近の中国主要植物図説には「花白色或紫色」〔同書豆科６５１頁〕とあり，我国の図鑑では「紅紫色或ハ白色」などと書かれてある。然し学問上の種名は，紫花のものにつけられたようであるから，白花大豆は，パルリダという品種になる〔ドカンドル植物自然分類予報Ⅱ３９６〕。野生種にツルマメがあって長いツルで他物に巻きつく。ダイズと比べると莢も小さく，小葉は小型であって細長い。加世田付近に時たま見つかり９月に紫紅小花を咲き，有毛の莢ができる。類似品に，ヤブマメが随所に見られるが，小葉は広く，花は稍大きく，莢は縁辺だけ有毛であるし，地中に閉花が結実するなどでよく区別ができる。ダイズは加工食品として広い用途がありミソ，ショイ，オヤシ，オカベ，キラス（何れも方言名）キナコなどが思い浮べられる。豆餅（支那名）は戦前，多量に肥料用に輸入されたあの円盤状の豆粕だが，それが終戦当時は直接人の食料に豹変した苦い経験も想い出される。

（173）デノッ（ショウベンノキ？）ーカキ（柿）を接ぐ時の台木にするという。薩政時代重税に苦しんだ農民が，柿の木に課税しょうとした役人に，カキ（柿の実）はなってもデノキと云い張って上納に反対したという伝説がある。ショウベンノキは，三出葉の大木になり，１０月緑や黄色の果粒をつけているのを山足樹林中に見かけることがある（吹上町など）が，上津貫にもあるのだろう。樹皮は腎臓の薬になると云う（故菊野豊二氏）。またデノッというのは，堀切山や知覧町などではゴンズイという全く別類の羽状葉の木のことで，キクラゲがよくつくという。デノキは台木の意で，ダイギナ（宮崎県東臼杵郡北川村など一倉田悟氏による）とも云われ，この木を台木とすれば何でも接木が出来ると言い伝えているという。またメドリノキ（大浦町大木場の方言名）は，芽立ちを食べるので，芽採りの木の意味だろうか。食否は確めなかった。北薩では，ゴンズイとクサギの葉などと混ぜて食用にする山村がある。ゴンズイは山林陽地によく見られ，９，１０月紅果は裂けて黒実が見え人目を引く特徴のある木だが，菊野さんのいうデノキの正体はどうもこれには該当しなかったようである。

（174）テハレ（ムサシアブミ）ー林下に多く春先暗紫色アブミ状の苞を具えた肉穂花を，雌雄別株に開く。大和本草諸品図上には，テンナンショウと並んでこの種の茎葉，花，果の粗図が画かれてあって，其実如黄蜀黍紅色など記している。この草は毒草ではあるが，好事家は観賞用に用いたらしく，その実は天南星や万年青（オモト）に似て紅色，冬には葉は落ちて唯種子が見えるだけだから，側に石章（ヒトツバ）を植えてその葉に見せかけていると書かれている〔和漢三才９５巻〕のはおもしろい。南薩では手をふれるとはれると云い伝え子供らは，恐れてうす気味悪い草としている。テハレオンジョ（高倉）テハレゴンジョ（加世田）テハレゴンゼ（久木野）テハレゴンゴン（津貫）テハレゴンチ（舞敷野）テハレボンボン（万世）テハレゴンニャク（川

辺）などさまざまに呼ばれている。この赤い実をヘッノミ，ヘビノゴハン（日置郡）時にはヘビノガラン（加世田）ヘビのマクラ（阿多）などとも云う。この類で林下に見られる種類にマムシグサ，サイコクウラシマソウなどがあり，後者にはクチヒゲウラシマソウ，アオムチウラシマソウなどの変り物も採集された（それぞれ長屋山麓及び吹上町今田）。この外畑地付近には，ヘッノクシャッ時にはヘッノシャクシと呼ばれるオオハンゲ，ヘビンスというカラスビシャクなどが見られることがある。天南星日向薩摩之産最良の文字が和漢三才図会に見える。これは多分マムシグサのことであろう。薬効は，磧学梅村甚太郎氏民間薬用植物誌に詳かであるがこの草を雌雄同株のように書かれてあるのは手違いであろう。

（175）デモタケ（タイミンチク）ーまたデメダケともいう。この笹で手箒をつくる。これのない時は川べりなどに多いホタルダケ（メダケ？）で作った。馬屋のソラ（天井裏）の物置の床としてはデメタケを丸のまま縄で編んだものを使えば虫がつきにくく保ちがよいとも云う（金峰町など）。

（176）トイモガラ（ハスイモ）ー葉柄を食用にするため栽培する。刺身のつまやなますにしたりして食べる。蜂にさされた時，茎汁をつけるとよい（吹上町など）という。葉白味を帯び柄太く葉身はシャンと斜に立っていさぎよく見えるが，柄には隙間多く，イモガラボット（木刀）である。

（177）ドカンスイッゴ（ホウロクイチゴ）ー林下に多く群生する大葉大形のつる性イチゴでトゲが多い。またバライッゴともいう。葉は単葉円形に近く大形，果実は赤熟して食べられる。摘むと果柄より容易に離れ大きな穴があいてそれが土鍾子（ドカンス）即ち茶釜の形に似ているのでこの名がある。ウシノベッタイッゴ（日吉，吹上，金峰町など）は葉形から牛糞を想い出してつけた名でその他ウシイッゴ（日吉，吹上町），ズダイッゴ（吹上，川辺町），ダンザイッゴ（吹上町，舞敷野など），ドクワンス（小湊，笠沙黒瀬など），ヒゲイッゴ（指宿市），ブタイッゴ（日吉，吹上町，津貫，川辺町など）などいわれる。バライチゴの小形のもので，葉が小さく茎は地をはいトゲは痛くなく，果実は赤く食べられる種類がある。この草を牛に与えるとノドアッができぬという。治療には，塩でこするとよいという。加世田名勝志帳に，シホズルという草があり，内山田（西尾など）にシオツイイッゴという方言名が残っているのは，フユイチゴのことかと思われる。

（178）トキッノヨメジョ（トウモロコシ）ー屋敷内や家近き畑の端などに栽培することがある。我国へは天正1年（1573）の舶来という〔新撰日本物産年表55頁〕。多末岐比（タマキビ〔多識篇3〕，南蛮黍，唐毛呂古志〔食鑑1〕。○玉蜀黍，畿内にてなんばんきびといひ，関東にてはたうもろこしと云ふ，日向高知穂にては是を作りて朝夕の糧とする云々〔広益国産考1〕。雌花の穂は長い糸状のヒゲの花柱を苞の先から出して所謂嫁女の頭髪を思わせるが，この形色を食鑑1には，苞上出白鬚垂垂，後変紫赤云々と記している。良安は，本草綱目の記述は甚だ詳であるがと前おきし乍らも，「苞上鬚を出す赤黒色にして長さ4，5寸刻煙草に似たり然るを白鬚と謂者異なるのみ」とヒゲの色を問題にしている。成形図説19には，此もの三種あり…紫赤な

るは粘り，黄白なるはねばらずハゼとなすには紫赤を佳とす……其初出を嬰児婦女と目て戯ぶ其形上己の縷人に肖たれば也など述べている。上己の縷人とは，三月節句の姫人形のことである。トキッ（トウキビ）の方言は本来このトウモロコシのことであったが，何時の間にか，薩摩では蜀黍の方言にも変ってしまった。モロコシの一種サトウモロコシは，カンキッ（万世）など呼ばれ子供らが，２０～３０cmに切ったこの稈の外皮を歯でむき，中の淡緑色の組織をかみしめてはその甘汁を吸ったのは明治以来のことである。トウモロコシの稈も同じように汁を吸うてみるのだがこれは甘いというよりは塩っからい味で，カンキッの魅力に及ぶものではなかった。本物のサトウキビは，誰がつけたかスモイトサトキッと呼ばれ，田舎角力の秋場所などの出店に長い儘で売られていて稈は太く節間は短かく，それが大抵先端へ弓なりに曲っていた。枕崎方面からのものと聞いた。さて，トキッの名がトウモロコシ，モロコシに混用されるのをさけて，ヨメジョをつけて区別した名が，ヨメジョキッ（通名），ヨメジョトキッ（知覧など）または単にヨミジョ（鉄山など）であり，ソデキッ（白川など）はサトウモロコシのことのようで，畑の片袖などに植えられるからついた名であろうか。黍は，加世田名勝志帳には，春キビ，秋キビ，小キビなどの名が見るが，現在ではその栽培は殆んど後を断って，コキッ，ダゴキッなどの名のみ残っている。

（179）トコロテン（ニガカシュウ）一川堤防中のヤブなどに絡みついている円形の大きい葉のつる植物で一名マルバドコロとも云う。茎は右巻きで紫赤があり新葉は帯緑褐色先端が尖り形色がめだっている。紫色の細花の房は下垂して見事，ムカゴは表面凹凸があって苦く，塊根は丸形で硬くヒゲに被われているがトゲのようである。食べられない。また単にトコロとも呼ばれ，オニドコロにも適用され，カエデドコロなどにも当てられる（吹上町藤元，堀切山など）。オニドコロは，７月頃黄緑の細花を開き雄の花房は上向している。ツンベルグは，彼の新発表のカエデドコロの条下に，果実をハナタカまたはカラスノセニと云い，鼻柱につけて遊ぶ意を記し，また俗にトコロと云う名を引用している。南薩では，トコロといえば，根は苦くて食べられないものとなっているが，我国ではトコロの名は古く，食べ得るものと食べられぬものがあってそれらの種類の実態はつかみにくい。本朝食鑑３には，トコロ（野老）は処々家園に多く之を植ゆ，葉円大で花は三稜あって枯梗の微花の末だ開かざるが如くして碧色…根を煮熟……食味苦くして甘し山中自然生のものは肉痩せ甚だ味太だ苦しとあるが，和漢三才図会には，トコロは小白花を開き…其根長鬚多き為野老といい海老（エビ）と共に嘉祝の食品に充つとし，気味苦甘相半し之を煮て食えば甚だ佳也。山中自然生は肉甚だ苦く鬼野老と云うと記してある。その上わざわざ，トコロ，ケイモ，ツクネイモ，ナガイモの葉の比較図をのせ異同を弁じているのは興味深い。広益国産考４には，トコロは，花は黄色で２種類がある。１は葉少し長くやせて毛長く苦味多きもので俗にオニドコロといい，他は毛少なく（根に）苦味大いにうすきもので和名アマドコロという。前者の実は唐団扇の如くして雌であろうし後者は，実横に平たく洲浜のごとく之雄ならんといいトコロは何国にても極月に堀りて蓬来のかざりに用ふるのみにして常に堀りて食の助とせしことをきかず云々。同書の図では，アマドコロの葉は円形に近く，今名のヒメドコロではないようである。ユリ科のアマドコロの根茎は横走していて之を堀り取ってむして食べると甘い。朝鮮半島

中部山村で終戦の翌年6月に之を味わったことがある。土名トウングレはトコロに通じるようでもある。

(180) トジンバナ (ヒガンバナ) ―古老たちの呼名でまたトズンバナと云われるが一般にはヒガンバナまたはマンジュシャゲという和名で呼んでいる。この草は有毒であって葉時の草立の生態がスミラ (ツルボ) に似た所があるので, ドクスミラと呼ばれ, ツンベルグ植物誌 (380頁) にもこの名が見える。南薩では, ツルボをスンナ, スッナなどというので, ドクスッナ, ドクスンナと云われていたのが, ドズンバナ (吹上町), ドズッナ (内布) トズンナ (万世相星) などに訛ったものである。出水市では, ケサバナ (袈裟花) というが, ケサカケバナの縮まったものであろう。阿久根の漁民は, ヒトクチダコをとるのにこの鱗茎を二分して用うるが, 終戦後川辺郡笠沙町などにもこの法が伝わった。淡路などでも蛸の餌として漁に用い, タコイモという由 (和歌山県植物方言集77頁)。○和漢三才図会に, 葉は紀州では蜜柑籠の中にしく。小児花茎を取って寸寸之を折って念珠を作って頸にかけて遊ぶと記している通り, 今でも同様なことをして遊ぶことがある。即ちこの茎を交互に折り丸い輪を作り, 首にかけると赤い花が胸のあたりにきてペンダントのようになる。女児の遊び (大浦など) としてほほえましい状景である。また同書には, 泥土とまぜて壁を塗るとネズミの侵入を防ぐと実用面も香わせている。○支那中部にはシナヒガンバナの野生があって, ススキの原の陽地に秋日真赤な花の群生が見られる。わが国のヒガンバナの原種と見られている。同属のショウキン (黄花) は, 南薩では多く栽培され, 切花に使われることもあるが, これに似て花べんが狭く白質のシロバナマンジュシャゲも稀に栽培される。川辺町清水では, ヒガンバナと混生していたという。これを見ると花は, ほんのりと淡赤くあけぼの色であった。野生らしいというが確認はできなかった。本種はヒガンバナとショウキランとの雑種であるという論拠がある。ヒガンバナは不稔で子房も肥大しないが, 開花時花茎を切取って水さしにしておけば, 果実だけは大きくなる。シロバナマンジュシャゲも同様な結果が見られる。(156) 参照。

(181) トッガ (トキワススキ) ―陽地に群生し草立は壮大で冬も枯れない。大きな花穂は6月の初から出て7月には大方散ってしまうが, ススキは9月になってから穂を出すものである。真夏の出穂を珍らしがって, いちはやく写真入りでもう秋の気配が見えたと許り新聞が報導するのはこのトキワススキである。本物のススキは, なかなか穂を見せない。何年か前, 中秋の名月への供花に間に合わず, たしかモロコシガヤを代用したことを思い出す。トッガは, トッガガヤトッグワンホなどとも呼ばれ穂孕みのものは食用にされることがある。稈葉はかわかして炭俵をつくったりしたのでダッガヤ (吹上町など) とも云われる。ダッというのは炭俵のことである。また煙草苗床のカベに用いたりする。

(182) トッサゴ (ホウセンカ) ―庭先に古来よく植えられ, 白や赤などの花が葉間に見えがくれする状は, 親しみ深いものである。少し長目の緑果にふれると果皮はすぐ裂けてラセン状に巻き込み, 中から勢よく種子をはじき出す。巻いた果皮の形を巻貝 (サゴ) に見たてた方言かと永井亀彦先生は云っておられた (昭和24年頃)。ホウセンカは, 下学集 (文安1年即ち1444)

には見えず，易林本節用集には出ている。多識編（１６１２）には，鳳仙今案保弥奴岐俗云保宇世牟久和と記されている。〔巻２の１８丁〕。金峰町田布施の田植踊の歌の一節に，「一本苗（ヒトモトナエ）は米（ヨネ）の八石，清めの雨はばらいばらいと降りこむ。トッサゴの花は取れば手にしむ，霧島山は黄金はなさすお城が山は前は大川今ここ通る神に物めい」というのがある。本草綱目では毒草の部に入れてあって，鳳仙花というのは，その花が飛禽の状だからついた名で女人はその花と葉を乗って包んで指甲を染めると云っている。マニキューアーは古くからあったものだ。またこの花には蜂や蝶も近つかないと書いてあるのを，良安がとがめて，そんなことはない，特に蝶などは喜んでこの花の蜜を吸うのだとむきになっているのもおもしろい。

（183）トッノッ（ヤマモガシ）ートンノッとも云う。生長は早く樹皮は赤味を帯び長葉で鎌の柄などにする。割れやすくて薪にもよいという。加世田名勝志帳には，トキノ木の名がある。薩摩郡ではカマノキというが方言の意は，鎌，釜何れに関係があるのだろうか。火ノトキというのは正月火のタネを断やさずもやす薪株をいうが之につながりがあるのだろうか。この樹は南方遥かベトナムまで分布して越南山竜眼の名で呼ばれている。山竜眼というのは，「広中に出て，色青く肉竜眼の如く夏月実熟す食うべし」〔本草綱目による〕とある。筆者は残念ながらヤマモガシの果の味を知らない。

（184）トベラ（トベラ）ー山林中に普通に見られ，４月下旬から５月にかけ白花を開き，シャリンバイと花期が同じである。牛の飼料として好まれる。また牛の薬にするという（赤生木笠石など）。葉に異臭がある。「トベラ，除夕ニ国俗此木ノ枝ヲ扉ニ挟ンデ来年疫鬼ノ入ヲセギトス故ニトビラノ木ト云」〔大和諸品４５才〕，また和漢三才図会には，扉木，正字未詳，俗云止此良乃木，今云止閉良と出ている。磯間山中では，この木の根にキイレツチトリモチの寄生が見られる。

（185）トラゲン（ナワシログミ）ー原野陽地に自生し１０月下旬より白花を咲き，翌年６月結果は生食される。ムッゲン（麦グミ）という所もある（吹上町，金峰町など）。自在鉤には最良のもので，子ガカリの方が喜ばれる。カラダケ（マダケ），モソダケ（孟宗竹）など自在竹に用いられるが，ハチッダケ（ハチク）は光沢が出て最もよいという。コサッにはカシなど堅木を用いる。砂地にクロマツ植林の時は，アキグミやナワシログミを肥料木として間作する。

（186）ナキビシカズラ（ノブドウ）ー随所に多いつる草で茎を切れば水液が出やすい。切った茎を一方から吹いて水液を出して目薬にする。ナキビシはこの故の名であろう。上津貫では，バイバイカズラという。長野県の一部では，ナキビショというのはクマノミズキのことだという。ミッカズラ（主に日置郡），インガネッ（日吉町，金峰町，加世田，枕崎など），ガリガリカズラ（小湊，久志今岳など），カライガネッ（黒瀬など），キッネンカズラ（吹上町，金峰町など）トイッガネ（堀切山）など呼名が多い。○紫葛，葉もつるもかまえびに紛るばかり似て実のかたち丸きようにして丸からず不形なり一所に四五粒づつ付くふさにあらず大小まちりて付，色青くじゅくしてうす白く後になりるり色に成ルうへてながめ有〔広地７の２９〕

（187）ナスッ（ナスビ）ー最も普通に栽培される。多く煮て食べ時には漬物につくられるがそのまま生食することは殆んどない。古い作物で，奈須比〔和名鈔〕が現在まで通名となっている。

形は丸形と長形，色は青紫白と青紫黄斑のものなどがあったけれども，白くして銀の如きものは味が佳くないので栽培は少なかった〔食鑑３〕。そして丸くして紫なるを作るべし〔農全３〕とある。下学集１３に，茄子又名落蘇……花時取葉布路人践之則其実多生也と多収法のマジナイが記してあるが，之はもと支那から伝わったもので，「欲其子繁待其花時取葉布於過路以灰規之人践之子必繁也俗謂嫁茄子僧人多炙之甚美」〔西陽雑俎〕とあるを見れば肯かれる。昔は多く漬物として長期に利用できるので喜ばれた。塩をまぶす時に，「これはお前の塩だよ」とマジナイの言葉をかけてやれば，よく茄子に染まって色が久しく変らないのは不思議なほどだ〔和漢三才〕と書かれてある。これは支那伝来かどうか知らない。食鑑３に，然トモ今本邦夏時ヨリ秋ノ末ニ至ルマデ生茄ヲ食セザルコトナシ上下好デ之ヲ嗜ム或ハ香ノ物ト作シテ常食ス云々と出ているのを見るとナマの儘でも食べたものと思われる。しかし漬物としては一般的であったので，「茄子の塩蔵せるを種としてうふるによく生ず此奇事也」〔大和，附１〕などの記事も出るのであろう。南薩にもナスビにまつわる習俗が数あるに違いないがまだしかと確めていない。初物は値のいいものだが，京都東寺辺ノ里人茄子ノ初生ヲ目籠ニ入レ茄子一ツニ文二ツ三文ニ売リシト云〔嬉遊笑覧〕。貞享年間（１６８４～６）のことである。ナスビには，果実が扁平になった奇形のものができることがあって昨年そんな果実を珍しいといって届けてくれた生徒がいた。

（188）ナッデデ（ナツダイダイ）―昔は屋敷廻りに各種柑橘を１～２株ずつ自家用に植えてあった家もあったが今は店先で容易に入手できるので在来種もあまり栽培をみない。ナツダイダイは，小学校で行われる１日遠足（エンコウと云った）の時などよく携帯した。ウジュキッ，クネッ，カワバタ，キンクネッ，オンシュウなどの品種が古くから作られていた。これらの中には小学校卒業記念に明治末に植えられたのもまじっていた。クネッは厚い外皮もたべるものだと殊更にその固い綿のような甘苦い皮を味わったり，砂糖をまぜた黄粉（キナコ）をミカンの葉で少しずったしなんですくっては口に入れた幼時の想い出を持つ人も多かろう。元来柑橘の葉は単身複葉というつくりになっているので匙に使うことを思いついた一つの理由でもあろう。葉形について「凡橙ノ葉本ニ刻缺有テ段ヲ為シ果ノ蒂ヲ見ルガ如シ乳柑（クネンボ），柚，温州橘（ウジュキッ）サンズ之類皆然也蜜柑柑子……之類葉微窄クシテ段無ク狭ク長シ」〔和漢三才〕とあって同書に，橙（ダイダイ）など５種の葉の図が示されている。単にダイダイというのは，ショガッデデ（時にショガッデレと訛る）で正月「嘉祝の果」として用いられているが食べられない。栽培は稀であるが冬月樹上の果はあざやかで橙黄色濃く緑葉と相映じて見事である。夏になると「復た青に変じ新旧辨ずべからず故に俗に呼んで代代と名づく」と。また年を経たものは皮が硬化して褐色になるが之を「佩腰の具」とするとも記している。皮の燻煙で夏月蚊遣りとすることは昔からよく行われていたがこの故にダイダイを俗にカブスと云っていたと見える。今も本邦いずこかにこの方言が残存しているのであろう。南薩海岸地帯では，ハマゴウを蚊遣に焚く。種子島ではカフスメの名でこの植物を俗称しているという（西之表市など，平凾定行氏による）。蚊が橙皮に駆逐されたように，橙皮が蚊取線香に駆逐されつつあるこの地では今度は線香が「健康都市」に駆逐される日はいつだろうか。

（189）ナンキンイモ（サトイモの品種）ー古くからある栽培品種。新芽は紅紫色で晩生種。長崎に多し常の芋より味佳し〔大和付１の８〕，都芋日向わたりにて称ふ南京芋とも云り東奥にて黒茎（クロガラ），遠江などにて女芋と呼べり〔成形図説２２〕など見えるのがこれであろうか。今名赤芽芋というものに当るようである。

（190）ナンテン（ナンテン）ー手洗鉢付近などによく植えられる。年寄りが倒れかかった時などこの木につかまると難をさけよくなるという。冬季赤実は見事であるが，白実のものも稀に栽培される。和漢三才図会に，近頃子白南燭を出す以て珍と為すと出ている。シロナンテンは薬にする。ナンテンは葉を肴の掻敷などにすることは我邦古来のならわしである。南天を南燭と同じだと混同したのは明らかな誤りで，後者は，今名シャシャンボのことである。下学集１４に，南天日本ノ俗南天竺ト云フハ何ゾヤ云々と見える。園芸品種が多い。

（191）ニガゴイ（ツルレイシ）ー果実を食用にするため栽培されることがある。苦瓜，ホ加古宇利一云蔓荔枝〔和漢三才〕とあるを見れば，ニガゴウリが正名のようである。救荒本草には錦荔枝（キンレイシ）の名で出ているが閩広の人は，苦瓜と呼んで恒蔬としていて必ずしも救荒ではないと別人の書より註記している。瓜蔬疏を書いた王世懋は，泉州にあって城中遍地を見るに之を植えて苦瓜と名づけていて形は稍此錦荔枝より長いと云っている。これはナガレイシであったと思われる。この長い方が食用によいと書いたものがある。熟果は，「さねのつきたるあかき中子を小児くらふ味甘し」〔菜譜中〕と記され，甘味品の少なかった当時としてはありそうなことである。現今この地方では若い果皮を豆腐，肉類などと油いためして，ほろ苦い味を好む大人もあるが一般向きではないようだ。この植物は雌雄同株であって，「諸花（アダハナ）多シ帯（ヘタ）下に小塊アルハ花謝シテ瓜ヲ結ビ下垂ス」〔救荒本草啓蒙７〕など出ている。

（192）ニカゴ（ヤマイモの珠芽）ーまたミカゴともいう。源順日和名沼加古必大疫今世称無加古〔食鑑３〕と見える通りヌカゴ，ムカゴなどいわれる。煮熟シテ皮ヲ去リ之ヲ食フニ山薬（ヤマノイモ）ニ勝リ芋子（サトイモ）ヨリ美シ霜後之ヲ収ム墜落シテ地ニ在レバ亦根ヲ生シ易シと本草綱目に載せられている（元漢文）。糸につないで煮て食べたり，火に焙って食べたりする。子供らの好物で，食鑑にも「煮熟作果食……尤為小児之弄」と記されている。

（193）ニガシッ（サトイモ）ーサトイモの一品種。またミガシキともいう。一種美賀志伎芋あり俗言野菜芋ずひき芋なども呼り，子なく根より蔓のごと四方へ筋を延して其端より淡青茎を生ず云々〔成形図説２２〕。帯紅色の茎を煮て食べるにエグ味なく美味。この語源，ガッシイ（イモなど硬くて食べられないものをいう）に関連があるか。

（194）ニガタケ（メダケ）ー山野に自生が多い。筍は暗緑色で苦味があるからこの名がある。今は鰯（イワシ）を串ざしにして所謂メザシを作るほど魚獲もないが，大正末の頃までは，新川小湊であげられる量は，冬月極めて多く，付近の民家では一タメいくらで購入し，この竹を用いてメザシとして干しあげて随時食用にした家もあった。メザシダケなどの名もついている。ニガダキ（内山田など）ともいう。

（195）ニガッノッ（ニガキ）ー山林や人里近くの林叢中に自生する羽状葉の落葉高木。雌雄異

株で枝葉は苦い。材は黄色でセンダンに似，指物や床ぶちに用いられるが敷居など人のまたぐ所に用いるとよくないという。

（196）ニラ（ニラ）ー古い食用作物の一つ。支那では殊更に賞用され，冬季畑中ニラに土寄せして韮黄と称し現今でも喜ばれているがこの地域ではこの風はみられない。葉を摘んで味噌汁に入れたりする。また米粒とこの葉をねりあわせてヒエヌキの薬にすることもある（阿多など）という。この菜は，植えかえもせず年中植えたまま放置していても収穫があるので懶人菜（ナマケモノノ蔬菜）というと斉民要術１（　　）に出ている。９月頃白花を正開する。鱗茎の基部には根茎があって外面は枯死した繊維に包まれていることは，他のネギ属蔬菜と異なっているが，野生種セッカヤマネギの地下部は之に類似している。この点ヤマニラと称する方がふさわしい。セッカは花茎が扁平であるので石化即ち帯化の語を冠したまでである。大陸産のもので北部朝鮮では海岸の崖の上などに見られることもある。

（197）ネコヅメカズラ（　　）ー山中にあって小さいトゲがあるが少ない。タニワタリと見まちがう程であるが，タニワタリには葉柄と裏側にトゲがあるという。堀切山，大浦大木場などでは，カギカズラのことをネコンツメという。

（198）ネコヤナッ（ネコヤナギ？）ーヤナギ類は，この地域に数種あって，早春花序を出し，苞の白毛が絹毛のように光沢があるのでこの名がある。雌雄の花を別株に開くが時には同株のものも見付かる〔南薩の植物１０頁〕。正月この枝でケズイカケ（削り掛け）をつくって１本宛仏前や墓前に供える習慣があった。

（199）ノビー（ノビル）ー原野に普通に見られるネギ属の草。５月中下旬から白質帯紅小花を開き花間基部に紫黒色の珠芽を数個もっている。茁は食用にされることもある。ノビッチョ，ノビッチョン，ノビロの外ノビンツッゴ（吹上町永吉・益山など）とも呼ばれる。またヌビ（高倉益山など）の名もあって，古事記中の怒毘流の名を思い出させる。

（200）ノユリ（コオニユリ）ー原野，川岸などのヤブの中から６月に朱紅の花を横向に咲く。オニユリも見られるがコオニユリが多い。またヤマユリともいわれる。笠沙，大浦方面に多く見られるノヒメユリを同地では，ノユリまたはボンユリという。ユリ属の仲間外れといった感じのウバユリは，背高ノッポで葉は心臓形，金峰山や藤元方面に見かけたが，加世田地区にあるかどうか。

（201）ハイマケ（ハゼノキ）ー山野に野生状のものが多いが，金峰町鉄道沿いの畑地には往時植栽され，採蝋されていた。今ではその名残りの古株も少なくなった。ヤマハゼはこの種に似ている唯枝先や葉の両面に毛が多いので別種として学名が１８４３年につけられたが命名した当人らもハゼノキの変種とすべきかと記している。秋１１月頃からはじまる紅葉は，カエデの代りに山野を見事に色どってくれる。ハゼノキは，天正の頃南方より薩藩へ渡来したようで，筑前博多へも同じ頃支那から導入されたという。その後，薩藩の木実は，享保９年（１７２４）に熊本へ元文の終頃（１７４０）紀州へ出され，その他の名産となった。山でヤマハゼにうっかり触れて１両日全身カブレを生じて苦しむことがよくあるので恐れられる木になっている。ハイマケにま

けたら（かぶれたら）天ぷらとタケノコを食べさせるなという。

（202）ハカシバ（ヒサカキ）―墓柴の意で墓前に供えるシバは殆んどこの種である。山口県では，シキミのことをハカシバと称するという。

（203）ハタケフズッ（センナリホウズキ）―畑地などに見かける1年草で小形のホウズキで女児は遊びに使う外，この緑色熟果を食べることもあるが，高血圧の薬にすることもある（浦之名など）。イシフズッ（万世など），ノフズッ（川辺町など）ともいう。別属であるが野生のホウズキに，ハダカホウズキ（紅色球果）ナガミノハダカホウズキ（楕円形果）〔あふち10号図〕イガホウズキ（帯白球果）が長屋山など山地にあり，稀にテリミノイヌホウズキ（黒紫色球果）が吹上町などの畑地にある。

（204）ハチッダケ（ハチク）―モソダケとカラダケの中間の大きさで，枝の第1節間部は中空になっていなく，竹の皮には斑紋がなく赤褐色である。七夕竿に最適。カラダケ即ちマタケと同様各種竹製日用品の材料とされてきたが，近来は人造品に圧倒されてそれらは姿を消しつつあるものも多い。稈は丸のまま物干竿にしたり，雨傘の柄にしたりする。宮原傘というのは，加世田市益山の竹屋神社のある宮原の地を冠したものである。筍は食用にされ，竹の皮は食品を包むのに用いた。飴を買うた時はタケンカワはクルッデネ（あげよう）という言葉もよくきかれた。

（205）ハナイシミ（ニワウメ？）―ハナウメの意。チゴザクラ（方言）の様であって果実は生食するがすっぱい。

（206）ハナグシカズラ（ツルウメモドキ）―山地に見られる雌雄異株の落葉性左巻きの藤本このつるのキセル竿程のものをとり鉈でコスリ青白の渋皮を除き，牛の鼻くじに使う。代用品としてヤボフッチェンカズラ，ヤマフジ（紫花短花序），ンベ（何れも方言）など使われる。カズラを湯に浸しまたはめでて皮を除いて用いる。この植物を高血圧の薬にする（阿多浦之名）所もあるらしい。堀切山でチキメカズラ（チキイの目即ち桿秤の目盛の意。カズラの色赤く常緑，松杉によくはうという）というのが牛の鼻グイによいと聞いたが実物未詳。

（207）ハナコボシ（カヤツリグサ類）―原野に普通の雑草。カヤツリグサ，コゴメガヤツリなど茎を四つにさいて蚊帳（カヤ）を作る遊びをする。○俗名蚊帳鉤草者葉穂大共続根草（カウフシ）無異但根細髭而無子引易抜其茎三稜小児裂中間引拡以比鉤蚊帳為戯蓋此可謂香附子草之雄乎〔和漢三才〕と出ていて蚊帳鉤の童戯のことやこの草は根に球茎がないから香附子（ハマスゲ）の雄だろうかなどいっている。地下肥大茎の有無によってメン（雌）とオン（雄）を区別する例は，ウバユリなどにもみられ，県外では山口，鳥取県など〔内藤氏鹿児島民俗植物記264頁〕本県では，宮之城町平川などがあげられる。

（208）ハナシンミ（ツルウメモドキなど）―ハナシ（メジロ）が食べる果実の意で，おもなものはツルウメモドキ，ハマヒサカキなどで，前者はよくハナシ捕りのオトリカゴに入れたりする。

（209）ハナタコ（ヤマノイモの果実）―子供の遊びに使う。鼻天狗ともいう。（179）参照。

（210）パパラ（サルトリイバラ）―カカラより転じた語でもとはクヮクヮラと正しく発音していたが，大正の終り頃，学校で火事と家事を同発音で習うようになった頃から次第にカカラに変

ってきたのが更にくずれて子供らの間でババラにしてしまった。若葉の程よい硬さのものは5月節句に団子を包むが大葉は1枚を2つ折りにし，稍小形葉は2葉間に包んで蒸してつくる。老葉は硬化して恰も常緑葉の如くであるが，晩秋になると葉柄部を残して葉は殆んど　まぬ形のままこぼれ落ちるように落ちてしまう。クァラクァラ落ちると形容できそうである。雌株には赤い球果が残る。茎に硬いトゲが散生する。サツマサンキライはトゲがなく稍長形葉で常緑黒果を結ぶ別種で山中に見かけるが，サルトリイバラほど多くない。

（211）ハマユイ（ハマオモト）一普通ハマユウともいう。ハマユイは浜百合の意だけれども正しくはユリ類でなくてヒガンバナ科のものである。イトバナ（日置郡日吉町以南など）と呼ばれることもある。戦後しばらくは野間岬や枕崎海岸などに野生が見られたが現在では殆んどないようである。庭園に観賞用に栽培され，時にはその偽茎の白い薄皮は，腫物の吸出し用に患部に貼付する。6月から白花が着き，後大きな果実を花茎頂に数個ずつ着けるが重さに耐えかねたように倒れて地面に着いたのをよく見かける。新川海岸にはこの野生は絶えてないのに，この種子を波打際に拾ったのはどこから漂着したのだろうか（1969年11月）。

（212）ハヤトウイ（ハヤトウリ）一菊野氏によれば大正10年秋はじめて津貫に植えたという。味噌漬，ドブ漬（酒粕漬）などにして食用にする。この瓜は日置郡永吉村の矢神という人が大正5年頃メキシコから持ち帰ったもので大正7年玉利喜造氏の命名という。ブタウリというのが日置，川辺郡などでいわれているがこの瓜のことか，或いはボタ瓜〔加世田名勝志帳〕のことか確かめていない。

（213）ハンノコ（マルバハギ）一南薩の野生ハギは殆んどこのハギで中秋の名月への供花の1つである。磯間山にはキハギがあり，頂上近くにサツマハギが見られる。キハギは他に比べ落葉が早いようである。

（214）ヒゲヒッパイ（オオバコ）一津貫で子供間にきかれる名で．ヒッパイグサ（金峰町池辺など），ヒッパイクランボノクサ（加世田市長屋など）いずれも同じ童戯に由来した方言で，2本の花茎をひっかけてひっぱり合い強さを争うのである。路傍どこにでもある多年草で各地でみられる遊びであろう。路上にしゃがみ込んで集まった子供が何やらさわいでいるので近よってみると1匹の蛙の死を哀れんでその体の上にオオバコの葉をかぶせて，蛙のトムライをしている所だったと俳人一茶が記しているのを読んだことを想い出す。カヘルッパという名は蛙がこの草の葉の下などに潜んでいるからかとぼんやり思い込んでいたら，この葉をホオヅキのようにふくらませた形が蛙の腹に似ているからだという。本草名で車前草というのは車を引いて先行する牛の足跡などによく生えているからついた名前だそうである。30年許り前，中支でこの若葉を摘んでいるショウハイ（子供）に名をきいてみたらコーマーイー（蝦蟇衣）だという。湖北などでもオオバコのことをカエル族の着物と名付けているらしい。（39）参照。

（中篇終り）

上津貫付近の植物

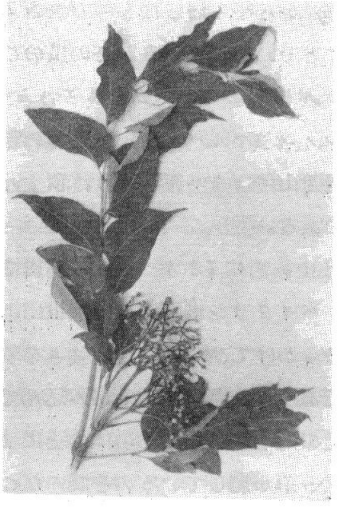
（第１図）

（第２図）

（第３図）

（第４図）

（第５図）



〔写真図説明〕

（第１図）コゴメイワガサ（花）磯間山峰通り
（第２図）ムサシアブミ（果）磯間山下腹林中
（第３図）アメリカフウロ（花）上津貫駅付近
（第４図）キリシマエビネ（花）磯間山南中腹
（第５図）ハマセンダン（雌花）　同　上
〔１・３・４は５月、２は１０月、５は９月写し〕

園　芸　メ　モ

2年　金竹修一

＜夏から秋咲き草花の手入れ＞

＜4月＞

14　温室内の除草　シャリンバイ・トオガタマが咲き始める。クヌギ満開

15　花壇の整備

16　忘れな草が開花　ギョボク芽をふく

17　雨のためチューリップが倒れる　小町草・フロックスが発芽

18　温室周辺の草刈り，除草

21　オオバコの種子を播く　オジギソウが発芽

24　アリッサム・なでしこを円形花壇へ定植

26　チューリップの球根を堀り取る　黄エビネ・がんらん・つつじを植える

30　乙女椿・ねむの木・ギンモクセイ・せんだん・サルスベリ・ヒイラギの新芽

苗床の整備。クジャク草・ハイビスカス・ブーゲンビリアがつぼみをもつ

＜5月＞

1　播種（夏から秋咲き用）

2　グラジオラスの植えつけ

8　ねむの木が新芽を出す。　バラの花咲く。　ハイビスカスの花咲く。

29　コスモス・百日草・フロックスの定植

＜6月＞

2　けいとう・葉げいとうの間引き。　なでしこの種子取り

3　パンジーを播く。　コスモス・百日草の定植

タイサンボク・月下美人がつぼみをもつ。　カイコウズ満開

4　マーガレットの開花

7　ネムノキの開花

9　フロックス・小町草の定植（職員室前）　カッコアザミの間引き

12　百日草・葉げいとうの定植。　トウワタのさし木

23　かっこあざみの定植。　ネムノキ満開。　キョウチクトウ咲き始める。

24　マリーゴールド・サルビアの定植。あじさいの開花。　タイサンボク開花

＜7月＞

11　ねじ花の開花。ヒゴスミレを植える（大野岳産）　がくあじさい咲き始める。

12　集中豪雨（6月28日－7月12日）のため苗がいたむ。百日草8分程咲く。

14　オジギソウの開花

15　大菊の苗を鉢に植える

21　テランセラの定植。サルスベリ咲きはじめる

23　松葉ボタンが開花

26　サルスベリの花が満開

29　サルビアが開花

31　大菊・トウワタに，エンドウ・マラソン剤をかける。ナンキンハゼ咲く。

＜8月＞

1　ひまわり開花

2　かいこうずの花が咲き始める。

18　ひまわりの種子取り。ぶっそうげが開花。ネムの木咲き終わる。

28　フヨウが開花

＜9月＞

4　大菊の支柱を立てる。フヨウ満開

12　クコが開花

18　コスモスが開花。キミガヨランがつぼみをもつ。ヒマワリ咲き終わる。

＜10月＞

4　播種（春から夏咲き）テランセラを移植（体育館前へ）

7　サクラの狂い咲きがみられる。ギンモクセイの開花

12　カイコウズが今年3回目が開花。オシロイ花が満開。サルスベリ咲き終わる。

23　チューリップ（15球）・アネモネ（5球）・レナンキュラス（9球）を鉢へ植える。大菊がつぼみをもつ。　花びし・レナンキュラスの定植。虞美人草を播く（図書館前へ）

25　すいせん・チューリップ・かすみ草の定植。百日草の種子とり。

＜11月＞

6　葉牡丹を定植（図書館前へ）

7　アリッサムが開花，花びし・虞美人草の間引き　大菊の満開

13　ポインセチャの葉が色づき始める。

14　葉牡丹を定植（中庭・職員室前）アネモネ・レナンキュラスが発芽

20　金せん花・かんざし（ドライフラワー）・矢車草の定植

＜12月＞

4　ボケ・レンギョウ・ヒイラギが開花　ペチュニアの定植

5　矢車草・石竹の定植

8　金せん花・かすみ草の定植

9　金魚草の定植

17　石竹・貝がら草の定植

24　花びし・虞美人草の間引き

〔一年間の反省〕

部員全員が草取り，花壇の整理とよくやったと思う。今年は集中豪雨のため，苗がひどくいたんだり，成長不良であったりしたがどうにか花だけは咲かせることが出来た。また大菊の栽培を初めてやったが，いろいろとかってがわからなかったりして，花を咲かせるのが精一杯であった。今後ますます花壇をにぎわすりっぱな花を咲かすように努力してほしい。

1969 年度文化祭反省

(出　展　物)

〔実験コーナー〕

- 酵素に関する諸研究
  - 生体内にある酵素
  - 酵素のはたらきに影響する要因
- カエルの心臓はく動実験
- せきついカエルの実験
- 光合成に及ぼす波長の影響
- イネ科植物の成長点の研究
- フヨウの花に関する研究
- ウサギの解剖

〔昆虫コーナー〕

- 昆虫標本展示
- 蝶の生態

〔調査コーナー〕

- ＰＴＣ実験
- 血圧測定
- 血液型検査

〔販売コーナー〕

- 蝶のリン粉転写
- 葉脈標本

その他

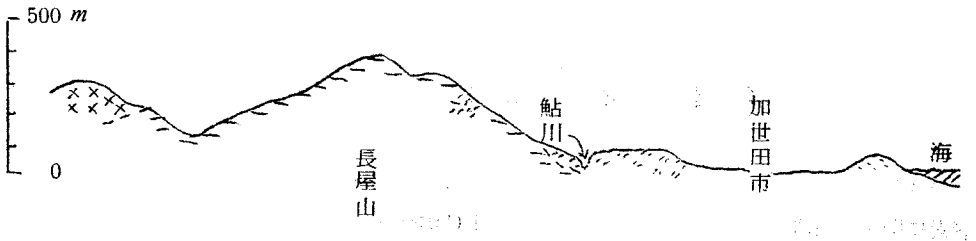
- 植物写真展示
- ネムの木の観察結果の表示
- 植物標本展示（進化段階によって分類）
- 他校機関誌紹介

今年の文化祭は，準備がうまくいかずに最後にガタガタした感じがしないでもないが，なんとか無事に終えることができた。今年は，何かテーマのようなものを決めてはどうかということから酵素についてやってみようということになったのであるが，その選び方がまずくて単なるかけ声だけに終わってしまった。また展示方法を工夫しようと各コーナーを設けるようにした。このようにさまざまの新しい試みもやったが，反省を聞くと，テーマについては，「選んだものが難かしすぎた。」「本質がよくわからない。」といったふうにあまりうまくなかったようである。その他のものをやった人で多いのは，「準備不足だった。」とか「研究不足で突然の質問に答えられなかった。」ということであった。もっと早くからじっくりと研究したものを発表しなければならないとつくづく感じさせられた。（田中）

加世田市周辺の地質

山元英司

本地域の地質を構成するものは，主に四万十累層群・薩摩半島花崗岩質岩類・南薩安山岩類・火砕流堆積物・砂丘砂層および沖積層で，その他に　岩・河川堆積物・凝灰岩および層灰岩，二次シラスおよびローム層などがある。これらの地質と地形とは非常に密接な関係を持ち，第一図に示されるように地形区分される。



本地域の基盤岩は四万十累属群であり，長屋山塊および蔵多山塊を構成している。これは四国に発達する四万十層群の南西延長部であり，中世代白亜紀から新世代古第三紀にかけての地向斜堆積物が幾多の地殻変動後に隆起したもので，複雑な地質構造を呈し，小さな断層や褶曲は各所に認められる。

本層は薄い礫岩層を挟む所もあるが，細一中粒・青灰色硬砂岩，黒灰色頁岩および砂岩頁岩細互層よりなる。これらの岩石は非常に緻密堅硬であるが，一部分風化され赤褐色を呈する。本層の走向はNS～N 30°E，傾斜はほぼ垂直である。

これらの基盤岩類を岩脈状・岩床状およびドーム状に貫ぬいているのが薩摩半島花崗岩質岩類で，石英斑岩・花崗斑岩および石英粗面岩（流紋岩）を含んでいる。斑岩特は互いに漸移または単独に貫入し，これをさらに石英粗面岩が貫ぬいている場合もある。これらの岩石は薩摩半島に散在する花崗岩質岩類とほぼ同一時期の中新世に貫入したものであり，化学成分および岩石学上の性質は酷似する。新鮮な岩石は淡緑色で非常に緻密堅硬な岩石であるが，風化に弱く黄褐色～黄白色の土壌に化している所が多い。蔵多山，東山および長屋山周辺には小規模な貫入岩体が散在するが，越路から大浦にかけての道路ぞいには大きなドーム状岩体が見られる。大浦のポンカン園はこの風化土壌上に存在する。これらの岩石の貫入により基盤岩類は接触変成作用を蒙むりホルンフェルス化している所も認められる。また，主成分鉱物の黒雲母のほとんどが緑泥石に変

質しているのを特徴とする。

大浦町東部には輝石玢岩の小規模岩体が認められる。青緑色で硬い岩石であり，先述の斑岩類を貫ぬいている。

野間岳と磯間山を結ぶ線より南側では，基盤岩類および薩摩半島花崗岩質岩類を不整合に覆い新第三紀末の火山活動に伴なう噴出物である南薩安山岩類が広く分布している。

これには輝石安山岩，角閃石安山岩および安山岩質集塊岩（凝灰角礫岩および角礫凝灰岩も含む）が含まれる。安山岩質集塊岩は類質および同質の火山礫および火山岩塊を凝灰質物質で団結したものであるが，風化や浸食に弱く磯間山のような奇峯，奇岩をなす。

加世田女子高校前の高台は基盤岩類を不整合に覆い，上に熔結凝灰岩で覆われる厚さ十数メートルの加世田巨礫層からなっている。礫として，基盤岩源・花崗岩質岩類および安山岩類がありこれらは陶汰が悪く亜円礫が多い。

火砕流堆積物は更新世における姶良火山および阿多火山の噴出物で，ほぼ鹿児島県全域に分布している。これらは等高線にほぼ並行で谷を埋めるように堆積し，緩傾斜の火山灰台地を形成する。しかし非常に浸食されやすく，万瓶川上流や支流および枕崎市を流れる花渡川に見られるように，河川や小規模の谷を刻む。

火砕流堆積物は熔結部の熔結凝灰岩および非熔結部のシラスからなるが，これらはほぼ同一成分である。

熔結凝灰岩は新鮮な部分で灰～灰黒色を呈するが，風化されやすく赤褐色を呈することが多い。また，非常に空隙率が大きく，軟らかいのが特徴であり，墓石や建築材料として使われる。主に斜長石，輝石，角閃石および石基からなり，流状構造を持っている。シラスは多くの軽石を含む細～粗粒砂で，吸水性は大きいが含水性は小さく，一種の火山灰であるため，肥沃でないので農耕にはあまり適さない。

吹上浜は日本三大砂丘の一つであり，日置郡江口付近に始まり，小湊に達する南北延長約４０キロメートルで，現在の海岸線にほぼ並行した砂丘である。これは古期砂丘砂層と言われ，後背地の山や岩が浸食または風触され運搬されたものが季節風で堆積した中～粗粒砂からなる。この上にハマゴウやクロマツが生育している。また，大崎付近では高さ十数メートルの残丘状形態をなす。

河川は後背地の山や岩を浸食し，それらの砕屑物を下流に運搬する。そして流域が広く流速の緩やかな所に堆積する。大きな河川の流域・河口に，これらの堆積物は長い間に広大な平地を形成する。加世田も万瓶川によって運搬された河川堆積物上に存する。これは沖積物であり，砂・礫および粘土からなる。また河川の流路および規模も時代とともに変化するものであり，竹田神社の周囲にも河川堆積物が残存する。

地上層は新期の火山活動に伴なう厚さ数十センチメートルの火山灰層で黄色～赤褐色を呈する。

以上，加世田市周辺地域の地質概略を述べたが，岩石等やシラスなどの性質・成分も全く異なるから，これらの地質と植物分布との関連性を検討することも興味あることであろう。

第 1 表　模式柱状図

時代			層序		岩相および岩質	火成活動
新生代	第四紀	沖積世	沖積層およびローム層		砂，礫および粘土	
		更新世	古期砂丘砂層	河川堆積物		
			火砕流堆積物		(非熔結部) シラス (熔結部) 熔結凝灰岩	
	新第三紀		層灰岩層	加世田巨礫層		
			南薩安山岩類		輝石安山岩 角閃石安山岩 安山岩質集塊岩	火山活動
			玢岩		輝石玢岩	
		中新世	薩摩半島花崗岩質岩類		石英斑岩，花崗斑岩 石英粗面岩	花崗岩質岩類貫入
	古第三紀		四万十累層群	日向層群相当層	砂岩，夏岩および礫岩 (全体的に砂岩優勢)	
中生代	白亜紀 ― ジュラ紀			川辺層群相当群		
				一勝地層群相当層		

～は不整合

蝶　を　取　る

3年　平川忠久

「ある晴れた日，遠い海のかなたに……。」と，お蝶夫人が歌ったのと同じような気持？でぼくが蝶を探し求めはじめたのが入部してから2年目のこと，1年目のころはいまほど蝶に対する関心はなかったので採集に参加した時は，終日先輩のあとをシェルパのように，いや野ら犬のように付いてまわるだけでネットは手に持っていても杖がわりで蝶を手にしたことは一度もなかったことを記憶している。だからぼくは，手身近にいるモンシロチョウの飼育はもちろんのこと生態すらあまり知らなかった。このことがその後のぼくの蝶の飼育の失敗の原因に幾度か関係したのだろうと，今では深く反省しています。

2年生になってはじめて久志方面に採集に出かけたとき，ぼくが蝶を捕えたのが，ちょうどぼくが1年のとき先輩たちが躍起になって追いまわしていたツマベニチョウであった。それは産卵中で，しばらく観察できたのだけれど興奮のあまり乱暴にネットに叩きこみ無我夢中で持ち帰ったことが今でも忘れられぬ最高の思い出の一コマとなっています。このことについて書くことはあまりにも自慢たらしいからやめよう。でも惜しいことをしたなと今は思う。もしこのときのことを印画紙にでも焼付けておけば，今でもそのことが新鮮に脳裏から蘇がえってきたのであろうに。その後ぼくが当地に行ってもツマベニチョウに出くわすことはめっきりなくなった。あの迫力ある姿もあれきりだったのかとぼく自身思うと果敢なく思うと同時になぜ，ぼくの前からいなくなったのか疑問さえ感じる。またいつか当地へ行ってみよう。

ぼくの蝶採集箱には，書きにくいことだけれど，手身近にいる蝶類，モンシロチョウがいないそれも最初の収集箱に収めるべきなのかもしれない。そんなことをとりあげて書くことは無意味なことだろうが，ある「蝶屋君」がモンシロチョウのいない収集なんてとあまり関心した口調で話してくれなかったことが今でも耳の奥からはなれない。事実そうなのかもしれない。また，ぼくの知っている「蝶屋君」たちはたいてい手身近な蝶を何度も飼育し，それからいろんな蝶の飼育にのり出したと話していた。その点，ぼくは全く基礎的なことをやらずいきなり数少ない重厚がられる蝶から飼育を始めたことを恥ずかしいと同時にそれ以上にそれらの羽化率が良くなかったことに一番恥ずかしい思いがする。だから最近ネットを振っても蝶君がめったにひっかかってくれないのかな。でもそれはそれでよい。これから，ぼくは自然の中を飛びかう自由な蝶をできることならカメラに収めてゆくことができたらと思う。

卒業にあたって

3年　福島文徳

早いものでもう卒業。僕自身としてこの生物部には入っていたことが，最も高校生活の中心をなしていそうな気がする。おかげで自然界のいろいろな生物に接し，いろんな事実を収し得た。ときには僕達には眼も向けてくれない時もあった。しかし僕達はそうした自然界の生物について少なくとも，二年間ではあったが精一ぱい研究し，学んで，仲良くなった。しかし時には，裏切られた時もあった。自分の力をこの世の中で精一ぱいやれたことが一番うれしかった。部生活の二年間を通してもいろんな思い出があった。仲間とおそくまで部活動をやり，時には先生にガラレたりイヤミを言われたりしたこともたびたびであった。部の運営の事についてマジメに話し合った。そういった学校内の短い期間ではあったが，僕の得ることのできたものは何よりもまして大きく，どれだけ自分を元気づけてくれたことか!!

「文化祭」「調査会」など，豆つぶのような少ない知恵をふりしぼって計画し，実行してきたが，時にはむごい事も平気でやった。そんな僕が，花を愛し，蝶を愛するようにこの生物部を愛している。人間にもそうであるように，人間と人間との触れ合い又友情のありがたさを，しみじみ感じさせてくれてほんとうにありがとうと言いたい。

思えば，生物部には入って，日もそうたっていない新入りホヤホヤの頃，なにも知らないこの僕に，「ネットはこうやってたたむものだ。」「蝶の飼育はこうやるのが一番いいんだ。」という先輩の親切に教えてくれた言葉も，今となって，飛ぶことを初めて知った小鳥のように僕の心のの片すみにへばりついて話しかけてくるような気がする。先輩達がそうであったように，僕達も又後輩に何か言い残したいが，何一つしてやれなかった我々のふがいなさに，腹が立つやら，はずかしいやらで，すまない気がしてならない。

最後に，この生物部が，前にもまして，明るくそして楽しい部であるように又，「まのせ」が，長く生き続けることを祈念しながらペンをおきます。

1970，2，13

生 物 部 員 名 簿

顧問　　佐方敏男　新山茂久

3 年

平 川 忠 久
尾 辻 公 一
西 村 和 之
福 島 文 徳
川 崎 知栄子
新 田 美千代
新 田 ゆり子
竹ノ内 久 子
中 尾 貞知子
中堂園 英 子
本 坊 和 代
山 内 園 子
山 口 光 子

2 年

田 中 洋 海
大 迫 祥 三
金 竹 修 一
浜 川 知 博
春 成 正 和
本 坊 敏 保
山 口 力 三
有 馬 満 代
大 島 靖 子
小野田 章 子
阪 本 京 子
崎 山 順 子
崎 山 民 子
田 実 初 子
樋 渡 祥 子
前 田 久美子

1 年

阿久根 雄 二
山 口 秋 生
山 下 志 郎
下 園 弘 子
園 田 栄 子
中 間 睦 子
西川路 孝 子
本 田 ゆみ子
前 田 栄 子
森 永 香代子

(1970年1月現在) 39名

編　集　後　記

我々は歩いた。加世田高校生物部員として。まだ，ほんのヨチヨチ歩きのあひるみたいなものだったとしても。ある日，やぶの中をかき分けながら行くと「おっ！ゴキブリ！」「やった！採った！採った！」「わあーすごい収穫！」と大喜びしたやつもいた。そして，なおも歩き続けた。

こうしてりっぱに完成させることができた「まのせ」７号を見ると，ほんとうに我々は進んできたんだなあと新たに思われてくる。たとえここにあげた記録が不完全だったり，時にまちがっていたりしたとしても我々は実際にやってみたんだという自信と満足感はある。ここに「まのせ」７号を刊行できたことをほんとうにうれしく思います。

最後に顧問の先生や先輩の大原賢二さんはじめ多くの方々の御協力に深く感謝しこれからもなにとぞよろしくお願い致します。　（　田中洋海　）

鹿児島県立加世田高等学校生物部機関誌　**まのせ７号**
発行日：１９７０年3月２０日
発行者：鹿児島県加世田市川畑　加世田高校生物部
編集者：田中洋海　大迫祥三　浜川知博
印　刷：鹿児島市城山町１２－１７　**明るい窓社**（ＴＥＬ㉒８３３５）

正誤表

P.53 L.18 最崎鼻 ⟶ 長崎鼻
P.55 L.15 使わ小た。(第5図)
L.22 [和賀三才] ⟶ [和漢三才]
P.57 L.6 初更 ⟶ 初頃
L.14 リムチキウゲ ⟶ リムチヤウゲ
P.59 L.6 おひて ⟶ めひて
下より L.6 コゴメシモツケ ⟶ コゴメイワガサ
〃 〃 磯間山産。(第1図)
P.62 L.3 コマッナッ ⟶ コマツナッ
P.63 L.24 奇出 ⟶ 寄生
下より L.3 大きな円錐状
下より L.2 茎の髄部
P.64 L.11 帯赤黄色 ⟶ 帯淡黄色
L.27 卵形波状縁 ⟶ 卵形波状縁
P.66 L.1 [同上3の3才] ⟶ [同上3の3才]
L.16 薩政時代 ⟶ 藩政時代
P.67 L.8 あろう。[第2図]
P.68 L.8 スモイトサトキッ ⟶ スモトイサトキッ
P.69 L.3 トズンバナ ⟶ トズンナバナ
L.17 ショウキン ⟶ ショウキラン
P.70 L.6 葉を乗って ⟶ 葉を乗って
L.19 45才 ⟶ 45才
P.72 L.19 多シ帯 ⟶ 多シ帯
P.73 L.7 斎民要術I ⟶ 斎民要術3
L.34 その他 ⟶ その地
P.74 L.21 めでて ⟶ ゆでて
P.80 L.図下 沖積平地区
P.82 L.20 夏岩 ⟶ 頁岩